
●追いつめられた十津川警部
越後・会津殺人ルート
西村京太郎
講談社
NOVELS

著者のことば

刑事は、生命の危険があるとわかっていても、逃げることが許されない職業の一つである。越後から会津にかけて巧妙に仕組まれた罠。それを、十津川が、自分に仕掛けられたものと予想しながら、立ち向っていくのも、彼が、刑事だからである。

犯人も、また、刑事の十津川が、絶対に逃げないこと、必ず、自分を追いかけてくることを予期して、罠を張るのである。どちらが勝ちを収めるのか、皆さんも、楽しんで読んで下さい。



越後・会津殺人ルート

追いつめられた十津川警部

西村京太郎

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

ブックデザイン＝熊谷博人
カバーイラストレーション＝辰巳四郎
本文イラストレーション＝山本博道

目次

第一章　甘い餌——7
第二章　磐越西線の女——41
第三章　女の肖像——75
第四章　釈放への道——109
第五章　対決——142
第六章　再び越後・会津——176

第一章　甘い餌

1

五月十三日の早朝、井の頭公園内で、若い女の刺殺体が発見された。

初動捜査班の佐伯警部たちが、すぐ、現場に、駈けつけた。

黄色のワンピースの背中が、血で、朱く染っている。恐らく、ナイフで、刺されたものだろうと、思われた。

検死官は、昨夜の午後十時から、十二時の間に、殺されたのだろうと、佐伯に、いった。

死体の傍には、白いシャネルのハンドバッグが、転がっていた。

佐伯は、手袋をはめた手で、そのハンドバッグを開け、中身を調べた。

五万三千円入りの財布、口紅、運転免許証が、まず、眼についた。

「物盗りの犯行ではないのか」

と、呟やきながら、佐伯は、免許証に、眼を移した。

原田みゆきの名前と、この近くの住所が、書かれていた。

「この住所へ行って、確認して来てくれ」

と、佐伯は、部下の刑事に、いった。

ハンドバッグには、この他に、大きめの封筒が、二つに折って、入っていた。

佐伯は、その中身を、調べてみた。

まず、出て来たのは、予約の列車の切符である。

何枚も重なっているのは、いろいろな列車の切符が、混っているからだった。

一番上にあったのが、浅草から出ている東武電車の特急「スペーシア」の切符である。

しかも、今日、五月十三日のものだった。行先は、下今市まで。その先は、野岩鉄道、会津鉄道を使って、会津若松へ行く切符も、あった。

（彼女は、今日、会津若松へ行くことになっていたのか）

と、佐伯は、思いながら、更に、封筒の中を探して、一枚の名刺を見つけた。

その名刺を見て、佐伯の表情が、険しくなった。

〈警視庁捜査一課

警部　十津川省三〉

と、その名刺に、刷られていたからである。

佐伯は、十津川とは、同期で、警視庁に、入っている。もちろん、十津川が、この殺人事件に関係しているとは、思わなかったが、彼女のハンドバッグに、彼の名刺が、入っていたことだけは、間違いないのだ。当然、新聞、テレビは、今度の殺人事件の報道の中に、十津川の名刺のことも、記事にするだろう。と、なると、一般の人たちの中には、被害者と、十津川の関係を、勘ぐる者も、出てくるかも知れない。

佐伯は、この事件を報告する時、特に、十津川の名刺があったことを、付け加えた。

それを、刑事部長が、どう判断するか、佐伯にも、わからなかった。十津川に、この事件を担当させないことにするかも知れないし、逆に、十津川に担当を命じるかも知れない。

二十分後に、パトカーで、十津川が、駈けつけて来たのを見て、佐伯は、苦笑した。

「どうやら、君が、この事件の捜査を買って出たらしいな」
と、佐伯は、十津川に、いった。
「ああ。私の名刺があったと聞いたもんだからね」
十津川は、生真面目にいい、佐伯の差し出した名刺を、じっと、見つめた。
「君の名刺に、間違いないか？」
と、佐伯が、きく。
「ああ、私のだ。去年の十月に、こしらえたものだよ」
「仏さんは、解剖のために、K大病院に運んだよ。これが、運転免許証だ」
「原田みゆきか。名前にも、この顔にも、記憶がないな」
と、十津川は、免許証を見て、いった。
「住所は、この近くのマンションだが、そこの管理人の話では、仏さんは、新宿のクラブのホステスらしい」
「ほう」
「マスコミには、君の名刺のことは、黙っていた方がいいな」
「なぜだ？」
「殺されたのは、若い女で、しかも、水商売となると、いろいろと、勘ぐられるからさ」
と、佐伯は、いった。
「別に、構わないよ。全く知らない女なんだから」
と、十津川は、いった。
「君が、構わないなら、それでいいが、とにかく、慎重に、捜査しろよ」
それだけ、いい残し、被害者の所持品などを渡して、佐伯は、引き揚げて、行った。

2

十津川が、重視したのは、第一に、封筒に入っていた、予約切符である。

被害者、原田みゆきは、今日十三日の一二時三〇分浅草発の東武電車の特急「スペーシア」に、乗ることになっていた。

切符には、5号車517というナンバーが、書かれてある。彼女が、一人で乗ることになっていたのか、或いは、同伴者がいたのかは、わからない。

彼女の二十五歳という年齢や、クラブのホステスということを考えると、ひとりで、行くことにしていたというより、恐らく、同伴者がいたと考える方が、自然だろう。

「私は、この一二時三〇分発のスペーシアに乗ってみようと、思っている。何もわからないかも知れないがね」

と、十津川は、部下の亀井刑事に、いった。

「連絡は、どうしますか？」

「この列車に、電話もついていると思うが、念のために、携帯電話を持って行くよ。カメさんたちは、被害者の周辺、特に、異性関係を調べておいてくれないか。どうみても、今度の事件は、怨恨に思えるからね」

「わかりました。何かわかりましたら、すぐ、連絡します」

と、亀井は、いった。

十津川は、すぐ、地下鉄で、浅草に向った。

新幹線や、青森、函館、札幌へ行くための寝台特急に乗るために、上野駅へ行くことは、たびたびあったが、浅草まで、足を伸ばすのは、最近になって、初めてである。何となく、浅草という場所が、交通の便が悪い感じで、行きにくいのだ。

終点の浅草で降りて、東武浅草駅の構内に入って行くと、十津川は、一瞬、子供時代に、戻ったような気がした。

子供の頃、縁日が好きで、時々、浅草へ遊びに来たことがある。ずいぶん昔のことと、思っていたのだが、今、ここへ来て、周囲を見廻すと、その頃と、同じような景色があって、びっくりする。

構内には、あの頃と同じように、赤帽さんが、腰を下して、客を待っているし、仲見世へ通じる狭い道も、ごちゃごちゃした看板も、少しも、変っていなかった。いや、この東武浅草駅に出入りする乗客の持つ雰囲気も、変っていないなと、思った。

東京の街は、猛烈な勢いで変化しているが、この浅草の周辺だけは、昔のままの景色と、雰囲気を残している。

十津川は、そんなことを考えながら、上にあるプラットホームへの階段を、のぼって行った。

十一時半を過ぎたばかりなので、まだ、特急「スペーシア」は、入っていなかった。十津川は駅員に、この電車のことを聞いてみた。

助役が、パンフレットをくれて、説明してくれた。六両編成の新型車両で、1号車から5号車までは、四列の座席を持つ座席指定車で、6号車は、コンパートメントが、六室並んでいる。

3号車は、半分が座席になっていて、あとの半分は、ビュッフェと、サービスセンターが設けられ、自販機と、テレホンカード専用の電話がついている。

「座席は、全て、リクライニングしますし、テーブルが引き出せるようになっています。また、座席には、オーディオが聞けるパネルがついていて、四種類の音楽に、二種類のラジオ放送が、聞けます」

と、助役は、自慢げに、説明した。

「517という座席は、どの辺ですか？」

と、十津川は、きいた。

「5号車の前から五列目の窓側の座席ですね」

「隣りの518は、売れていますか？」

十津川が、きくと、助役は、電話で問い合せてくれてから、

「売れていますね」

と、いった。

ほぼ、八十パーセントの売れ行きだという。

十津川は、まだ、時間があったので、構内の喫茶店で、アイスコーヒーを飲んでから、入線して来た「スペーシア」に、乗り込んだ。

今までの東武電車の車両とは、違って、洒落たラインの特急である。正面（フロント）は、のっぺりとした、流線型の顔をしていて、それだけに、「けごん」とか、「りょうもう」といった、これまでの特急、急行の名前とは違った、外国の名前をつけたのだろう。

十津川は、5号車に入り、窓側の517番の席に腰を下した。

ユニホーム姿の女性が、迎えてくれる。社内放送では、彼女たちは、スチュワーデスと呼ばれているらしい。

座席は、モスグリーンで、新幹線に負けていない、と思ったが、乗客は、いかにも、下町らしく、がやがやと、賑やかだった。発車するとすぐ、スチュワーデスに、ウイスキーの水割りセットを持って来させて、飲み始める客もいる。

十津川は、隣りの座席を、注目していた。

定刻の一二時三〇分に発車したのだが、隣りは、空いたままである。スペーシアは、下今市まで、停車しないので、途中から乗ってくることはないのだが、他の車両にいることも考えられるので、十津川は見守ることにした。

北千住の駅を通過する頃から、窓の外の景色が、少しずつ、変ってくる。住宅は、相変らずびっしり建っているが、ところどころに、雑木林があったりして、郊外の感じがするのである。

だが、隣りの座席は、空いたままだった。

流れていく看板の電話番号が変ったので、埼玉県に入ったのが、わかった。

巨大な団地が現われて、埼玉が、東京のベッドタウンになっていることが、実感された。

少しずつ、窓の外に、畠が、見えたりするようになった。

十津川は、立ち上り、列車の中を、見て歩くことにした。ひょっとして、517の席に、自分が座っているので、隣りに座るべき人間が、遠慮しているのかも知れないと、思ったからでもある。

最後尾の6号車に、まず、行ってみた。

四人用のコンパートメントが、並んでいるのだが、静かにしているコンパートメントはなくて、ドアを開け放ち、テーブルに、酒や、おつまみを並べて、気炎をあげている若者のグループに、子供が、わいわい騒いでいる家族連れである。中には、酔っ払って、若いスチュワーデスのお尻に触って、口論になっている乗客もいた。

十津川は、苦笑しながら、今度は、1号車の方向に、通路を歩いて行った。5号車を通るとき、518の席を見たが、相変らず、空いたままである。

3号車のビュッフェの前に、電話があったが、若い女性が、話し中だった。

十津川は、2号車のデッキに出て、携帯電話で、亀井にかけた。

「何かわかったかね？」

「今、解剖結果が報告されて来ました。死亡推定時刻は、昨夜の午後十一時から十二時の間ですね。背中を、三回刺されていて、出血死だということです」

と、亀井が、いった。

「凶器は、見つかったかね？」

「まだ見つかりません。井の頭公園の中にある池を、さらってみようと思っています。ちょっと、お

かしい点も、出て来ました」
「どんなことだ？」
「被害者と同じマンションに、本橋けい子という女が住んでいまして、店は違いますが、同じ新宿のクラブで働くホステスで、大の仲良しだったそうです。彼女に会って聞いたんですが、被害者が、今日、会津若松へ旅行するなんてことは、全く、聞いていないと、いうんです」
「しかし、その友だちに内緒で、男と、行くことにしていたかも知れないよ」
「確かに、そうですが、本橋けい子の話だと、今日十三日の午後五時に、新宿で、ある人を、彼女に紹介することになっていたというんです。被害者は、自分の店を持ちたいと、いっていて、ある人というのは、その相談にのってくれる男で、これは、被害者の方から、紹介してくれと、本橋けい子に、頼んでいたということです。だから、今日、旅行するのは、おかしいというのですよ」
「それが、本当なら、確かに、おかしいね」
「これから、その男に会ってみようと、思っています。本橋けい子の話が、本当かどうか、確認したいので」
「そうしてくれ。それから、被害者が働いていた新宿の店だが」
「名前は、クラブ『ロイヤル』です」
「夜になったら、そこへも行って、旅行のことを聞いてみてほしいね」
「わかりました」
「目撃者は？」
「残念ながら、まだ、見つかりません」
と、亀井は、いった。
十津川は、携帯電話を切って、5号車の自分の席に戻った。
隣りの席は、いぜんとして、空いたままである。

事件に関係がある人間だから、乗らなかったのか、ただの偶然なのか、わからない。

煙草に火をつけて、考え込んだ。

亀井の話では、被害者原田みゆきは、今日、旅行に行く予定はなかったように、思える。

だが、彼女は、切符を持っていた。それに、恋人か、パトロンに誘われれば、内緒で、旅行にも、行くだろう。

十津川は、そのことより、彼女が、なぜ、自分の名刺を持っていたのかという方に、関心があった。

十津川は、「ロイヤル」というクラブの名前にも、記憶がないし、被害者の名前や顔にも、記憶がない。

だから、他の誰かから、被害者に渡ったのだろう。それは、誰なのだろうか。

考えつかなくて、十津川は、窓の外に、眼をやった。外は、すっかり、田園風景になっていた。

3

十津川は、去年の十月末に、名刺を二百枚刷っている。肩書きつきの名刺なので、悪用される恐れがあり、チェックには、心を配っていた。渡した相手の名前を、必ずメモしている。

現在までに、三十二枚を使っていた。その相手全部を、今、思い出すことは出来ないが、その中の一枚が、今度の被害者の手に渡ったことは、まず、間違いないだろう。

(調べていけば、誰から、どうして、被害者に渡ったか、わかる筈だ)

と、十津川が、考えた時、ふいに、車内アナウンスが、彼の名前を呼んだ。はっとして、聞き耳を立てると、東京世田谷の十津川省三様に、電話が入っていますので、3号車のサービスカウンターまで、

おいで下さいと、繰り返している。
十津川は、あわてて、立ち上り、3号車に行き、サービスカウンターのスチュワーデスに、自分の名前をいった。
すぐ、受話器が渡された。
「十津川ですが――」
と、名前をいうと、女の声が、
「警視庁捜査一課の十津川警部さんね？」
と、確認するように、きいた。
「そうです。あなたは？」
十津川は、きき返した。が、女は、それには、答えず、
「やっぱり、その列車に乗ったのね」
と、満足そうな声を出した。
十津川は、何となく、むっとした気持になって、
「あなたの名前と、私に、何の用か、それを教えて欲しいんですがね」
「名前を聞いても、仕方がないわよ。私が、でたらめの名前をいっても、それを確める方法がないわけだし――」
「確かに、そうですがね」
と、十津川は、苦笑した。
「じゃあ、何の用なのか、それを教えてくれませんか。わざわざ、スペーシアまで電話して来たんだから、特別な用が、あるんでしょう？」
「私は、警部さんに、協力したいの」
「協力？　何に協力したいんですか？」
「決ってるじゃないの。今日、井の頭公園であった殺人事件のことでだわ」
「犯人を、知ってるんですか？」
「いいえ」
「じゃあ、何を？」
「ヒントを、差し上げたいの。警部さんが、その列車に乗ったのは、正解だわね。会津若松に着いた



ら、今日は、東山温泉に、泊りなさい」
「東山温泉では、何という、ホテルに泊ればいいのかな？」
「それは、警部さんの考え次第ね」
「私の考え次第ねえ」
「明日は、喜多方へ行って、街を見物しなさい。お昼は、ラーメンがいいわね。喜多方のラーメンは、有名だから」
「そのあとは？」
「新潟廻りで、岩室温泉に行きなさい」
「なぜ？」
「なぜって、警部さんも、そのつもりなんでしょう？」
女は、そんないい方をした。確かに、その通りなのだ。被害者の持っていた予約切符には、新潟廻りで、越後線の岩室行も、入っていたからである。そして、最後は、柏崎に出て、そこから、特急「白鳥」で、京都に行き、京都見物のあと、新幹線で、帰京するようになっている。
「岩室温泉に行けば、今度の事件は、解決できるのかね？」
と、十津川は、きいた。
「それは、警部さんの腕次第ね。がんばってよ。期待してるわ。私も、犯人を見つけたいの」
「私の腕次第か」
「ああ、いい忘れたことがあったわ。警部さんの隣りの席には、誰も来ないわよ」
「あなたが乗ることになっていたのかな？」
と、十津川は、きいたが、女は、それには答えず、電話を切ってしまった。
十津川は、受話器を置いてから、サービスカウンターのスチュワーデスに、
「今の電話だが、相手は、かけてきた時、自分の名前をいいましたか？」

と、きいてみた。
「いいえ。お友だちと、おっしゃっただけです」
「向うの電話番号は、わかりますか？」
十津川は、警察手帳を見せて、きいた。それまで、微笑を浮べて応待していたスチュワーデスは、とたんに、こわばった表情になった。
「私には、わかりませんけど、中継基地に問い合せれば、わかるかも知れませんわ」
「では、そうして下さい。どうしても、知りたいんですよ」
「でも、間もなく、下今市ですけど……」
「あとで、東武の営業所に電話しますから、わかるようにしておいて下さい。お願いします」
と、十津川は、いった。

4

スペーシアは、定刻の一四時〇七分に、下今市に着いた。
ここで、日光へ行く線と、会津若松方面へ行く線に分れる。十津川の乗って来たスペーシアは、ここから、鬼怒川温泉まで行ったあと、日光に回送され、日光見物をすませて帰京する観光客を乗せるのだという。ややこしい運営だが、これが、一番、経済的なのかも知れない。
下今市から先には、野岩鉄道、会津鉄道の二つの会社が入っているので、会津若松まで、ストレートでは行かず、まず、会津田島行の電車に乗らなければならない。
十津川は、別のホームから、一四時二四分発の電車に乗った。二両編成で、ボックス型の座席である。
何とか座れたが、意外に混んでいる。
鬼怒川温泉、川治温泉と、温泉地帯を、走って行

くのだが、十津川は、窓の外に広がる渓谷美に、眼を奪われた。

鬼怒川の深い渓谷は、ある時は、急流となって、岩を噛むかと思えば、時には、深く澱んで、真っ青な水面を見せる。

人家も、まばらで、その景色を邪魔するものは、何もないのだ。

遠くに見える山脈の頂上あたりには、まだ、白く、雪が、残っている。

単線区間なので、電車は、すれ違いのたびに、のんびりと、待ち合せの停車をするが、周囲の景色が、いらいらを、忘れさせてくれた。

(殺された原田みゆきは、この景色が楽しみで、このルートで、会津若松へ行くことにしたのかも知れないな)

と、十津川は、思った。

東京から、会津若松へ行く場合、たいていは、新幹線で郡山へ出て、あとは、磐越西線に乗りかえるだろう。早いし、楽だからだ。しかし、今、十津川が、眼にしているような美しい景色は、見られまい。

会津田島に着く。一五時五九分。ここから、会津若松行のジーゼル列車が出ていて、十五分後に、発車だった。

こちらも、二両編成の可愛らしい列車である。会津田島は、中学校があるらしく、下校の生徒たちが、発車間際に、どかどかと乗って来た。この列車に乗りおくれると、次の列車は、一時間以上、待たなければならないからだろう。車内は、たちまち、彼等のお喋りで占領されてしまった。

次の田島高校前では、今度は、黒い制服姿の高校生たちが、乗ってきた。昼間は、通学列車になっているらしい。

中学生も、高校生も、お喋りに夢中で、窓の外の

景色など見ようとしない。嫌になるほど、見なれてしまった景色ということもあるのだろう。

だが、そんな中で、十津川は、新しく展開する景色に、また、見とれていた。今度は、大川渓谷の美しさである。小さなトンネルを抜ける度に、大川の清流が、右に見えたり、左に見えたりする。

塔のへつりという奇妙な名前の駅に出会った。車掌に聞くと、車北訛りで説明してくれた。大川の渓谷は、川の浸食と風化で、いくつもの岩塔が出来ていて、壮観だという。それを、塔のへつりと呼んで、名所になっているというのである。十津川も知らなかったのだが、へつりというのは、東日本では、削る意味で、岩壁が削りとられているということらしかった。

そうした険しい断崖や、山々の中を、よく見ると、延々と、一本の道路が伸びているのに、十津川は、気付いた。トラックや、乗用車が、走っている。

地図で見ると、国道121号線で、昔の日光街道である。会津藩主は、この道を通って、江戸に参勤交代に向ったといわれている。

明治維新の時、会津藩は、官軍が、この日光街道を通って、攻撃してくるものと考え、その方面に、防衛線を敷いていたが、官軍は、今の郡山側から攻撃してきて、会津藩は、敗れ去った。

今でも、会津の人たちは、官軍が、日光街道から攻撃して来ていたら、負けなかったと主張するらしい。

このジーゼル列車の中では、何事も起きなかった。乗客の一人が、突然、話しかけることもなかったし、携帯電話に、亀井の報告が入ってくることもなかったからである。

一七時二三分、終点の会津若松に着いた。

まだ、外は、明るかった。被害者は、恐らく、暗

くなるまで、バスか、タクシーで、市内見物をする予定だったろう。鶴ヶ城、飯盛山など、よく知られた名所、旧跡があるし、それほど広くない所だから、一時間もあれば、廻って見物できるからである。

しかし、彼女は、もう死んでしまった。従って、彼女が、何処を見物しただろうかと考えるのは、意味がない。

十津川が、知りたいのは、彼女が、果して、誰と一緒に、その旅行に行くことにしていたかということだった。

十津川は、会津若松署に行き、協力を求めた。

署長は、本庁から来た警部ということで、緊張した表情になり、

「協力というと、何をしたら、よろしいですか？」

と、きく。

「原田みゆきは、東山温泉に、今日、十三日に、泊ることにしていたと思うのです。どのホテル、旅館を、予約していたのか、それを、知りたいのですよ」

「原田みゆきの名前で、予約したとは、限りませんね？」

「そうなんです。男と二人での内緒の旅行とすれば、偽名で予約したかも知れませんし、男が、予約した可能性もあります。難しいとは、思いますが、何とか、見つけ出して欲しいのです」

「わかりました。やってみましょう」

と、署長は、いってくれた。

東山温泉にある約四十軒のホテル、旅館を、調べてくれている間、十津川は、署の傍にある喫茶店で、待つことにした。傍にいては、せかしているようで、まずいと、思ったのだ。

サンドイッチを食べ、コーヒーを飲んでいる中に、店に、署長から電話が入った。

「見つけましたよ！」
と、署長は、大声で、いった。
「本当ですか？」
「間違いありません」
「と、いうと、原田みゆきの名前で、予約していたんですか？」
「いや、予約は、田中祐介という男の名前で、予約されていました。今日一日だけの一泊で、人数は、二名になっています」
「それで、今日、まだ、来ていないんですね？」
「そうです」
「しかし、それが、なぜ、原田みゆきと、連れだと、わかったんですか？」
と、十津川は、きいた。
「今日の午後五時頃、このホテルに、男の声で、電話がありまして、田中だが、今日の泊りの予定をキャンセルしたいと、いったそうです」
「しかし、それだけでは、断定は――」
「そうですが、その男は、こうもいったそうです。もし、警察に聞かれるようなことがあったら、最初から、予約はしなかったことにしてくれと、いったそうですよ」
「なるほど。電話の男の声は、予約した時の声と、同じだったんですか？」
「フロント係は、同じ声だったと思うと、いっていました。それに、今のところ、今日の予約を、キャンセルしてきたのは、ここだけです」
「ホテルの名前は、何というんですか？」
「ニュー東山ホテルです。うちの車で、お送りしますよ。なに、車で、二十分もあれば、着きます」
と、署長は、いってくれた。
すぐ、若い刑事の運転するパトカーが、迎えに来てくれた。
「水口です」

と、若い刑事は、几帳面に、あいさつした。
十津川が、乗り込むと、水口刑事は、車をスタートさせた。
市外に出ると、すぐ、山が迫ってくる。
「例の飯盛山は、左手にあります。前方にあるのは、会津武家屋敷で、歴史的な調度品などが、並んでいます」
水口刑事は、説明しながら、車を走らせて行く。
山あいの道を走って行くと、東山温泉の看板が見えてきた。建造中のホテルも見える。
「このホテルは、なんでも、ヘリポートを設けて、東京の客を、ヘリで、運ぶそうですよ」
と、水口が、笑いながら、いった。
湯川の渓谷沿いに並ぶホテル、旅館の中で、問題のニュー東山ホテルは、一番奥にあった。
十津川は、ロビーに入ると、すぐ、フロントに行き、
「田中という予約客のことで、聞きたいことがあるんですがね」
と、声をかけた。

5

十津川は、まず、田中祐介という予約客のメモを、見せて貰った。
ホテルの予約係が、メモしたものである。東京都世田谷区松原×丁目、田中祐介様他一名とあり、東京の電話番号も、書かれていた。
「この電話番号は、確認したんですか？」
と、十津川は、自分の手帳に、書き写しながら、きいてみた。
「予約を受けてすぐ、折り返して、電話を差し上げましたら、同じ方が、出られましたので、間違いないと、思いました」

と、フロントの予約係は、いった。
「ちょっと、電話をお借りしますよ」
と、十津川は、いい、電話を借りて、そのナンバーに、かけてみた。
耳に、呼び出しているベルの音が、聞こえた。
二、三分、待ってみたのだが、相手が出そうもないので、十津川は、受話器を置いた。
「この男は、いつ、予約して来たんですか？」
と、十津川は、予約係に、きいた。
「一昨日です。夜の十時頃でした」
「そして、今日の午後五時頃、キャンセルして来て、警察に聞かれたら、予約しなかったことにしてくれと、いったんですね？」
「はい。そうです」
「キャンセルして来た時、男の声は、どんなでしたか？　落ち着いていましたか？」
と、十津川が、きくと、予約係は、ちょっと考えていたが、
「何か、あわてているようでした。警察にはいわないでくれと、何度も、繰り返していましたね」
「このメモには、田中という男の年齢が書いてありませんが、声の様子で、何歳ぐらいだと思いましたか？」
「何歳かは、わかりませんが、中年の声だと思いました。若いという感じではありませんでした」
と、予約係は、いった。
十津川は、部屋に入ると、一つの推理を立ててみた。
田中祐介は、仮名かも知れないが、ともかく、田中と名乗る男が、いたのだ。彼が予約に使った電話番号は、実在している。
その田中は、クラブ「ロイヤル」のホステス、原田みゆきと、二泊三日で、会津若松から、日本海に出る旅行を計画し、ホテルを予約し、列車の切符

も、買った。

彼女には、その予約切符を渡して、多分、浅草で、今日、落ち合うことにしていたのだろう。

だが、前日の夜、原田みゆきが、自宅近くの井の頭公園で、殺された。

犯人は、田中かも知れないし、別の人間かも知れない。が、どちらにしろ、田中は、困ったことになったと思い、今日、二人で、東山温泉に泊ることを、警察に知られまいと、ホテルに、電話した。

田中が、犯人なら、被害者との関係を知られまいとするのは、当然だし、犯人でなくても、彼が、妻帯者なら、原田みゆきとの浮気がばれるのを恐れて、動き廻るのも、当然だろう。

とすれば、田中祐介という男が見つかれば、本件は、解決するか、解決へのメドがつくのではないか。

（しかし、特急スペーシアに電話して来た女は、いったい、何者で、何を企んでいるのだろうか？）

十津川にも、そこが、わからなかった。

あの時の電話の口ぶりでは、今度の事件の解決を望んでいるように思えるのだが、彼女は、事件と、どんな関係があるのだろうか？　それと、なぜ、十津川のことを、知っているのか？

十津川は、東武鉄道の広報に、電話をかけてみた。名前をいい、今日のスペーシアで、サービスカウンターのスチュワーデスに、頼んだことを、繰り返した。

「ああ、その件は、聞いています」

と、相手は、あっさりと、いい、

「スペーシアに、外から電話して来た女性のことですが、名前は、田中と、おっしゃっていました。電話番号は――」

と、教えてくれた。

その電話番号は、このホテルで、予約係がメモし

ていたものと、同じだった。

6

その頃、東京では、亀井刑事が、若手の西本刑事を連れて、問題のクラブ「ロイヤル」に、出かけていた。

雑居ビルの地下にある店で、まだ、客の姿は、まばらだった。

それほど、大きな店ではない。ホステスも、十二、三人というところだろう。

亀井は、カウンターに腰を下し、マネージャーに、店のママを、呼んで貰った。

三十二、三歳の若いママだった。亀井が、原田みゆきの名前をいうと、ママは、眉を寄せて、

「テレビのニュースで見て、びっくりしてるんですよ。明るくて、いい娘なんですよ。やっぱり、物盗りに、狙われたんですか？」

「いや、物盗りの犯行じゃありません。お金も、指輪なども、盗られていませんから」

「すると、恨まれて？」

「と、考えられますね。みゆきさんは、ハンドバッグの中に、列車の予約切符を持っていたんですよ。二泊三日ぐらいの旅行のです」

と、亀井が、いうと、ママは、

「それ、ニュースでもいってましたけど、今日出発する切符なんですってね？」

と、逆に、きいてきた。

「そうです。今日の一二時三〇分の東武電車の切符でした。会津若松から、喜多方に廻り、日本海側を旅行して、帰京する予定だったと思われます。三日後の京都から東京に帰る新幹線の切符も、持っていましたから」

「でも、みゆきちゃんは、旅のことなんか、何もい

っていませんでしたけどねえ」
ママは、首をかしげた。
「彼女が、黙って、三日ぐらい店を休むことは、これまでには、なかったんですか？」
「一日ぐらい無断で休むことは、ありましたけどね。三日も、休むことは、ありませんでしたよ。まじめな娘なんですよ」
「しかし、つき合っている男がいなかったということは、ないんでしょう？」
亀井が、きくと、ママは、笑って、
「そりゃあ、こういう商売ですからねえ。それに、みゆきちゃんは、美人だから、つき合っていた男の人は、何人かいたと思いますねえ。お客の中には、彼女に、本当に、惚れていた人もいるし――」
「その男の人の名前を、教えてくれませんかね」
「でも、結婚してらっしゃる方ばかりだから、妙なことになると、困りますわ」
「その点は、配慮しますよ。殺人事件なので、協力して下さい」
と、亀井は、いった。
ママが教えてくれた男の名前は、二人だった。いずれも、店の客で、五十歳のパーラーの経営者と、四十五歳の商社の部長で、二人とも、もちろん、家族がいる。
その名前と、住所を、書き止めてから、亀井は、西本と、外に出た。西本の方は、みゆきの同僚のホステスたちに当っていたのだが、パトカーに戻ると、
「彼女たちは、原田みゆきが、今日から三日間休むなんて、ぜんぜん、知らなかったと、いっていましたよ」
と、亀井に、いった。
亀井は、肯いて、
「ママと、マネージャーも、同じことをいっていた

よ。今日から三日間、休むなんてことは、聞いていないとね」

「被害者と同じマンションに住むホステスも、同じことを、いっていましたが、これは、どういうことなんでしょうか？」

「二つの場合が、考えられるよ。一つは、被害者が、今度の旅行を、よほど内緒にしておきたかったということだ。だから、店の誰にも、話さなかった」

「もう一つのケースは、どんなことでしょうか？」

「第一の場合と、全く逆のケースだよ。男から、切符を貰ったが、全く行く気がなかったという場合さ。男を、すっぽかすつもりだから、店の方には、休むなんて、いわなかったということだな」

「カメさんは、どちらのケースだと思いますか？」

「わからんな。ママの話だと、昨夜は、看板より一時間前に、店を出たと、いうことだから、誰かに会って、列車の切符を貰ったのかも知れん。或いは、昨日、店に来た客の一人から、切符を貰ったか」

「そうですね。今日の切符を、わざわざ、昨日、家からハンドバッグに入れて、店に出る筈がありませんから、昨日、誰かに、貰ったということですね」

と、西本が、いった。

「だから、この二人に、会ってみようと思っているんだよ」

亀井は、ママに教えられた二人の男の名前を、西本に、見せた。

その一人、渋谷・道玄坂で、パーラーをやっている浅野功に、まず、会うことにした。

丁度、店を閉めようとするところで、店の二階の事務室で、浅野から、話を聞くことが出来た。

「原田みゆきは、知っていますよ。しかし、今日から、三日間の旅行に誘ったなんてことは、全くありませんよ。第一、明日は、家内の誕生日で、一緒

に、夕食をすることになっているんです」
と、浅野はいい、明日、妻にプレゼントするため、買っておいたというダイヤの指輪を見せてくれた。
「昨夜は、どうされましたか？」
と、西本が、きいた。
「今日と同じで、午後九時に、店を閉めて、明大前の自宅に帰りましたよ。クラブ『ロイヤル』には、行っていません。家内に聞いて下さい」
と、浅野は、いった。
もう一人の商社マン、尾崎英公には、国立の自宅マンションで、会ったが、彼も、旅行に誘った覚えはないと、主張した。
「昨夜ですか？　昨日は、久しぶりに、大学時代の同窓生五人と一緒に飲みましたよ。クラブ『ロイヤル』に行きました。行ったのは九時頃だったと思いますね。一時間ほどいて、次は、友人の一人が馴染みだという池袋の店に行ったりして、家に帰ったのは、午前四時頃でしたね。家内に怒られましたよ」
と、尾崎は、いった。
本当か、嘘かは、調べていけば、わかるだろう。
亀井は、尾崎のいう同窓生の名前と住所を手帳に書き止めてから、捜査本部に、戻った。
午後十一時に、東山温泉の十津川から、連絡が、入った。
「田中祐介という男が、予約するのに使った電話のことを、調べて貰いたいんだ。この電話は、今日、スペーシアの私に掛けるのにも使われているんだ」
「早速、持主を、調べてみます」
と、亀井は、そのナンバーを、手帳に書き止めた。
すぐ、NTTに協力して貰って、持ち主を調べて貰った。
三十分ほどで、回答があった。

世田谷区松原×丁目のマンション「シャトー・松原」五〇三号室で、持主の名前は、田中祐介だという。

名前も、十津川が、いった通りである。

（仮名ではないのか）

と、亀井は、そのことに、拍子抜けしながら、西本を連れて、深夜の街を、松原×丁目に急行した。

十一階建の真新しいマンションだった。五〇三号室にあがって、ベルを鳴らしてみたが、応答がない。

亀井は、一階におり、管理人に会って、五〇三号室の田中祐介について、聞いてみた。

管理人は、眠そうな眼を、こすりながら、

「確かに、持主は、田中さんですが、今、売りに出されているんですよ。ご本人は、三鷹の方に、いらっしゃいます」

と、いった。

「しかし、電話は、通じているね？」

「ええ。夜なんかに、時々、鳴ってますよ。電話、駐車場つきで、売っているんです。お買いになりますか？」

「私には、そんな金はないよ」

と、亀井は、苦笑してから、

「持主はいないんだから、カギは、掛っているんだろう？」

「ええ」

「あなたは、五〇三号室のキーを持っているのかね？」

「ええ。田中さんに、買いたい人が現われたら、部屋を見せてやってくれといわれて、カギを、預っていますが」

「何人も、部屋を見たいという人は、来ているのかね？」

「ええ。一日一人は、来ていますね。新築だし、駅

にも近いし、何よりも、駐車場つきだからね。全部で、もう、二十人近く見に来たんじゃありませんかね。値段の点で、まだ、買う人は出ていませんが」
「その度に、あなたが、部屋を開けて、見せているんだね？」
「ええ」
「その時、ずっと、あなたは、付きっ切りにしているのかね？」
「いえ。部屋には、もう、何もありませんし、私がいたんじゃ、ゆっくり見られないと思って、席を外していますよ」
と、管理人は、いった。
（自称、田中祐介は、その時に、部屋の電話を利用したのだろうか？　それとも、持主の田中祐介が、今度の事件に関係しているのだろうか？）
亀井は、考え込んだ。

7

「田中という人の今の住所と、電話番号は、わかりますか？」
と、亀井は、管理人に、きいた。
「もちろん、わかりますよ。その部屋のいい買手がついたら、田中さんに、連絡しなければ、いけませんからね」
管理人は、住所と、電話番号を、書いてくれた。
亀井と、西本は、夜半だったが、その住所を、訪ねてみることにした。
三鷹のマンションである。時間は、おそかったが、相手は、気軽く、ドアを開けてくれた。
四十二、三歳の男だった。
亀井と、西本は、警察手帳を見せてから、中に入った。

「松原にお持ちのマンションのことで、お聞きしたいことがあるんですよ」
と、亀井が、いうと、田中は、眉をひそめて、
「あのマンションは、正当に、手に入れたものですよ」
「いや、そういうことじゃないんです。実は、田中祐介という名前で、福島県東山温泉のホテルを、予約した人間がいるんです。今日の予約です」
「それは、同姓異人ですよ。私は、東山温泉の予約をしたことなんかありませんよ。どっちかというと、温泉は、嫌いだから」
と、田中は、いう。
「しかし、その男は、自分の電話番号を、東山温泉のホテルに、こういっているんです。３４２１の××××」
「その番号は、あのマンションのものですよ」
「そうなんです。それで、どうなってるのか、持主のあなたに、お聞きしたいと思いましてね」
「私には、全く、わかりませんよ。その男が、私の名前の他に、電話番号まで、勝手に、使っているんです」
と、田中は、腹立たしげに、いった。
亀井は肯いて、
「私も、そう思います。多分、あの部屋の合鍵を使って、勝手に、利用していたんだと思いますね」
「しかし、誰が、そんな真似を？」
「それを、私も、ぜひ、知りたいんですよ」
「そういわれても、勝手に使われていたわけですから」
「確かに、そうですが、その男は、持主であるあなたの名前を、知っていました。マンションの建っている正確な所番地もです。と、いうことは、あなたのことを、よく知っている男ということになります」

「――――」
「誰か、心当りは、ありませんか？」
と、亀井が、きくと、田中は、当惑した表情になった。
「そういわれても、私の知らないところで、やられていることですから」
「あなたの友人とか、知人で、こんなことをしそうな男に、心当りはありませんか？　あなたの周囲にいる人間だと思うのですよ。あなたのことを、全く知らない人間が、あなたの名前をかたり、そのマンションの電話番号を利用する筈がありませんからね」
「私の名前を使った男は、いったい、何をしようとしているんですか？」
今度は、田中が、きいた。
「今のところ、はっきりしませんが、殺人事件に関係しているかも知れんのです」
「殺人？」
田中は、顔色を変えた。
亀井は、微笑して、
「あなたが、殺人に関係しているわけじゃないから、そんなに、びっくりしないで下さい。関係していると、思われるのは、あなたの名前を、利用した人間ですよ」
「それは、そうでしょうが、私だって、いい気分じゃありませんよ」
と、田中は、いった。
「そうでしょうね。あなただって、犯人の名前を知りたいでしょう？　われわれに、協力して下さい」
と、亀井は、頼んだ。
「本当に、私の友人、知人の中に、そんなことをする人間がいるんですか？」
田中は、半信半疑の顔で、亀井を見ている。
「他に考えられないのですよ。あのマンションに

は、何年くらい住んでおられたんですか？」
と、亀井は、きいた。
「三年間です。こちらへ、越して来たのは、一ヵ月ほど前ですが」
「なぜ、引っ越されたんですか？　向うの方が、都心に近くて、便利だと思いますが」
「狭いんです。それで、あのマンションを売って、郊外へと思ったんですが、最近、マンションが、なかなか、売れないんです。売れるのを待っていたんでは、なかなか、引っ越せないので、思い切って、このマンションを買ってしまいました」
「羨ましいですな」
と、亀井は、呟いた。
「え？」
「マンションをお持ちで、また、新しいマンションを買えるというのは、本当に、羨ましいと思いましてね。私は、この年で、まだ、借家住いです」
と、亀井が、いうと、田中は、頭を小さく横に振って、
「そんな金持ちじゃありませんよ。おやじや、親戚に借金をしたんです。この頃は、銀行が、貸してくれませんからね。だから、向うのマンションを早く売って、借金を返さなければならないんです」
「失礼ですが、何をやっておられるんですか？」
と、亀井は、応接間を、見廻した。
立派な調度品が、並んでいる。が、職業のはっきりしない感じだった。
「自分で、商売をやっています」
と、田中は、いった。
「なるほど。それで、問題の男ということなんですが、大学は、どこを出られました？」
「なぜですか？」
「よく、学校時代の友人が、いたずらで、名前を、勝手に使ったりすることが多いですからね」

「R大学ですが」
「ああ、有名校ですね。同窓生の中で、そんないたずらをする人に、心当りは、ありませんか？」
「どういう顔立ちかも、わからないんですか？　背格好とか」
「残念ながら、東山のホテルには、電話で予約しただけですのでね。何もわからんのです」
「それだけでは、雲をつかむような話で」
と、田中は、いう。
亀井は、確かに、そうだろうなと、思いながら、
「あのマンションの電話番号を知っている人は、沢山いますか？」
と、きいた。
「ええ。名刺に、会社と、自宅の両方の電話番号を印刷して、配っていましたからね」
と、田中は、いい、奥から、名刺を持って来て、亀井に渡した。
「それが、向うに住んでいた時に、使っていたものです」
と、田中は、いった。
なるほど、その名刺には、新宿の会社の電話番号の他に、「自宅」として、世田谷区松原のあのマンションの住所と、電話番号が、のっていた。
「しかし、一ヵ月前に、引っ越されたのを知っている人は、あまり多くないんじゃありませんか？」
と、亀井は、きいた。
「それは、そうですが――」
「これはと思う人が浮んだら、教えて下さい」
と、亀井は、いった。

8

十津川は、東山温泉のホテルで、亀井からの電話を、受けた。すでに、午前一時に近い。

「本物の田中さんには、名前を書き出してくれと、頼んでおきました」
と、亀井が、いう。
「それで、容疑者が浮んでくるといいがね」
と、十津川は、いった。
「どうも、わからないことが、あるんですが」
電話の向うで、亀井がいった。
「何だい？　カメさん」
「ニセの田中祐介の行動ですよ」
「どこが、わからないんだ？」
「彼が、会津若松への切符を買ったり、東山温泉なんかの予約をとったりした時は、まだ、原田みゆきを殺す気は、なかったんじゃないかと、思うんですよ。計画殺人とすると、妙なことばかりですからね。殺した原田みゆきのハンドバッグに、切符を残したりしていますから」
「そうだね」
「もし、予約した時点では、殺人なんか考えていなかったとすると、なぜ、田中祐介の名前を使ったり、あんな無人のマンションの電話を、利用したりしたんでしょう？　管理人に見つかったら、空部屋といっても、他人の所有物ですから、罪になります。自分の電話を使えばいいわけですよ。なぜ、面倒くさいことをしたんでしょうか？」
と、亀井が、きく。
「確かに、カメさんのいう通りだよ」
と、十津川は、肯いた。
「それに、被害者の原田みゆきですが、誰に聞いても、今度の旅行に行くことは、聞いてないと、いうわけです。まあ、内緒にしていたのかも知れませんが――」
「うん」
「ひょっとすると、彼女、旅行ということで、三日間休み、その間に、別のことをする気だったのかと

も、考えてみました」
「別のこと？」
「例えば、子供を堕すといったことです」
「ああ。なるほどね」
「しかし、彼女は、妊娠はしていませんでした」
と、亀井は、小さく、溜息をついてから、
「この事件は、どうも、よくわかりません」
「カメさん」
と、十津川は、改まった口調で、呼んだ。
「はい」
「この事件は、表向きとは、全く違っているんじゃないだろうか？」
と、十津川は、いった。
「それは、どういうことですか？」
亀井が、緊張した声で、きいた。
「ひょっとして、これは、餌じゃないかと、思っているんだよ。甘い餌だ」
と、十津川は、いった。
「エサ――ですか？」
「ああ、そうだ」
「よくわかりませんが」
「夜の井の頭公園で、美人が殺されていた。過去のありそうなホステスで、ハンドバッグの中には、二泊三日の東北旅行の切符が入っていた。それも、新幹線を利用しての会津若松行じゃなくて、いわば、裏街道を廻っての会津若松行の切符だよ。その上、私の名刺だ」
「わけありげですね」
「そうなんだ。警察は、当然、この予定されていた旅行に興味を持って、そのルートを、調べる。多分私が担当する。名刺のことでね」
「ええ。われわれは、今、その通りの捜査をやっていますが――」
「そうさ。私は、今、東山温泉に来ているし、カメ

さんたちは、予約した男の足取りを追っている」
「はい」
「これは、妙な勘ぐりかも知れないが、犯人は警察が、予測どおり、自分の敷いたレールに沿って動くことを、計算していたんじゃないだろうかと、ふと、思ってね」
と、十津川は、いった。
「それで、エサですか？」
「ああ。もし、そうだとすると、私たちは、ものの見事に、その餌に飛びついたというわけだよ」
「しかし、警部。殺人が、行われたんです。捜査するのは、当然ですよ」
亀井が、怒ったような声を出した。生まじめな亀井は、人が殺されたのに、エサだったのではないかといった考え方は、嫌なのだろう。
「そうさ。殺人があったから、私も、この東山温泉に、飛んできたんだ」
と、十津川は、いった。
「しかし、エサということになると、どう考えたら、いいんですか？」
亀井が、きいた。多分、電話の向うで、亀井は、当惑した顔をしているのだろう。十津川は、そんなことを、考えながら、
「被害者の周辺を、いくら調べても、今度の旅行のことは、浮んで来ないんだろう？」
と、いった。
「そうです。誰一人、今度の旅行について、原田みゆきから、聞いていないんですよ」
「それを、カメさんは、よほど、彼女が、内密にしていたせいだと、考えたんだろう？」
「そうです」
「しかし、本当に、誰も知らなかったのかも知れないし、殺された本人も、知らなかったのかも知れないよ」

と、十津川は、いった。
「まさか――」
「餌なら、誰でもいいわけだよ。目立つ餌ならばね。若くて、美人で、水商売なら、最適だよ」
「ちょっと、待って下さい。警部のいわれる通りとすると、原田みゆきは、ただ、それだけのために、殺されたわけですか？　たまたま、若くて、美人で、夜おそく、現場を歩いていたということで――」
「ひょっとすると、いっているよ」
「エサだとすると、そのエサは？」
「私を、この会津若松に、誘い出すための餌ということになってくるね」
と、十津川は、いった。

第二章　磐越西線の女

1

電話を切ったあと、十津川は、しばらく、じっと考え込んでいた。

亀井には、今度の事件は、自分を旅へ誘い出すのが目的の餌ではないかといったが、百パーセントの確信があっての言葉ではなかったからである。

被害者が、いっこうに、旅と結びつかないことや、この東山温泉に来るまでの間に、電話をかけてきた女のことを考えて、自分は、うまく誘い出されたのではないかと推理してみたのだが、もし、この推理が当っていれば、犯人は、かなり異常な人間と、思わざるを得ないのだ。

犯人は、十津川を誘い出すために、全く無関係な女を殺したことになってしまうからである。

原田みゆきは、たまたま、五月十二日の夜、現場付近を歩いていたこと、過去のありげな派手な感じの女だったこと、この二点のせいで、犯人に殺されたことになってしまう。

十津川に、恨みを持っているのか、或いは、他の理由があるのかわからないが、そのために、何の恨みもない女を殺したのか。

普通の神経の持主なら、そこまでは出来ない筈である。

（よほど、冷酷な人間なのか、それとも、私を誘い出すことが、犯人にとって、とてつもなく大事なことなのか）

そこまでは、考えられるが、その先が、全く想像

がつかなかった。

冷酷な犯人といっても、具体的に、犯人の顔が浮んでくるわけではないし、ひょっとして、自分は、誰かに恨まれているのではないかと考えても、心当りのある人間の名前が、浮んでくるわけでもなかった。

刑事をやっていれば、嫌でも、人に恨まれる機会は、多くなる。

仏のアラさんと呼ばれていた先輩の刑事がいた。荒井という男で、自分が刑務所に送った犯人の家族のことまで心配する優しさを持っていたのだが、このアラさんでも、出所してきたチンピラに刺されて、重傷を負ってしまったことがある。

だから、十津川は、刑事をしている限り、人に恨まれることは仕方がないと、覚悟して来た。

逮捕されて刑事に感謝するような犯人は、めったにいないし、犯人は自業自得と思っても、その家族に恨まれる場合だってあるからだった。

誘拐事件の捜査となると、人質を、無事に救出できれば、家族に感謝されるが、もし、殺されてしまえば、警察が介入したからだと、家族に恨まれることは、避けようがないのだ。

（今度の事件が、自分に対する恨みだとしたら――？）

と、十津川は考え、今までに扱った事件を、一つ一つ、思い直してみた。

大きな事件も、小さな事件も、十津川は、鮮明に覚えている。

十津川たちが、追いつめたため、自殺してしまった犯人もいる。あの事件の場合、家族は、警察を、恨んでいるだろう。人間は、勝手なものだから、自然に犯人のやったことは忘れてしまって、追いつめた警察を、恨むものだからだ。

夜明け近くまで、十津川は、事件の一つ一つにつ

いて、考えてみたが、これはというものは、見つからなかった。

会津若松から、喜多方を通り、日本海側の岩室温泉に出るルートが、何か意味があるのだろうかと、考えてもみた。

何者かが、十津川を、このルートに誘い出そうとしているのならば、ルート自体に、意味があるかも知れないと、思ったからである。

十津川は、東京の刑事だが、最近は、犯人が、車、列車、飛行機を使うことが多く、いやでも、広域捜査にならざるを得ない。北海道にも飛ぶことがあるし、九州で、犯人と対決することもある。

会津若松にも、来たことがあった。

三年前に起きた事件である。大学時代の同窓生五人が、卒業後三年して会い、一緒に東北旅行をしたが、その途中で、二人の人間が、相ついで殺された事件で、五人が、東京の住民ということで、十津川たちは、県警と協力して、この事件を捜査した。

彼等の旅行ルートに、会津若松が、入っていたのである。泊った場所も、東山温泉だった。

しかし、その後の彼等のルートは、新潟から、岩室へ出たのではなく、只見線で、奥只見ダムに行き、尾瀬を見て、帰京するというものだった。

尾瀬の湿原に横たわっていた女の死体は、今でも、鮮明に、眼に焼きついている。

あの事件は、すでに解決しているし、ルートも、最初は同じでも、途中から違っている。

(違うな)

と、十津川は、思った。

今度のルートは、只見線ではなく、磐越西線で、新潟に出て、新潟からは、越後線で、岩室温泉に向うのである。その切符を、殺された原田みゆきは、持っていたのだ。いや、これが、餌だとすれば、持たされていたのだ。

夜が、明けてきたが、十津川の考えは、まとまらなかった。

2

翌日、十津川は、とにかく、罠であろうが、犯人の誘いにのってみることにして、東山温泉を出発した。

会津若松から、磐越西線に乗って、喜多方に向った。犯人が、十津川を誘い出すために、無関係な原田みゆきを殺したとしても、相手が、殺人犯であることに変りはないし、逮捕するのは、刑事の仕事だったからである。犯人が、眼の前に姿を現わすまで、相手の作ったルートを、旅行してみようと、思ったのだ。

喜多方で降りたのは、午前十一時過ぎだった。

喜多方は蔵の町として発達した。酒蔵、味噌蔵、醤油蔵など、今でも、二千の蔵が残っているといわれる。

しかし、今は、ラーメンの町として、有名になってしまった。明らかに、ラーメンを食べるのが目的と思われる団体客が、バスをチャーターして、やってきていた。

十津川は、タクシーの運転手に、美味い店を教えて貰い、その一軒に、案内して貰った。その途中で、なぜ、この町が、ラーメンで有名になったのか聞いてみたが、その運転手にも、わからないということだった。

運転手が、連れて行ったのは、一見したところ、よくある小さな食堂といった店である。コンクリートの床に、安物のテーブルが並び、店の隅には、テレビが置いてあるといったものだったが、客は、昼食時とあって、どんどん押しかけてくる。

そうなると、店の人たちは、客を、家の中にあげ

てしまう。そこは、文字通り、家の中で、普段は、その店の家族が寝起きしている場所に違いなかった。タンスや、鏡が置かれ、鴨居には先祖の写真が、飾られているような部屋なのである。

十津川も、そこに案内されて、他の観光客と一緒に、座ることになった。

昔の家らしく、奥が深く、いくつもの部屋がある。その部屋に、客を、どんどん、入れてしまう。

家族総出で働いているという感じで、中年の夫婦や、その娘さん、それに、爺さん、婆さんも一生懸命に動き廻っていた。

狭い廊下には、お土産用のラーメンが、山積みされ、それを売っている七十歳くらいの爺さんは、子供が水遊びに使う小さなポリバケツに、お金を出し入れしているのが、いかにも、家族全員で働いているという感じで、十津川には、面白かった。

十津川が、運ばれてきたラーメンに、箸をつけようとした時、ふいに、眼の前にいた女性から、

「すいません。そこの胡椒をとってくれませんか」

と、声をかけられた。

「ああ」

と、十津川は、あわてて、眼の前の胡椒のびんを、相手に渡した。

二十五、六歳の女だった。彼女は、何やら肯きながら、食べていたが、急に箸を置くと、傍に置いてあったカメラを取って、部屋の中の写真を、撮り始めた。

眼の前にいるので、十津川にも、レンズを向けてくる。

十津川は、写されるのが、嫌いな方である。自然に、眉を寄せていたのだろう。女は、カメラを置いて、

「ごめんなさい」

と、いった。十津川が、黙っていると、

「これ、取材なんです」
「取材――ですか？」
「ええ。温泉と、美味いもの特集みたいな仕事を頼まれて、歩いているんですわ」
「なるほど」
「天童から、福島を廻って、喜多方のラーメンを、食べに来てみたんですよ」
「そういう仕事は、羨ましいですね」
と、十津川はいった。
「失礼ですけど、どんな仕事をやっていらっしゃるんですか？」
と、その女が、きいた。
「今は、休暇で、旅行を楽しんでいます」
十津川は、そんないい方をした。
女は、今度は、カメラを持って、立ち上り、奥の部屋を写しに行った。
十津川は、その間に、食べおわり、店を出た。
喜多方駅に戻ったが、一四時五八分発の新潟行の列車しかない。十津川は、時間潰しに、駅前の喫茶店に入った。いかにも、喜多方らしく、蔵を造りかえた店である。
コーヒーを注文しておいて、十津川は携帯電話を使って、亀井に、連絡を取った。
「今、喜多方だ。お昼に、美味いラーメンを食べたよ」
「羨ましいですね」
「そういうと思ったから、お土産用のラーメンを、カメさんたちに宅配便で、送っておいたよ」
「ありがとうございます。それで、甘い餌の件ですが、それらしい反応がありましたか？」
と、亀井が、きいた。
「わからないね。この喜多方で、ラーメンを食べた時、取材に廻っているという二十五、六歳の女から、声をかけられたよ」

「電話の女ですか？」
「声は違うような気がするが、今は、声を変える装置があるからね。電話の時、その機械が、使われたとすると、何ともいえないんだ」
「その女と、どんな話をされたんですか？」
「向うが、一方的に話した感じでね。仕事で、東北の温泉を廻り、美味いものを食べ歩いていると、いっていた。私の仕事を聞かれたんで、休暇中だとだけ、いっておいたよ」
「何か、怪しい感じはありましたか？」
「別になかったな。名前もいわないし、聞きもしなかったからね」
「他に、接触してきた人間は、いませんか？」
「いないよ。旅館の人たちや、ラーメン屋の店員さんたちを別にしてね」
「どうしても、岩室まで行かれますか？」
「ああ。ここまで来たら、ラストまで行ってみるさ」
「しかし、誘い出されたとすると、危険ですよ」
と、亀井が、心配そうに、いった。
「刑事に危険はつきものだよ」
と、十津川は、いってから、
「例の田中祐介について、何かわかったかね？」
「実在の田中祐介さんに協力して貰って、彼の友人、知人を、現在、洗っています。彼の名前を使った男は、必ず、その範囲の中にいる筈と思っていますが、まだ、これといった男にぶつからずにいます」
「友人、知人ではないかも知れないよ」
と、十津川は、いった。
「しかし、実在の田中祐介について、あれだけ詳しく知っているのは、友人、知人としか、考えられないんですが」
「詳しくといっても、田中祐介が、松原のマンショ

ンを売りに出していることと、そこにある電話の番号を知っていることの二つだけなんだろう？」
「そうですが――」
「それに、そのマンションの管理人は、田中祐介の依頼で、買いたい人に、部屋を見せているんだろう？」
「そうです」
「それなら、見に来た人は、そのマンションが、売りに出されていることや、電話番号は、わかる筈だよ。部屋の持主の名前もね」
「なるほど。最初から、利用するつもりで、見に来た人間もいるわけですね？」
「そうだよ。その線も、調べてみてくれ」
「わかりました。早速、あのマンションの管理人に、会って来ます」
と、亀井は、いった。
「わかったら、すぐ、電話して欲しい」
「私も、お供したいのですが――」
「ありがたいが、犯人が、私を誘い出したいのなら、ひとりでいる方がいいと思うんだよ」
と、十津川は、いった。
午後二時半を過ぎてから、十津川は、喫茶店を出て、喜多方駅に向った。
待合室に入って、改札口の上に掛っている時刻表を、見上げた。
時刻表のところに、赤い印のついている列車がある。何だろうと思って、注意書きを見ると、この列車にはトイレがついていませんと、書いてあった。
二両とか三両という短い編成の列車が多いので、中には、トイレのない車両だけの編成になることがあるのだろう。
喜多方から、普通列車で、新潟まで二時間半近くかかる。赤い印がついてないので、十津川は、ほっとした。

改札が開いて、十津川は、ホームに入った。新潟行の普通列車が来て、乗り込み、座席に腰を下した時、カメラを持った若い女が、あとからやって来て、彼の前に座った。

喜多方のラーメン屋で会った女である。

彼女は、びっくりした顔で、

「あら」

と、声を出した。

「また、一緒になりましたね」

と、十津川も笑顔で、応じながら、

（この女が、餌を仕掛けた犯人の一人なのだろうか？）

と、考えていた。

3

「確か、休暇をとって、旅行していらっしゃるんでしたわね？」

と、女は、笑顔で、いった。

「ええ。休暇中です」

十津川も、笑顔を返しながら、どんな女なのだろうかと、頭を働かせた。

シャーロック・ホームズなら、立ちどころに、相手の女性の出身地から、経歴、性格まで当ててしまうのだろうが、十津川には、そんな芸当は出来ない。

年齢は、二十五、六歳だろう。喜多方のラーメン店で、会った時は、カメラを構えて、温泉と、うまいものの取材をやっているのだと、いった。

今も、カメラを片手にしている。もし、彼女の言葉が本当なら、女性カメラマンか、レポーターということになるのだが、これは、本当かどうかわからない。

今も、カメラを手にとって、車窓の景色を、ぱち

ぱち、やっている。
「大変ですね」
と、十津川は、彼女に声をかけた。
「取材となると、景色を楽しむわけにもいきませんわ」
女は、カメラを、自分の横に置いて、小さく、溜息をついて見せた。
「これから、何処へ行かれるんですか？」
と、十津川は、きいてみた。
「あなたは？」
と、女が、きき返した。
「私は、新潟で乗りかえて、岩室温泉へ行ってみるつもりです」
「その温泉は、どんな温泉なんですか？」
「さあ、どんな温泉ですかね？」
「知らないのに、いらっしゃるんですか？」
「友人に、すすめられたんですよ」
「お友だちに？」
「そうなんです。田中祐介という東京の友人ですがね」
と、十津川は、固有名詞を出して、相手の反応を見た。
だが、女は、表情を変えずに、
「いい温泉なら、私も、行ってみようかしら」
と、いった。
「しかし、取材を頼まれていると、いってたんじゃありませんか？　勝手に、決めちゃって、いいんですか？」
十津川は、わざと、意地悪く、きいた。
女は、ショルダーバッグから、新潟周辺の観光案内を取り出して、ページを繰っていたが、
「確かに、岩室温泉って、あるんだわ。日本海の近くなのね。静かな温泉だって書いてあるわ。行ってみたくなったわ」

と、顔をあげて、いった。
(下手な芝居をするな)
と、十津川は、苦笑しながら、
「じゃあ、一緒に行きましょうか。しかし、旅館か、ホテルを予約してなくて、大丈夫かな？」
「あなたは、予約していらっしゃるの？」
「例の田中祐介という友人が、予約してくれていますからね。高島屋という旅館です」
「デパートみたいな名前ね」
と、女は、笑ってから、
「今は、観光シーズンじゃないから、いきなり行っても、泊れると思うわ」
と、楽観的ないい方をした。
普通列車なので、時間をかけて、停車して行く。
この時間は、通学列車になっているらしく、学生が、どっと乗って来たり、彼等が、降りてしまうと、車内は、がらんとしてしまったりする。
「岩室まで一緒なら、自己紹介でもしましょうか。私は、十津川と、いいます」
と、十津川は、笑顔で、いった。
「私は、渡辺ひろみ。名刺は持っていませんけど」
と、女も、自己紹介した。
その名前が、本名かどうかわからない。自分を誘い出す餌だとしたら、当然、偽名だろうが、今は、渡辺ひろみとして、接していくより仕方がない。
「渡辺さんは、東京の人でしたね？」
「ええ。十津川さんも？」
「世田谷です」
「私は、中野」
「井の頭公園へ行ったことがありますか？」
「一度か二度、行ったかしら？　なぜ？」
「いい所ですからね。学生時代、よく遊びに行きました」
そんな他愛のない会話を交しながら、十津川は、

注意深く、女――渡辺ひろみの表情を観察した。
会話に、よどみはない。自然な応答に見える。
だが、雑誌の依頼で、取材に来ているようには、見えなかった。
やたらに、カメラを振り廻して、シャッターを切るくせに、絵になるような景色や、車内風景が現われても、カメラを持とうとしなかったりするからである。それに、取材なら、いろいろと、車掌に聞いたりするのではないだろうか？
妙な会話だなと、十津川は、内心、苦笑していた。
少くとも、十津川の方は、彼女のいうことを、全く信用せずに、話をしているのだ。
「携帯電話を、持っていらっしゃるのね？」
と、女は、ふと、眼を光らせて、十津川が、脇に置いてある携帯電話を見て、いった。
「ええ。なかなか便利なものですからね」
と、十津川がいうと、渡辺ひろみは、いきなり、手を伸して、
「ちょっと、貸して下さらない？　雑誌社に、連絡したいの」
と、いい、十津川が、断る間もなく、携帯電話を持って、デッキに、行ってしまった。
十津川が、見ていると、彼女は、ナンバーボタンを押して、じっと、耳に当てている。
相手が、出たらしく、何か呟いている。口を動かしているのだが、もちろん、声は、十津川の席までは、聞こえて来ない。
ひろみは、戻って来ると、別に、すみませんともいわず、
「これ、本当に、便利だわ」
と、笑っている。
十津川も、仕方なく、笑顔になって、
「どこへかけたんですか？」

「岩室温泉の高島屋さん」
「しかし、よく、電話番号を知っていましたね？」
「そんなもの、この観光案内に出てますわ」
ひろみは、さっき見ていた新潟周辺の観光案内を、十津川に、見せた。
「それで、部屋は、空いていましたか？」
「ええ。ちゃんと、予約できましたわ」
「じゃあ、これで、岩室まで、ご一緒ということになりましたね」
「私、まだ、十津川さんの仕事を聞いていなかった。どんな会社に、お勤めなんですか？」
と、渡辺ひろみは、改まった口調で、きいた。
（知っていて、聞いているのか？）
と、十津川は、思いながら、
「中堅の商事会社ですよ」
と、いった。大学時代の友人の一人が、K商事に勤めていて、会ったとき、仕事のことを、いろいろと、話してくれたから、ちょっとした質問には、答えられる自信は、あった。
しかし、ひろみは、「へえ。商社員の方なの」と、いっただけで、会社の名前を、聞いたりはしなかった。
（やはり、こっちのことを、よく知っているに違いない）
と、十津川は、思った。

4

一七時三〇分。新潟着。
ここから、一七時三九分発の柏崎行の普通列車に乗った。
これも、短かい編成の可愛らしい列車である。
ラッシュ・アワーなので、通勤客らしい人々が、多かった。

それも、岩室近くまで来ると、あらかた降りてしまって、車内は、がらんとしてしまった。

新潟までの磐越西線の車内では、口数が多かったひろみなのに、こちらの列車になってからは、疲れたのか、黙りこくってしまった。

小さな無人駅を、いくつか通って、一八時二六分に、岩室駅に着いた。

夕闇につつまれた駅前には、タクシーが、とまっていない。しばらく、待っていると、タクシーが、戻って来た。

十津川は、ひろみと二人で、そのタクシーに、乗った。

「岩室温泉」

と、十津川は、行先を告げた。タクシーは駅前の狭い商店街を抜け、水田と畠の中を、走って行く。

蛙の声が、聞こえた。

「蛙が、鳴いて――」

と、十津川は、いいかけて、黙ってしまった。

渡辺ひろみの身体と、十津川の身体が、車のゆれで触れたとき、小きざみに、ふるえているのを、感じたからだった。

列車の中で、勝手に、携帯電話を持って行ったりしたのに、岩室温泉に近づくと、彼女は、身体を、小さくふるわせているのだ。

十津川は、ちらりと、彼女の横顔に、眼をやった。

彼女は、窓の外に、眼を向けていた。が、身体は、こわばっているように見えた。

(やはり、この女が、私を、誘い出そうとしているのか?)

と、十津川は、思った。

だから、緊張が強くなって、身体が、ふるえているのか?

だが、そのことを、十津川は、口に出して、きく

ことはしなかった。相手が、正直に話す筈がないと、思ったからである。

七、八分で、高島屋旅館に着いた。

いかにも、歴史を感じさせる構えの建物で、玄関を入って、帳場に行くと、脇の待合室には、いろりが切ってあったりする。

ここも、田中祐介他一人で、予約されていた。

十津川は、それを、自分の名前に変えて貰った。

奥の部屋に通され、障子を開けると、広い庭が見えた。

すでに、暗く、庭の灯が、ともっている。ここでも、蛙の鳴く声が、聞こえた。

「私と一緒に来た女性ですが、どの部屋になりましたか？」

と、十津川は、案内してくれた女中さんに、きいた。

「廊下を、左に折れた突き当りの部屋で、ございますけど」

「彼女、この旅館に、前に来たことは、ありませんか？」

「いえ、初めてのお客さまだと思いますわ」

という返事が、返ってきた。

女中さんが消えると、十津川は、部屋の電話を使って、亀井に、連絡した。

「今、岩室の旅館に着いたところだよ」

「蛙の声が聞こえますよ」

と、亀井が、言った。

「ああ、庭の障子を開けているからね。喜多方のラーメン店で会った女だが、ここまで、一緒に来たよ。列車の中で、また、声をかけてきたんだ」

「いよいよ、怪しいですね」

と、亀井が、いう。

「渡辺ひろみと、名乗っているが、多分、偽名だろう」

と、十津川は、いった。
「何か、警部に、アタックしてきましたか？」
「今のところは、別にないね。やや、強引に、この岩室温泉の同じ旅館にやって来たことが、アタックとすれば、アタックかな」
「気をつけて下さいよ」
「ああ、十分に、用心しているよ」
と、十津川は、いった。
少しおそい夕食が運ばれてきて、十津川は寝巻に着がえ、くつろいで、食事をした。
渡辺ひろみは、何も、いって来ない。
（誰かに、連絡しているのだろうか？）
十津川は、庭を見やりながら、考えた。
岩室温泉の高島屋旅館に着いたことを、報告しているのかも知れない。
（相手は、誰なのだろうか？）
多分、男だろうが、十津川には、思い当る人間が、浮んで来ないのだ。
十二時近くなって、今度は、亀井の方から、電話が、入った。
「例の田中祐介名義のマンションの部屋ですが、買いたいといって見に来た客は、七人です。その七人を、今、調べています」
と、亀井は、いう。
「怪しい人物がいるかね？」
「二人います。明日中に、何かわかると思っていますが」
「ちょっと、待ってくれ」
「どうされたんですか？」
「今、部屋の入口の方で、何か、音がしたように思ったんだ。見てくるよ」
と、十津川は、いい、受話器を置いて、立ち上った。
部屋の入口は、和風のタタキになっていて、格子

戸がついている。
その隙き間に、白い紙が、挟んであった。
抜き取ってみると、小さく折りたたんだ、便箋だった。
その場で、広げて、眼を通した。
〈お願いです。
助けて下さい。
私は、殺されます
渡辺ひろみ〉
ボールペンの走り書きだった。
十津川は、この言葉を、どう解釈してよいのかわからなかった。

5

普段なら、一も二もなく、女の部屋に飛んで行くところである。
だが、今の十津川は、ここまで、誘い出されたという思いがある。それに、喜多方で近づいてきた女、渡辺ひろみも、偶然、現われたとは、考えられないのだ。
その女が、助けて下さいと、いっても、簡単には、その言葉を、信じられなかった。
だが、放っておくわけにもいかない。万一ということがあるからだった。
十津川は、考えた末、部屋の電話で女中さんを呼び、一緒に、渡辺ひろみの部屋を見て貰うことにした。
彼女が書いた紙片は見せず、女中さんには、
「さっき、あの部屋の前を通ったら、様子がおかしかったから」
と、いった。
部屋の前に来ると、女中さんだけに、中に入って貰うことにした。

女中さんは、しきりに、室内に向って、声をかけていたが、返事がないので、急に、緊張した表情になって、格子戸を開け、中をのぞき込んだ。

そのあと、中に入って行ったが、廊下に出てくると、

「いらっしゃいませんよ」

と、十津川に、いった。

「いない？　本当ですか？」

「ええ」

「こんな時間に、何処へ行ったんだろう？　この近くに、深夜に遊ぶような場所が、ありますか？」

「いいえ。でも、今夜は、月明りですから、庭下駄をはいて、月を見に、出られたのかも知れませんわ」

と、女中さんは、のどかなことをいう。

十津川は、彼女に、礼をいって、引き取って貰ってから、自分の部屋に戻り、障子を開けて、庭に出てみた。

なるほど、風もなく、おだやかな月夜だった。ここは、日本海に近い場所だが、寒くはなかった。

木戸を開けると、旅館の外に出ることが出来る。渡辺ひろみは、女中さんのいうように、庭下駄をはいて、旅館の外に出たのだろうか？

十津川は、庭に佇んで、煙草に火をつけた。

周囲の水田などから、相変らず、蛙の鳴き声が、聞こえてくる。それに、頭上の月も、星も、美しい。東京に住んでいて、忘れていたことだった。

しばらく、庭にいてから、部屋に入った。

渡辺ひろみを、探しに行く気はなかった。

本当に、殺されそうなら、行きずりに会った十津川に、助けを求めたりはせず、この旅館の人間に頼む筈だと思ったし、殺されそうな女が、庭下駄をはいて、深夜に、外に出て行くのも、おかしいと、思ったからである。

それでも、布団に入ってから、なかなか、寝つかれなかった。渡辺ひろみが心配だったからではなく、自分を、会津若松——喜多方——岩室と、誘い出した人間の企みは、いったい何なのだろうかと、考えていたからだった。

井の頭公園で、殺されていたホステスの原田みゆきは、自分を誘い出すための餌にされたのだという確信は、変っていない。

それを承知で、この岩室温泉まで、やって来た。偶然に見せかけて、女が、話しかけてきたり、殺されますと書いた紙を、格子戸に挟んでおいたり、いろいろと、小細工をしてくるが、このあと、どうする気なのだろう？

そんなことを考えていて、眠れなかったのである。

午前三時を過ぎて、やっと、眠りについた。

小鳥の声で眼がさめる。枕元に置いた腕時計を見ると、午前七時に、近かった。まだ、眠くて仕方がないが、昨日、七時半に朝食にしてくれと、いってあるので、あわてて起きあがり、顔を洗った。

その間に、布団がたたまれ、朝食が運ばれてきた。

庭に面した障子を開けての朝食になった。

「向うの女性だけど、何時頃、部屋に戻ったんだろう？」

と、箸を動かしながら、十津川は、女中さんにきいてみた。

「七時に、朝食をということでしたので、きっき、声をおかけしたんですけど、ご返事がないんです」

と、女中さんは、いった。まだ、眠っているんだろうという口ぶりだった。心配している気配はない。

十津川の方が、心配になってきて、

「眠っているんならいいんだが——」

と、呟いた時、廊下が、急に、騒がしくなった。
旅館の支配人が、二人の男を連れて、部屋に入って来た。そのとたん、二人の男を、刑事だなと、十津川は、直観した。
「申しわけありませんが、県警の刑事さんが、お客様に、ご用があるそうで」
と、支配人が、いう。
「ああ、構いませんよ」
と、十津川は、笑顔でいい、二人の刑事に向って、
「庭へ出ましょうか」
と、声をかけた。
庭下駄をはいて、庭に出てから、十津川が、警察手帳を見せると、県警の刑事二人は、さすがに、びっくりした顔になった。
「本庁の刑事さんとは、知りませんでした」
と、三十五、六歳の刑事が、いった。
「何があったんですか？」
と、十津川は、きいた。
「ここから、二百メートルほど離れた場所で、今朝、若い女の他殺体が、発見されましてね。この旅館の浴衣を着ていたので、調べに来たわけです。宿帳によると、東京の渡辺ひろみで、十津川さんと一緒に、昨日、チェック・インしたと、聞きました」
と、広田というその刑事は、緊張した顔でいった。
「つまり、私が、疑われているということですか？」
十津川は、冗談めかして、きいたのだが、もう一人の若い、二十七、八歳の刑事は、
「失礼ですが、あなたが、第一の容疑者です」
と、いった。
広田刑事が、あわてて、
「坂口君、この人は、本庁の刑事だよ」

「刑事でも、人は、殺すでしょう。人間ですからね」

と、坂口と呼ばれた刑事は、眼を光らせた。

「私が、彼女と一緒に、この岩室温泉に来たのは事実だから、疑われても仕方がありませんよ。もちろん、私は、殺してはいませんがね」

十津川は、落ち着いた声でいった。

「彼女とは、どういう関係ですか？」

と、若い坂口刑事が、気負い込んだ調子で、きいた。

（まるで、訊問だな）

と、十津川は、苦笑しながら、

「昨日の昼に、喜多方でラーメンを食べたんですが、そこの店で、偶然、一緒になったんですよ。そのあと、磐越西線の車内でも顔を合せて、話をしました。その時、私が、この岩室温泉に行くといったら、彼女も、それなら、私も行ってみようかしらと、いって、ここへ来たんですよ。私には、カメラマンで、雑誌の仕事で、東北の温泉を取材していると、いっていましたが――」

「それだけですか？」

「そうです。どうやって、彼女は、殺されていたんですか？」

と、十津川は、逆にきいた。

「首を締められていました。顔も、殴られていましたよ。多分、乱暴しようとしたが、抵抗されたので、犯人は、カッとして、首を締めたんだと思いますね」

と、広田刑事はいった。

6

「ところで、本庁の刑事が、何をしに、この岩室温泉に、来られたんですか？」

坂口刑事は、相変わらず、十津川を睨むようにして、きいた。
「殺人事件の捜査です」
と、十津川は、いい、井の頭公園で起きた事件のことから、ここまで、来たことを、二人の刑事に、話した。
「犯人の誘いにのった形で、犯人を、見つけようと思ったわけです」
「すると、渡辺ひろみという被害者も、わざと、近づいて来たと、思われていたわけですか？」
と、広田刑事が、きいた。
「そう思っていました。これも、その誘いの一つと見ていたんですがね」
と、十津川は、いい、昨夜、渡辺ひろみが、格子戸に、挟んでいった紙片を、二人に見せた。
二人の刑事は、じっと、文面に、眼を通していたが、
「これを、被害者が、十津川さんの部屋に置いて行ったのは、何時頃ですか？」
と、広田が、きいた。
「十二時少し前でしたよ。七、八分前です」
「なぜ、すぐ、一一〇番してくれなかったんですか？」
と、坂口が、咎めるようなきき方をした。
「それは、今も話したように、全て、犯人の仕掛けと、思っていたからです。それに、女中さんに見て貰ったら、月明りに誘われて、散歩に出ているらしいということだったので、様子を見ることにしたんですよ」
「しかし、渡辺ひろみは、この言葉のように、殺されましたよ」
坂口刑事は、まるで、十津川のせいで、殺されたみたいないい方をした。
年長の広田刑事は、見かねて、

「十津川さんのせいじゃないよ。それより、一刻も早く、犯人を見つけることだ。被害者の部屋を、調べてみよう」

と、坂口に、いった。

「私も、一緒にみせて頂きたいな」

と、十津川は、いった。

支配人も同行して、渡辺ひろみの泊っていた部屋に入った。

十津川には見覚えのあるカメラと、ショルダーバッグが、部屋の隅に、置かれていた。

広田と坂口の二人が、ショルダーバッグから、中身を取り出して、テーブルの上に並べていくのを、十津川は、傍で見ていた。

着がえの下着や、化粧バッグ、撮影済のフイルムや、未使用のフイルム、などが、並ぶ。

また、セカンドバッグには、財布、キーホルダー、運転免許証などが、入っていた。

広田は、運転免許証を見てから、十津川に、

「渡辺ひろみというのは、本名でしたよ」

と、いい、それを、見せてくれた。

なるほど、顔写真つきの免許証には渡辺ひろみと、書かれていた。

十津川は、意外な気がした。てっきり、偽名と、思っていたからである。住所も、中野区内のマンションになっている。それも、本当だったのだ。

(彼女は、私を、誘い出した人間とは、無関係な女なのだろうか?)

もし、そうなら、「助けて下さい」という伝言には、真剣に、対応してやるべきだったと、唇を噛んだ。

「十津川さん」

と、広田に呼ばれて、十津川は、われに返った。

「何ですか?」

「これは、十津川さんの名刺ですか?」

広田は、一枚の名刺を、差し出した。
「確かに、私の名刺ですが、どこにあったんですか？」
と、十津川は、眉をひそめて、きいた。
「被害者の財布の中です」
「私は彼女に、名刺を渡した覚えはないんだが」
「それなら、なぜ、彼女が、持っていたんでしょう？」
「私にも、わかりませんよ」
「本当に、喜多方で、初めて、会われたんですか？」
広田は、急に、疑わしげな眼つきになって、十津川を見た。
「もちろんです」
「失礼ですが、十津川さんの所持品を、見せて頂けませんか？」
と、広田が、いう。明らかに、十津川を、疑い始めたのだ。
十津川は、むっとしながらも、
「どうぞ。構いませんよ」
と、いった。
十津川の部屋に戻って、二人の刑事は、彼のショルダーバッグを、テーブルの上にのせた。
若い坂口刑事が、中身を一つ一つ、取り出していく。
その手が、急に、とまった。
「十津川さんは、カメラを、お持ちですか？」
「いや、持って来ていませんよ、東京の捜査本部に、連絡しなければならないので、携帯電話は、持ってきましたがね」
「では、これは、何ですか？」
坂口刑事は、マジシャンみたいな手付きで、バッグの中から、黒いものを、取り出した。
それは、撮影済のパトローネだった。

「私のものじゃない」
と、十津川は、いった。
「それなのに、なぜ、十津川さんのショルダーバッグに、入っているんでしょう？」
坂口は、皮肉な眼つきになった。
「そんなことは、知りませんよ。とにかく、誰かが、入れたんだ」
「これを、預っていって、現像します。構いませんね？」
と、坂口が、いった。

7

「待っている間に、東京に電話してもいいかな？」
と、十津川は、きいた。
「構いませんよ。ただ、この旅館から出ないで下さい」
と、坂口は、いった。
「逃げたりはしませんよ」
十津川は、眉を寄せていい、携帯電話で、亀井にかけた。
亀井がでると、十津川は、電話を持って、中庭に出た。坂口たちに、聞かれたくなかったのだ。
「カメさん。例の女が、今朝、死体で見つかった。殺しだ」
「妙な具合ですね」
「その上、どうやら、私が、容疑者にされそうなんだ」
「そんなバカな。私が、すぐ、そちらへ行きますよ」
と、亀井が、大きな声で、いった。
「ありがとう。その前に、女のことを調べて欲しい。渡辺ひろみ、二十五歳。中野区中野本町、ニューー中野マンション三〇六号だ」

「偽名じゃないんですか？」
「運転免許証があったよ。本名なんだ」
「調べて、何かわかったら、それを持って、私が、そちらへ行きます」
と、亀井は、いった。
部屋に戻ると、県警の二人の刑事の姿は、消えていた。
十津川は、煙草に火をつけ、渡辺ひろみという女のことを、考えた。
罠を承知で、相手の誘いにのる形で、十津川は、今度の旅に出た。相手が、どう出てくるか、どんな罠を仕掛けてくるかと、思いながらである。
その結果が、これなのだろうか？
だが、なぜ、あの女は、殺されたのか？　自分が、殺されるのを承知で、十津川を釣る餌になったのか？
（まさか）
と、思う。
それなら、彼女は、なぜ、喜多方で、声をかけて来た上、この岩室温泉まで、ついて来たのか？　そこが、わからなかった。
二時間ほどして、県警の刑事二人が、戻って来た。
年長の広田は、当惑の表情だが、若い坂口は、眼を、きらきら光らせていた。
（どうやら、悪い方に賭けた方がよさそうだぞ）
と、十津川は自分に、いい聞かせた。
「現像した写真を見て下さい」
広田は、相変らず、当惑の表情でいい、坂口は、どうだという顔で、現像、引伸した写真二十四枚を、テーブルの上に並べていった。
どれも、モノクロ写真である。
「この中で問題なのは、この四枚です」
と、坂口は、中ほどにある四枚だけを離して、並



べ直した。
夜景を写したものだった。高感度フイルムが使われているらしく、夜だが、かなりはっきりと、物や人が、写っていた。
「この四枚をよく見て下さい」
坂口は、ちらちら、十津川の顔を、のぞき込むようにして、いった。
「――？」
十津川の表情が、変った。
そこに、写っているのは、男と女で、男が女の首を締めていたからである。
場所は、どこか、神社の境内のように見える。樹々の間から、もつれ合う男女が、月明りの中に浮んでいるという感じだった。
「その男の方ですが、失礼ですが、十津川さんじゃありませんか？」
と、坂口が、いう。
「私――？」
「そうですよ、あなたですよ。それは」
坂口が、力を籠めて、いうのだ。
十津川は、じっと、写真を見つめた。彼は、自分の顔というのを、意識して見つめたことは、あまりない。鏡の中の顔も、写真の顔もである。
だが、確かに自分によく似た顔だと思った。
「よく似ているが、私じゃない」
「一昨日は、東山温泉に、泊られたんじゃありませんか？」
と、広田が、重い口調で、きいた。
「ええ。東山温泉に、泊りましたよ。それが、どうかしたんですか？」
「そこに写っているのは、東山温泉にあるT神社の境内です」
「なるほど」
「その写真は、明らかに、そのT神社の境内で、あ

なたと思われる男が、若い女の首を締めています」
「私じゃない」
「とにかく、今、福島県警に、調べて貰っています。一昨日の夜、女が、殺されていないかどうかです」
と、広田がいった。
三十分ほどして、部屋の電話が鳴った。
十津川が、受話器を取ると、男の声が、「広田刑事が、そちらにいますか？」ときいた。
十津川は、受話器を、広田に渡した。
彼は、「ああ、私だ」と、いい、黙って、聞いていたが、十津川を見て、
「やはり、T神社の裏手の竹藪の中に、首を締められた若い女の死体が見つかったそうですよ」
と、いった。

8

「しかし、私には、関係のないことですよ」
十津川は、ぶぜんとした顔で、いった。
広田は、黙っていたが、若い坂口刑事の方は、光る眼で、十津川を見て、
「関係がないで、すむでしょうか？　一昨日十津川さんが、東山温泉に泊った。そこで、その夜、一人の女が、殺された。そして、女性カメラマンが撮った写真には、十津川さんと思われる男が、その女の首を締めているところが、写っていた。これで、関係ないといえるでしょうか？」
「しかし、これは私じゃありませんよ。私が、殺人を犯す筈がないでしょう」
「犯人は、いつでも、そういいますよ」
と、坂口がいう。流石に、広田が、眉をひそめ

て、
「それはいい過ぎだ。謝りたまえ」
と、叱った。だが、坂口は、謝りはせず、十津川を、睨むように、見ている。
十津川は、もう一度、四枚の写真に眼をやった。
「この女の身元は、わかりそうですか？」
と、十津川は、広田にきいた。
「今、福島県警で、調べていますから、間もなくわかると、思います。東山温泉では、どのホテルに、お泊りですか？」
「ニュー東山ホテルですよ」
と、十津川が、いうと、広田はその名前を、自分の手帳に書き止めている。
まるで、容疑者扱いだなと思いながら、十津川は、
「この写真のフイルムですがね」
「ええ」
「なぜ、私のボストンバッグに入っていたか、説明がつきますよ」
「説明して下さい」
「渡辺ひろみが、助けて下さいと書いた紙片を、この部屋の格子戸にはさんでいった。その時、私は、女中さんを呼んで、彼女の部屋を、調べに行きました。その間、五、六分かかっている。私の部屋は、開けっ放しになっていた。その間に、何者かが、私の部屋に忍び込んで、私のボストンバッグに、このフイルムを、放り込んでおいたんですよ」
と、十津川は、説明した。
「それは、何者ですか？」
と、広田が、きく。十津川は苦笑して、
「わかっていれば、捕えますよ。この旅館の泊り客の中にいるのかも知れないし、中庭から忍び込んだのかも知れません」
と、いった。

「とにかく、しばらく、ここに泊っていて下さい」
広田が、釘を刺すように、いった。
「動きませんよ。私だって、真相を、知りたいですからね。わかったことは、全部、教えてくれるんでしょうね」
と、十津川は、きいた。
「もちろん、お知らせしますよ」
「この写真は？」
「ネガは、われわれが持っているから、十津川さんに、お渡ししておきます」
と、広田は、いった。言葉遣いは丁寧だったが、この中年の刑事だって、十津川を、疑っていることは、明らかだった。
二人の刑事が引き揚げたあと、十津川は、改めて、テーブルの上に置かれた二十四枚の写真を、一枚ずつ見ていった。
問題の四枚の写真の他は、風景写真が多い。場所はわからないが、東北の風景だろう。
四枚のあとの方には、喜多方のあのラーメン店の写真も、五枚、並んでいる。
混み合った店内で、客が、ラーメンを、食べている。よく見ると、その客の中に、十津川も、写っているのだ。
（あの時、彼女が撮った写真だ）
と、思う。
（これは、全部、罠なのだろうか？）
と、十津川は、考えた。
渡辺ひろみが、喜多方で、声をかけてきた時から、臭いなと思い、彼女が、殺されたと知った時、これこそ、十津川を、今度の旅行に誘い出した目的かと思ったのだ。
しかし、仕掛けられた罠は、もっと深いものだったらしい。
だが、それが、果して、どんなものなのか、くわ

しいことがわからない以上、差し当って、対応の方法が、つかめない。

昼過ぎになって、亀井から、電話が入った。

「渡辺ひろみのことが、少しだけわかりました」

と、亀井はいい、続けて、

「確かに、若手の女性カメラマンで、時々、雑誌の仕事をやっています。東京の生れで、S写真専門学校を卒業していて、独身です。前科はありません。父親は亡くなり、母親と、兄が、練馬に住んでいますね」

「私と、どこかで、接触しているかね？　私の名刺を持っていたんだが」

「それも、調べているんですが、今のところ、不明です。何かつかめたら、すぐ、私も、そちらへ行きます」

「私の方が、だんだん、厄介になってきたよ」

十津川は、東山温泉の事件のことを、話した。

「それは、明らかに、罠ですよ」

と、亀井が、いう。

「私も、そう思っているよ」

「警部に、本当に似た男なんですか？」

「まあ、似てはいるね」

「心配になって来ました。渡辺ひろみについて、何かつかめなくても、今日中に、そちらへ行きます」

と、亀井は、いった。

午後四時近くなって、また、広田と坂口の二人が、やって来た。

事態が、十津川にとって、更に悪くなったらしいことは、彼等の表情で、読み取ることが、出来た。

「東山温泉のことで、いくつかわかりました」

と、広田が、いった。

「それを、教えて下さい」

と、十津川は、覚悟を決めて、促した。

広田は、小さく、咳払いしてから、

「殺されていた女は、小坂井めぐみです。東京の女性で、殺されたのは、一昨日の午後十時から十一時の間だということです」
「小坂井めぐみ？　初めて聞く名前ですね」
「わかったことは、他にも、いろいろあります」
と、広田はいい、手帳を広げてから、
「小坂井めぐみは、一昨日、東山温泉のKホテルに泊っていますが、このホテルは、十津川さんの泊ったニュー東山ホテルのすぐ傍にあります。また、犯行現場であるT神社も、近くです」
「他には？」
「彼女は、男の電話で、誘い出された節があります」
「もちろん、私じゃない」
「こちらで死んだカメラマンの渡辺ひろみですが、彼女が、昨日、この旅館に着いてから、東京の友人に、電話をかけていることが、わかりました。同じ写真の専門学校の女友だちですが、その電話の内容が、重大なのですよ」
「どんな風にですか？」
と、十津川が、きくと、坂口刑事が、顔を、突き出すようにして、
「私が、いいましょう。渡辺ひろみは、こんな電話をかけているんですよ。東山温泉で、夜、ホテルの窓を開けたら、川向うの神社の境内で、人が争っているのを見て、夢中で、写真を撮った。月明りで、男が、女の首を締めるのが、はっきり見えた。男の顔も。そして、今日、喜多方で、ラーメン店に入ったら、その男が眼の前にいるので、びっくりしたと、友だちに、いっているんです。友だちはすぐ、警察に知らせなさいと、いったが、渡辺ひろみは、その男のことを調べてみるつもりだと、いったそうですよ。ラーメン店で、彼女の方から、声をかけたら、男は、ニヤニヤ笑いながら、名刺をくれたと、

いっています。驚いたわ、その男の名刺には、警視庁の刑事と、書いてあったわとも、渡辺ひろみは、友だちに、いっているんですよ」

「驚いたな」

「友だちは、探偵ごっこは危険だから、すぐ、一一〇番しなさいと、もう一度、忠告したが、渡辺ひろみは、大丈夫だ、この男が、犯人だという証拠をつかんでやると、張り切っていたそうです。どう思われますか？　これを」

と、坂口は、じろりと、十津川の顔を見た。

「どうといわれてもね。私の知らないところで、私を、殺人犯にしようとする計画が、進められていたというより、仕方がありませんね」

と、十津川は、いった。

「そんな弁明で、すむことでしょうかね」

と、坂口は、渋面を作って、十津川を見た。

第三章　女の肖像

1

東京の捜査本部は、事態の成行きに、困惑していた。

亀井は、すぐ、岩室に行くと、十津川にいったのだが、何もわからぬままに出かけても、何の役にも立たないだろうと、思った。

十津川は、明らかに、何者かの罠にはめられたのだ。それが、どんな罠なのか、手掛りだけでも、見つけてから、十津川に会いたい。

今度の事件では、女が三人、殺されている。

第一の原田みゆきは、十津川を誘い出すためのエサだとすれば、彼女のことを、いくら調べても、犯人は、浮び上っては来ないだろう。

問題は、あとの二人である。

渡辺ひろみと、東山温泉で殺された小坂井めぐみである。

亀井は、新たに名前の出てきた小坂井めぐみのことは、西本と日下の二人の刑事に調べさせておいて、渡辺ひろみのことを、彼女の友人たちに、聞いて廻った。

その一人、新井由加に、会った。

彼女は、渡辺ひろみと、同じ写真専門学校の同窓生で、現在は、インテリアデザインの仕事をしていた。

亀井が、由加に会う気になったのは、ひろみが死ぬ前に、電話していたからである。

「これは、新潟県警の刑事さんに話したことなんで

すけどね」
と、由加は、荻窪の自宅マンションで、亀井に、答えてくれた。
「東山温泉で、女性が殺されるのを見たという電話が、あったそうですね？」
と、亀井は、確認するように、きいた。
「ええ。その通りですわ」
「失礼ですが、本当に、そんな電話を、渡辺ひろみさんは、して来たんでしょうか？」
亀井がきくと、由加は、眉をひそめて、
「もちろん、本当ですよ。なぜ、お疑いになるのかしら？」
「別に、疑っているわけじゃありませんが、何ぶんにも、人を殺したというきわどい内容ですのでね。そんな電話があったという証拠でもあればと、思うんですが」
「ありますわ」
「あるんですか？」
「ええ。ひろみとの会話は、録音してありますから」
と、由加は、いう。
亀井は、びっくりして、
「あなたは、いつも、電話を、録音するんですか？」
「ええ。インテリアデザインの仕事をしていますから、注文のことで、あとで、いったいわないが、問題になることがあるんですよ。だから、掛ってきた電話は、全部、録音することにしているんですわ」
「では、渡辺ひろみさんとのやりとりも、録音されているわけですね？」
「ええ。県警の方が、必要だとおっしゃるんで、ダビングして、お送りしましたわ」
「元のテープを、聞かせてくれませんか」
と、亀井はいった。

由加は、小型のテープレコーダーを持って来ると、それに、テープを入れ、再生のボタンを押した。

女二人の声が、聞こえた。

――由加？　あたしよ。ひろみよ

「ああ、今、何処にいるの？」

――岩室温泉の高島屋という旅館よ

「温泉？　羨ましいわね。温泉めぐりしてるなんて」

――仕事よ。だけど、あんたに電話したのは、温泉のことじゃないの。ひょっとすると、あたしは、殺されるかも知れないと思ってね。もしも、あたしに、何かあったら、あんたに、覚えておいて、貰いたいことがあるのよ

「いったい、何があったの？」

――昨日、東山温泉に泊ったのよ。会津若松の近くの

「知ってるわ」

――夜、眠れなくて、窓を開けたら、月明りで川向うのT神社の境内が、よく見えるの。川っていっても、狭い渓谷だから、その境内まで、二、三十メートルしかなかったわ。だから、はっきり見えたのよ。そしたら、急に、男の人と、女の人が、もつれるように、現われたの。浴衣に丹前をはおっていたから、この近くのホテルの泊り客だと思ったわ

「月が明るいから、アベックで、散歩に出たんじゃないの？」

――あたしも、そう思ったのよ。でも、見ていると、様子が、変なのよ。男が、いきなり、女を殴りつけて、その上、首を締めたのよ

「大変じゃないの」

――そうよ。丁度、カメラにフイルムが入ってたから、夢中で、写真を撮ったわ。モノクロの高感度のフイルムが入ってるから、十分に撮れると思ったの

よ

「それから、どうなったの？」

――すぐ、二人とも、視界から消えてしまったわ。男は、四十歳くらいで、女は、二十五、六歳だったわ

「警察に、電話したの？」

――いえ

「なぜ、しないの？」

――朝になって、きっと、昨夜、ホテルの泊り客の女性が、殺されたというので、大さわぎになると、思ったのよ。そうなったら、警察に、話そうと思ったんだけど、何の騒ぎもないの

「きっと、男が、死体を隠しちゃったんだわ」

――私も、そう思ってるの。それで、今日の昼に、喜多方で、名物のラーメンを食べに、店に入ったら、その男に、ばったり会ったのよ。女の首を締めた男よ

「その男に間違いないの？」

――間違いないわ。月明りの中で、はっきり見たんだもの

「それで、どうしたの？」

――そいつが、女を殺した証拠をつかんでやろうと、思ったわ。何も知らないふりをして、話しかけてみたの

「そうしたら？」

――平気な顔で、名刺をくれたわ。その名刺を見て、びっくりしちゃったわ。何者か、想像がつく？

「意外な人物？」

――ええ。そうなのよ

「一流商社のエリートサラリーマンとか、学校の先生とか？」

――それどころか、刑事なのよ。警視庁捜査一課の十津川省三って、名刺に、書いてあったのよ

「刑事？　刑事が、東山温泉で、人殺しをやったわ

け？」
——そうなのよ。ひどいもんじゃないの
「それで、ひろみは、どうする気なの？」
——許せないと思ったわ。だから、何とか、この刑事が、女を殺した証拠をつかんでやろうと思って、その男が行くという岩室温泉まで、一緒に来たわけなの
「そんなの危険だわ。すぐ、地元の警察に、事情を、話しなさいよ」
——駄目だわ。十津川という男は、否定するに決ってるし、そうなったら、ここの警察だって、刑事のいうことを、信用してしまうわ
「でも、あんたに、何が出来るの？」
——脅してやろうと思ってるのよ。お前が、東山温泉で、何をやったか知ってるぞってね。きっと、尻尾を出すわ
「そんなこと、止めてよ。殺されるわよ」
——大丈夫よ。でも、万一のことがあったら、あんたが、警察に、電話してね。あたしがこんなことをいっていたって

2

そこで、二人の会話は、終っていた。
「ひろみが、殺されたと知って、すぐ、新潟の警察に、電話をかけたんですよ」
と、由加は、いった。
亀井は、そのテープをダビングして、貸して貰えるように、由加に頼んでから、
「渡辺ひろみさんは、どんな女性ですか？」
と、きいた。
「美人で、頭が良くて、私は、尊敬してますわ」
「尊敬ですか？」
「ええ。学校を出てから、カメラ一筋ですもの。偉

いと、思っていますわ」
「しかし、あまり売れていなかったんじゃありませんか？　カメラマンとしては」
亀井は、遠慮なく、いった。
「そりゃあ、まだ、若いし、あの世界は、まだ、男社会で、女性の進出は、難しいんです。それにめげず、やっていたんだから、立派だと思いますわ」
「彼女、独身ですか？」
「ええ」
「恋人はいたんですかね？」
「さあ、私には、わかりませんけど」
「しかし、あなたは、親友だったんでしょう？　あんな大事なことを、電話してくるくらいなんだから」
「専門学校の仲間ですけど、特別に、親しかったわけじゃありませんわ。ただ、先月、一緒に、食事をして、飲んだりしたから、それで私に電話して来たんだと思いますわ」
と、由加は、いった。
「その時、どんな話をしたんですか？」
と、亀井は、きいた。
「ほとんど、学校時代の思い出話でしたわ。久しぶりに会いましたから」
「偶然、会ったんですか？」
「いいえ。彼女の方から、私が働いている事務所に訪ねて来たんです」
「小坂井めぐみという女性を知っていますか？」
「それ、どういう人なんですか？」
「東山温泉で、殺されていた女ですよ」
「そうですの。知りませんわ、私は」
「彼女も、写真の学校の同窓生じゃないんですか？」
「いいえ。小坂井めぐみという人は、いませんでしたわ」

と、由加は、はっきりと、いった。
「あなたの他に、渡辺ひろみさんのことを、よく知っている人は、いませんかね？」
「誰かいたかしら――」
と、由加は、考え込んでいたが、奥から、手紙の束を、持って来た。
その中から、一枚のハガキを抜いて、亀井に見せた
「彼女、S写真学校の同窓なんです。私より、ひろみのことを、よく知っているかも知れませんわ」
「このハガキを、お借りします」
と、亀井は、いった。
ハガキの主は、山下恵子という女で、子供が生れたことを知らせる内容だった。渡辺ひろみも、新井由加も、独身のようだが、このハガキの主は、結婚して、子供が出来たのだろう。
亀井は、四谷三丁目のマンションに住む山下恵子を、訪ねた。
恵子は、生れたばかりの子供を抱いて、亀井の前に現われた。
「ええ。渡辺ひろみとは、専門学校で、一緒でしたわ」
と、恵子は、落ち着いた声で、亀井に、答えた。
「彼女が死んだのを、知っていますか？」
「ええ。テレビのニュースで知って、びっくりしているんです」
「彼女と、最近、会いましたか？」
「今年の正月に、会いましたわ」
「その時、どんな話をしたか、覚えていますか？」
「私は、結婚して、カメラの仕事をやめてしまいましたけど、ひろみは、ずっと、仕事を続けているから、偉いわって、話になりましたわ」
「彼女は、仕事が、うまくいっていたんですかね？カメラの仕事は、大変だと、聞いていますが」

「ええ、大変ですわ。彼女も、少しは仕事があっても、生活は、楽じゃなかった筈ですわ」
と、恵子は、いった。
「彼女の家は、資産家じゃありませんね？」
「ええ。普通のサラリーマンの家ですから」
「それでは、どんなことで、生活をしていたんですかね？　カメラの仕事だけじゃあ、暮らしていくのは、大変なんでしょう？」
「彼女のクラスではね。でも、彼女は、きっと、一人前のカメラマンになるって、はりきっていましたわ」
「彼女が、金に困っていたということは、ありませんかね？」
「さあ、そこまでは、聞いていませんけど」
「彼女は、東北の温泉と、うまいものめぐりを、雑誌の仕事で、やっていたことになっているんですが、どの雑誌か、わかりますか？」
と、亀井は、きいた。
「いいえ。でも――」
「でも、何ですか？」
「彼女クラスのカメラマンで、そんなおいしい仕事があるかしら？」
と、恵子はいう。
「普通は、ありませんか？」
「ええ。今回は、もちろん彼女の腕が買われたんだと、思いますけど」
と、恵子は、奥歯に、物がはさまったようないい方をした。
亀井は、念のために、都内の出版社に、片っ端から電話をかけ、渡辺ひろみに、東北の温泉めぐりと、グルメ案内の仕事を頼んだかどうかを、きいてみた。
大出版社から、小さな出版社まで、電話をかけまくったが、該当する出版社は、見つからなかった。

どうやら、渡辺ひろみが、十津川に話したことは、嘘だったらしい。

最初から、嘘をつき、喜多方で、十津川に近づいたのか。

東山温泉で殺された小坂井めぐみについて調べていた西本と日下の二人の報告も、妙なものだった。

「どうも、はっきりしない女ですよ」

と、西本は、いった。

「何が、はっきりしないんだ？」

「目白の高級マンションにひとりで住んでいるんですが、何をしていたのか、さっぱりわからないんです。無職では、あんなぜいたくな生活は、とても出来ないと、思うんですが――」

3

「わからないって、生きて、食べて、寝てるんだろう？」

と、亀井は、腹立たしげに、二人の若い刑事にいった。

「そりゃあ、そうなんですが、実体がつかめないんですよ。ぜいたくな生活をしているんですが、何処からその金が入っているのかもわからないんです」

「小坂井めぐみは、本名だろう？」

「そうです」

「それなら、経歴は、わかるだろう？」

「マンションは、彼女の所有ですから、本籍地は、わかります。北海道の小樽ですが、市役所に電話したところ、もう、誰も、住んでいないということなんです」

「家族はいないのか？」

「そんな感じです」

「他には、何もわからずか？」

「わかりません。マンションの管理人も、何も知ら

ないと、いっています」
「マンションの彼女の部屋は、調べたんだろう？」
「もちろん、調べました。金のかかった部屋ですよ。キッチンの設備は、全て、西ドイツ製ですし、ソファなどは、イタリア製です。バスルームは、大理石造りで、蛇口は、ゴールドです」
「そんなことは、どうでもいいんだ。写真や、手紙なんかで、つき合っていた人間が、わかるだろう？」
と、亀井が、きいた。
西本は、小さく肩をすくめるようにして、
「それが、全く、見つからないんです」
「全然ない？」
「ええ。彼女が、そのマンションを、二億五千万で買ったのは、三年前です。それから、三年間、住んでいるのに、いくら探しても、手紙も、写真も、全く、見つからないのです。不思議です」
「誰かが、始末してしまったかな？」
「そう思いますね。誰かが、侵入して、手紙や、写真を、持ち去ったんだと思います」
「預金通帳なんかは、なかったのか？」
「それも無ければ、おかしいと思うんですが、ありませんでした。高価そうな宝石類は、見つかりましたが、預金通帳は、見つかりません」
「それも、誰かが、持ち去ったか？」
「そう思います」
「現金は、なかったのかね？」
「百万円近くが、三面鏡の引出しに、入っていました」
「金には、困っていなかったということだな？」
「そう思います」
「金にあかして、毎日、遊び歩いていたわけじゃないだろうに」
「それも、わからないんです。それから、車を持っ

ていました。ポルシェ９１１です。一千万円はする代物です」
「それは、どうやって、手に入れたんだ？　誰かからのプレゼントかね？」
「いえ。販売店に聞いたところ、彼女が、現金で、買っています。二年前です」
「現金で？」
「そうです。ショルダーバッグに、一千万円の札束を詰めて、買いに来たそうです」
「なるほどね。振り込みだと、誰が金を出したか、わかってしまうからだろう」
と、亀井は、いってから、
「引き続いて、彼女について、聞き込みを続けてくれ。それから、目白周辺の銀行を、片っ端から、聞いて廻るんだ。小坂井めぐみが、預金している銀行に、ぶつかる可能性もあるからな。私は、新潟へ行ってくる」
「十津川警部は、大丈夫なんですか？」
と、日下が、心配そうに、きく。
「もちろん、大丈夫さ」
と、亀井は、いった。
その日の中に、亀井は、上越新幹線で、新潟に向い、新潟からは、越後線に乗った。
岩室温泉に着いたのは、夜になってである。
高島屋旅館に着くと、十津川が、嬉しそうに、亀井を迎えた。
「ここに、軟禁状態でね。動きがとれないんだよ」
と、十津川は、彼にしては、珍しく、弱音を吐いた。
「警部を、逮捕するといっているんですか？」
と、亀井は、きいた。
「今は、まだ、重要参考人といったところだね。それも、私が、現職の刑事だから、慎重にやってるんだ。普通の人間なら、とうに、逮捕され、起訴され

てしまっているよ」
「この旅館から飛び出したら、逮捕するというわけですか？」
「そういわれているよ」
「やはり、罠ですか？」
と、亀井が、きいた。
女中さんが、茶菓子を持って来てくれたので、二人は、その間、黙っていた。
十津川は、お茶を口に運んでから、
「明らかに、罠だね。それを、覚悟で、飛び込んだんだが、こんな形の罠とは、思わなかったね」
「どんな罠だと、思われていたんですか？」
と、亀井が、きいた。
「もっと、直接的な攻撃に、さらされると思っていたんだよ。どこか、崖の上にでも、誘い出されて、突き落とされるといったね」
と、十津川は、笑った。
「この罠は、陰湿なだけに、時間をかけて、計画されたもののような気がしますね」
と、亀井は、いった。
「それで、カメさんには、何か、わかったのかね？」
「問題は、東山温泉で殺された小坂井めぐみですね。これが、今度の事件の核だと思います」
と、亀井は、いう。
十津川は、肯いた。
「最初の原田みゆきは、私を誘い出すためのエサだった。彼女でなくても、過去のありそうな女なら、誰でもよかったのさ。三人目の渡辺ひろみは、私の東山温泉での人殺しを証明する道具だ。金で、どうにでもなる人間ならよかったわけだよ。とにかく、証言させておいて、口封じに、殺してしまえばいいんだからね。一番大事なのは、私が、直接、手を下して殺したことになっている女だよ。小坂井めぐみ

だ」
「彼女と、前に、お会いになったことがありますか？」
と、亀井が、きいた。
「私も、それを考えたよ。ひょっとして、前に、会ってないかとね。だが、小坂井めぐみという名前に、記憶がないんだ。彼女について、何かわかったのかね？」
「それが、全くわからないんですよ」
亀井は、西本と日下の二人が、調べた結果について、十津川に、報告した。
「確かに、妙な具合だな」
と、十津川も、いった。
「何者かが、小坂井めぐみの過去を、必死になって、隠しているとしか、思えないんですよ」
「私を、殺人犯に仕立てあげるためなら、そんな七面倒くさいことを、する必要はない筈だよ。私の知っている女なり、男なりを、東山温泉で殺した方が、効果的だからね」
と十津川はいった。
「その通りなんです。犯人は、難しいことをしています。警部のいわれる通り、殺された女のことを調べていったら、警部の名前が出て来たという方が、罠として完璧ですからね。小坂井めぐみは、どんな女か、全くわかりません。その一方で、警部の名前も、出て来ないんです。罠にしては、不完全ですよ」
「いや、これから、私の名前が出てくるかも知れないよ」
と、十津川は、慎重に、いった。
「そうでしょうか？」
「君もいったように、今度の罠は、なかなか、陰湿だからね」
と、十津川は、いった。

「カメラマンの渡辺ひろみは、どう思われますか？誰かに、金で傭われたと、思われますか？」
「他に、考えようがあるかね？」
「前に、お会いになったことは、ありませんか？」
「ないね。彼女についても、もちろん、考えてみたが、記憶にないんだ」
と、十津川は、いった。
「警部に似た男については、いかがですか？」
と、亀井が、きく。
十津川は、苦笑して、
「ああ、写真の男かね。それも、記憶にないんだよ。カメさんは、どうなんだ？　私に似た男に会ったことがあるかね？」
「いや、ありません」
「今は、メークアップが進歩しているからね、少し似ている男なら、メークアップの力で、よく似た顔に出来るんじゃないかな」
と、十津川は、いった。
「そうですね。映画では、人間を猿にするメークも可能ですから、警部に似たメークも、簡単かも知れません」
と、亀井も、いった。
「正直にいうと、弱っているんだよ」
と、十津川はいい、いらいらしたような手つきで、煙草を取り出して、火をつけた。
「わかります。動けないからでしょう？　動き廻れれば、弱音を吐かれるような警部じゃありませんから」
と、亀井がいう。
「もう一つ、小坂井めぐみまで、私と関係がないとすると、彼女から、事件を辿れないことになってくる。それも、参るんだよ」
「そうですね」
「だが、犯人は、辿れる。それが、唯一の頼りだ

よ」
「警部の動けない分は、私が、動きますよ。西本と日下も、東京で、小坂井めぐみの周辺の聞き込みを続けています。何かわかり次第、こちらに、連絡してくることになっています」
と、亀井が、励ますように、いった。

4

午後八時近くなって、広田と、坂口の二人の刑事が、やってきた。
「福島県警から、新しい興味のある報告が入りましたよ」
と、若い坂口刑事が、思わせぶりないい方をして、十津川を、見た。
十津川は、苦笑して、
「つまり、私にとって、不利な情報が入ったということですか？」
「そうです」
「とにかく、聞かせて下さい」
と、十津川は、いった。
「殺されたカメラマンの渡辺ひろみの他に、もう一人、目撃者が、見つかったんですよ。例のT神社の近くで、犯行のあった直後と思われる時間に、あなたに出会ったという人間が、いたんです。旅館の人間で、いきなりぶつかってきた男がいた。その男の顔を、覚えていましてね。あなたの写真を見せたところ、間違いなく、この男だと、証言したということです」
「信用のおける人間なんでしょうね？」
「もちろんです。東山温泉の古い旅館のオーナーで、組合の役員をやっている人間です。ぶつかった男は、街灯の下で見たら、血相を変えていたと、証言しているそうですよ」

と、坂口がいい、それに続けて、広田刑事が、
「渡辺ひろみだけでなく、もう一人、目撃者がいるとなると、十津川さんの容疑は、ますます、濃くなったと、思わざるを得なくなりました」
「私を、逮捕するわけですか？」
「県警には、まだ、慎重にという空気がありますが、マスコミに、知られてしまいましてね」
と、広田が、いう。
亀井が、顔色を変えて、
「あんたたちが、無責任に、喋ったのかね？　誤認逮捕ということになれば、大変なことになるよ」
「われわれは、同じ警察の恥になるようなことはしませんよ。東京にいる渡辺ひろみの友だちが、新聞社に、電話したんですよ。電話のやりとりを、録音していたので、そのテープを、送りつけたんです」
と、広田は、いう。
「新井由加という女だ」
と、亀井は、呟いた。
「そうです。彼女です。その結果、新聞記者たちが、押しかけてきましてね。これだけ証拠が揃っているのに、相手が同じ警察の人間だと、逮捕しないのか、手心を加えるのかと、いいましてね」
「それで、令状を、持ってきたんですか？」
と、十津川が、きいた。
「うちの本部長が、あと、二十四時間、待とうといわれましてね。それで、われわれが、来たわけですよ」
と、広田が、いう。
「つまり、二十四時間以内に、反証があがらなければ、殺人容疑で、逮捕するというわけですね？」
と、十津川は、念を押した。
「そうですよ」
と、坂口が、いった。
「いざという時、みっともない行動だけは、とらな

いで下さいと、お願いに来たんですよ」
「ありがたいね」
と、十津川は、苦笑した。
「とにかく、あと、二十四時間ですから」
と、広田はいい、二人の県警の刑事は、帰って行った。
亀井は、それを見送ってから、いまいましげに、
「何ですか、あの坂口という若い奴は。まるで、警部を逮捕できるのが、楽しいみたいじゃありませんか」
「一種の正義感さ」
と、十津川は、いった。
「正義感ですかねえ」
「ああ。たとえ警視庁の刑事だろうと、犯人なら、絶対に逮捕してやるぞという正義感だよ」
と、十津川は、いった。
「そうは、思えませんがねえ」
と、亀井は、舌打ちしてから、
「西本たちに、はっぱをかけましょう」
と、いった。
亀井は、部屋の電話で、西本に連絡をとった。
「余裕は、あと二十四時間しかなくなった。何とかして、小坂井めぐみの背後にいる人間を、突き止めるんだ！」
と、亀井は、怒鳴った。

5

亀井は、そのあと、心配になってきて、落ち着けなかった。
「私も、もう一度、東京に戻って、調べたいと思います」
と、亀井は、十津川に、いった。
「まだ、列車があるかな？」

「燕三条へ車で出れば、最終に間に合うと思います」
と、亀井は、腕時計を見ながらいった。
タクシーを呼んで貰い、燕三条に、急がせた。何とか、二一時四二分発の最終の上越新幹線に間に合った。
東京に着いたのが、二三時三八分である。
そのまま、捜査本部に向った。
迎えに出た西本たちに対して、亀井は、
「何かわかったか？」
と、きいた。
「今も、日下刑事たちが、聞き込みを続けていますが、どうも、カーテンが下っていて、その奥がのぞけないようないらだたしさを感じています」
と、西本は、いった。
「カーテン？　具体的に、いいたまえ」
「沈黙の壁です。今までに、小坂井めぐみについて、何か知っていると思える人間三人に、会ったんですが、三人とも、こちらが質問すると、何も知らないと、いうわけですよ」
「その三人というのは、どんな連中なんだ？」
「マンションの管理人、隣室の女性、それに、小坂井めぐみが、よく行っていたという美容院のママです」
「何も知らない――か」
「そういわれてしまうと、まさか、嘘をつくなと、脅かすわけにもいかなくて、困惑しているところです」
「誰かが、手を廻して、口封じをしていると、思うのかね？」
「そんな感じもしています」
「問題の三人だが、誰かに脅されている感じがしたかね？」
「管理人は、怯えている感じがしましたね。他の二

人の女は、わかりません」
「隣室の女というのは、どんな素性なんだ？」
「銀座のクラブのホステスです。名前は、島田アキ。二十五、六歳の美人です」
「この時間だと、まだ、店だな？」
「そうです。清水刑事が銀座の店へ廻って、会って来ました」
「私が、マンションの管理人に、会ってみよう」
と、亀井は、いった。
西本刑事の運転するパトカーで、目白にあるマンションに向った。その途中で、
「銀行には、当ってみたのか？」
と、亀井は、西本に、きいた。
「マンション周辺の銀行や、信用金庫に、全部、当ってみました。しかし、どの銀行、信用金庫も、小坂井めぐみの口座はないという返事です」
「本名で、預金しているとは、限らんだろう？」
「彼女の写真も見つからないので、似顔絵を作りまして、それを見せましたが、どの銀行、信用金庫でも、知らないと、いっています」
「似顔絵は、間違いないのかね？」
「念のために、福島県警に電話して、聞いてみましたが、殺された小坂井めぐみの顔に、よく似ているようです」
「銀行には、警察手帳を見せて、聞いたんだろうね？」
「殺人事件の捜査だということも、話して、協力を求めました。それでも、彼女の口座はないということでした」
「それじゃあ、彼女は、何処に、預金していたんだ？」
「遠く離れた銀行に、預金しているとは、思えません。そんな不自由な形で、預金するというのは、ちょっと考えにくいからです」

「すると、どこかの銀行か、信用金庫が、嘘をついているということになるな」
「そうなんです」
「嘘をついて、銀行なり信用金庫が、トクをするということは、考えにくいよ。まさか、小坂井めぐみの殺しに、関係があるとも、思えないからね。となると、誰かが、黙らせているんだろう」
「銀行や、信用金庫の口封じが出来る人間が、いるんでしょうか？」
「今の銀行は、あまり、信用がおけないからな」
と、亀井は、いった。
目白のマンションに着くと、日下と清水の二人の刑事が、飛び出して来て、
「管理人が、消えました」
と、亀井に報告した。
「時間で、自宅に帰ったんじゃないのか？」
「違います。管理人室に、住み込みです。それが姿を消してしまったんですよ」
「二人とも、監視していなかったのか？」
と、亀井が叱った。
「他に調べなければならないことが、多過ぎて、管理人を監視している余裕は、なかったんですよ」
と、西本が、いった。
「北条刑事は、どうしてる？」
と、亀井が、きいた。
「今、小坂井めぐみが、よく行っていた美容院のママに、アタックして貰っています。われわれが、何も聞き出せなかったので、女の北条君なら、向うも気を許すかも知れないと、思いまして」
と、日下が、説明した。
「しかし、美容院は、もう閉っているだろう？」
「美容院のママは、深夜スナックも、やっているので、北条君は、そちらで、ママに会っている筈です」

「あとで、君も、行ってみてくれ。北条刑事が、ひとりだと、やはり、心配だからね」
と、亀井は、日下にいっておいて、管理人室をのぞいてみた。
ドアは、開いていて、1DKの部屋には、ベッドも置かれ、確かに、ここで、寝起きしていたことが、わかる。
洋ダンスの引出しが、開けられたままになっていて、あわただしく、姿を消した感じがした。ドアが、開いたままになっていたことも、それを示している。
「自分から逃げ出したのか、それとも、どこからか、指示があって、逃げたのかな？」
亀井は、部屋の中を、見廻しながら、呟いた。
「突然、逃げ出したところをみると、誰かの指示じゃありませんか」
と、日下が、いった。
「もし、そうなら、そいつの正体を知りたいね」
と、亀井は、いった。その人間が、多分、十津川を、罠にはめたのだ。
管理人は、怯えていたという。それを知って、彼を隠したのだろうか。

6

亀井は、小坂井めぐみの部屋に、西本たちと一緒に、入った。
すでに、西本たちが、調べつくしているのだが、もう一度と、亀井は、思ったのである。
改めて、金をかけた部屋だなと、亀井は、思った。何もかも、ぜいたくに造られている。
「これで、パトロンがいなかったら、不思議だな」
と、亀井は、いった。
「その証拠が、見つかるといいんですが」

「もう一度、徹底的に調べるんだ。絶対に、見つかるという信念で、やってくれ」
と、亀井は、西本と、清水の二人に、いった。
人間が住んでいれば、その部屋には、その人間の痕跡が、残っている筈である。何者かが手紙や、写真を、全て持ち去ったが、ここに住んでいた小坂井めぐみの痕跡まで、消すことは、出来なかった筈である。
亀井に励まされて、西本と清水の二人の刑事が、部屋の中を、改めて、探し始めた。日下刑事は、北条早苗刑事をサポートするために、目白駅近くの深夜スナックへ飛んで行った。
「やはり、何もありませんよ」
と、西本が、亀井にいった。
「メモや、手帳といったものは、一つもありませんね」
と、清水も、いう。
亀井は、「うーん」と、小さく、唸り声をあげていたが、急に、眼を光らせて、
「眼の前に、手掛りがあるじゃないか」
と、二人に、いった。
「何かありますか？」
怪訝な顔をして、西本と、清水が、きいた。
「家具が、全て、高級品だ。輸入高級家具というやつだよ。こういうものを、販売している店は、限られている筈だ。そこでは、多分、小坂井めぐみは、お得意だったと思うね。店の人間は、彼女のことを、よく知っているかも知れんよ」
と、亀井は、いった。
「調べて、その店に行って来ます」
西本が、元気を取り戻した顔で、いった。
「朝になってからでいいさ。この時間では、調べようがないだろう」
と、亀井は、いった。

三人は、いったん、捜査本部に戻って、朝まで、仮眠をとることにした。

夜明け近くなって、北条と、日下の二人が、帰って来た。

日下が、感心したように、

「さすがに、北条君は、女で、向うも安心したのか、面白いことを、聞き出しました」

と、亀井に、報告した。

「客のふりをして、スナックに入り、ママにではなく、店のホステスに、話を聞きました」

と、早苗は、いった。

「それで、何がわかったんだ？」

「小坂井めぐみは、美容院だけではなく、あのスナックにも、時折、やってくることがあったそうなんです。ある時、ロールスロイスで、やって来たことがあって、びっくりしたそうですが、その時、六十歳ぐらいの男と一緒だったと、いっています」

と、早苗はいった。

「それは、一度だけなのか？」

「はい。一度だけで、およそ一ヵ月前の深夜、午前一時頃だったと、いっています」

「その男が、いったい、誰なのか、わかったのかね？」

「そこまでは、わかりませんが、小坂井めぐみは、男のことをセンドウさんとか、パパとか、呼んでいたと、ホステスは、いっています」

「パトロンかな？」

「そう思いますわ」

「人相は？」

「それも、聞きました」

と、早苗はいい、手帳を広げて、

「今いいましたように、年齢は、六十歳くらいで、見事な白髪。身長一七五センチくらい。この年齢の男性にしては、長身の方ですわ。店に来た時は、う

すい色のサングラスをかけていて、最後まで、取らなかったと、いっています。体重は、六十キロぐらいで、痩せていたそうです。これは、店のホステスの感想なんですけど、きっと、政財界の偉い人に違いないと。背広を、きちんと着ていて、襟に、バッジが光っていたそうですから、ホステスの品定めは、当っているかも知れませんわ」

「襟に、バッジがね」

「ここまで、聞いたら、ママが、飛んで来て、ホステスを追い払ってしまったんです。私も、すごい眼つきで、睨まれましたわ」

と、早苗は、笑った。

「センドウか」

亀井は、黒板に、片仮名で、センドウと書き、その横に、千堂、千頭、船頭、仙堂と、考えられる漢字を、並べていった。

そのどれが、正しいかは、わからないが、それほど、多くある姓ではないので、調べていけば、該当者が、自然に、浮びあがってくるのではないか。

夜が明けてから、亀井の指示で、都内にある輸入高級家具の店を、西本たちが、手分けして、当っていった。

亀井の予想どおり、赤坂にある店で、手応えがあった。

目白の小坂井めぐみに、イギリスのアンティックな家具を、売ったというのである。その家具は、彼女のマンションのキッチンに、並んでいたものだった。

「私どものところには、よく、いらっしゃっていましたよ」

と、若いオーナーは、やや、得意気にいった。

有名人も、よく、購入していくという。

「来る時は、誰かと、一緒でしたか？」

と、亀井は、きいた。

「おひとりの時もあるし、男の方と一緒の時も、ありましたね」
「男の人は、いつも、同一人ですか？」
「いや、年配の方の時もあるし、若い人のときもありましたよ。あの若い男の人は、何とかいうタレントでしたね」
と、オーナーは、いった。
「年配の男性の名前は、わかりませんか？」
「いや、その人が、買ったわけじゃありませんからね」
「見事な白髪で、長身、やせがたで、六十歳くらい？」
「ええ、そうですよ。よく、ご存知ですね」
「若いタレントの名前は、思い出せませんか？」
「聞いてみましょう」
と、オーナーは、いい、従業員を呼んで、聞いていたが、
「わかりました。木暮明だそうで、若い女性に、人気があるタレントだと、いっています」
と、亀井に、いった。
「名前は、知っていますよ」
と、若い西本刑事が、横から、いった。
「それでは、この木暮明に会って、小坂井めぐみのことを、聞くことにしようじゃないか」
と亀井は、部下の刑事たちに、いった。

7

木暮明には、Sテレビ局で、会うことになった。
そこで、最近、若者にうけている連続ドラマの録画撮りをやっていると聞いたからである。
「不思議な魅力を持った男みたいですよ」
と、Sテレビに向うパトカーの中で、西本が、亀井に、いった。

「不思議な魅力って、どんなことなんだ？」
「よくは知りませんが、やたらに、男くさいというタレントではなく、中性的な魅力ということだと思うんですが」
西本も、あまり自信のないいい方をした。
「中性的なねえ」
といったが、亀井の頭の中では、はっきりした映像とはなってくれなかった。
Sテレビに着くと、亀井は、受付で、
「今、第一スタジオにいると思うんだが、木暮明さんに、会いたいんですよ」
と、いった。
「アポイントメントは？」
と、受付の若い女が、きく。
「電話で、彼のマネージャーの方に、話は、してあります。女のマネージャーの人で、名前は、確か、三浦さんといった筈です。その人が、第一スタジオに来てくれと、いわれたんですよ」
「ちょっと、お待ち下さい。連絡してみます」
と、受付の女は、いい、局内電話をかけていたが、亀井を見あげて、
「木暮明さんは、お帰りになったそうですけど」
と、いった。
「帰った？　おかしいな。今もいったように、第一スタジオで、会うと、いったんだ」
亀井は、眉を寄せて、いった。
「でも、帰宅したということですけど」
「三浦というマネージャーの人は、何といってるんです？」
「一緒に、帰ったそうですわ」
「第一スタジオで、連続ドラマの録画撮りをやっていると、聞いたんだが、違うんですか？」
と、西本が、横から、きいた。
「ええ。今日は、その予定ですが、仕事が終ったあ

と、急用が出来たといって、マネージャーと一緒に、帰ったそうです」
「自宅は？」
「それは、申しあげられないことになっていますけど」
「ぜひ、教えて貰いたいんだ」
亀井は、警察手帳を、突きつけた。受付の女は、当惑した表情になり、誰かに、電話で相談していたが、次に、木暮明の所属する沢木プロに電話をかけて、亀井に受話器を渡した。
亀井が、木暮明の住所をきくと、調布市深大寺のマンションだという。亀井は、それを、手帳に、書き写してから、Sテレビを出た。
「何か、嫌な予感がするな」
と、パトカーに戻りながら、亀井は、呟いた。
甲州街道を、飛ばした。嫌な予感を、吹き飛ばしたかったからである。
深大寺近くに、最近、建ったマンションだった。豪華マンションとでもいうのだろう。入口には、大理石を敷き詰めた、ぜいたくな造りである。
管理人のチェックがあって、簡単に、中に入ることは出来ない。
亀井が、七〇二号室の木暮明に会いたいと告げると、ユニフォーム姿の管理人は、ちらりと、背後のパネルに眼をやって、
「木暮さんは、まだ、お帰りになっていませんね」
と、いう。
「しかし、Sテレビでは帰宅したと、いってるんだがね」
「いいえ。帰宅されれば、このパネルに、明りがつきます。ついていませんから、まだ、お帰りになっていませんね」
管理人は、頑固にいった。
「しかし、確認して欲しいんだがね」

と、亀井は、いった。警察手帳がここでも、威力を見せて、管理人は、一緒に、七階まであがり、部屋を開けてくれた。

確かに、2LDKの部屋には、誰もいなかった。

亀井は、次に、沢木プロに電話をかけた。

この電話には、社長の沢木自身が出てくれて、

「こちらでも、探しているんですよ。大事な仕事に、穴をあけそうなので、困っています。マネージャーまで、行方不明ですのでね」

「よく、失踪するんですか？」

と、亀井はきいた。

「まあ、わがままなタレントですからね。しかし、行先ぐらいは、ちゃんと、いっておいてくれないと、本当に困りますよ」

と、沢木は、いった。

「三浦というマネージャーにも、連絡がとれませんか？」

「ええ。彼女のマンションにも、連絡してみたんですが、帰っていないんです」

「女のマネージャーだそうですね？」

「ええ。女優をしていたことのある女の子で、仕事熱心なんですよ。木暮も、気に入っているんです」

「車で、移動しているとすると、自動車電話に、連絡するということは？」

「それも、やってみましたが、応答なしです。木暮のベンツで動いていましてね。多分、電話が鳴っても、出ないんでしょう。彼は、気まぐれなところがありますから」

と、沢木は、いった。そのいい方は、時々、木暮の気まぐれに、困らされているのだという感じだった。

亀井は、もし、木暮の居所がわかったら、すぐ教えてくれと、いって、電話を、切った。

本来、亀井が会いたいのは、小坂井めぐみのパト

ロンと思われる白髪の男の方なのである。
この男の身元がわかれば、小坂井めぐみが、なぜ、今度の罠に関ってきたかも、わかるのではないか。
亀井は、この中年男のモンタージュを、作った。
それを、黒板に、ピンで止め、横に、「センドウ」と、書いた。
（この男が、十津川警部を、罠にはめたのだろうか？）
もし、そうだとすれば、彼は、十津川を恨んでいたことになる。何の感情もなしに、十津川を、殺人犯人に仕立てあげる筈はないからである。
十津川が、私的な面で、恨まれたとすれば、それは、亀井には、わからない。
だが、仕事の面で、憎まれているのなら、ひょっとして、亀井も、このセンドウという男に、会っているかも知れないのだ。
亀井は、ずっと、十津川と、行動を共にしてきている。殆どの事件を、十津川の指示のもとに、追いかけてきたのだ。だから、十津川を恨む犯人なり、その家族なら、亀井も、知っている可能性があるのだ。
亀井は、そのつもりで、じっと、モンタージュを見つめた。
（この男に、何処かで、出会っているだろうか？）
だが、思い当ることがない。記憶にも、出て来ない顔だった。
念のために、白髪を、黒くしてみた。ずいぶん、印象が、違うが、それでも、記憶の中にはない顔である。
うすいサングラスの奥の眼がわからない。細い眼なのか、大きな眼なのか。モンタージュ作りに、協力してくれた人たちも、わからないと、いっていた。

亀井は、男のサングラスを外し、細い眼を入れてみたり、大きな眼を入れてみたりしたのだが、そのどちらでも、これは見た顔というものには、ならなかった。

（やはり、前に会ったことのない男なのだろうか？）

と、亀井が、思った時、電話が鳴った。

腕を伸して、受話器をつかむ。男の声が、「沢木です。沢木プロの」と、いった。

「大変なことになりました！」

と、沢木が、声をふるわせた。

「木暮さんが、どうかしたんですか？」

と、亀井が、きいたのは、他に、沢木プロの社長が、自分にかけてくる筈がないと思ったからである。

「今、八王子の警察から、連絡がありまして、木暮が、車の中で、死んでいるというんです」

沢木が、かすれた声を出した。

「死んでる？　事故死か何かですか？」

「それが、よくわからないんですよ。マネージャーの三浦君も、同じ車の中で死んでいるということで、心中じゃないかと、向うの警察は、いっているんです。私は、これから、八王子に、行って来ます」

「私も行きますよ」

と、亀井は、いった。

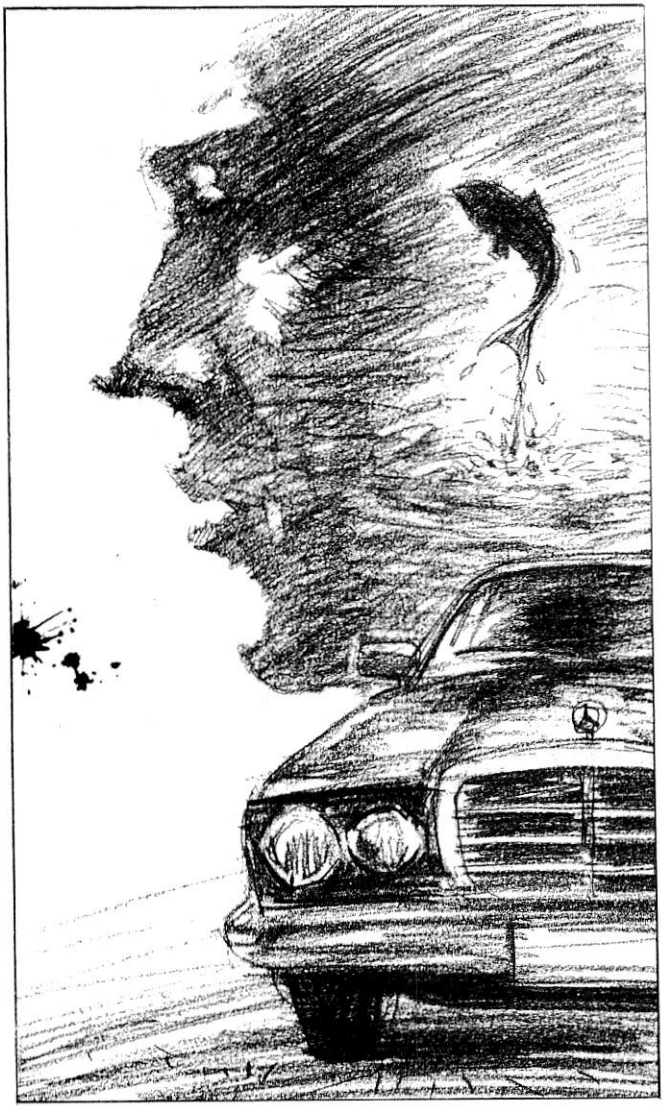
8

亀井は、西本刑事を連れて、八王子署に向った。

八王子署には、亀井たちの方が、先に着いた。

若い白木という刑事が、亀井の質問に対して、事情を説明した。

「市内を流れる浅川の河原に、白いベンツがとまっ



ていまして、中で、若い男女が死んでおりました。排ガス心中だと思います。排ガスを引き込んでいましたし、ドアに、目張りもしてあったからです」

「遺書は、あったのかね？」

「いや、遺書らしきものは、見つかっていません」

「遺体は？」

「収容して来ています。プロダクションの社長が、確認に来るというので、そのあと、遺体は解剖に廻すことになっています」

と、白木が、いった。

沢木が、車を飛ばして、到着したので、亀井は、彼と一緒に、二つの遺体と対面した。

若い男と女の遺体である。

排ガスによる死亡特有の顔色だった。うす桃色に見える。

「間違いありません。木暮明と、マネージャーの三浦アキ君です」

と、沢木は、がっくりした表情で、白木刑事に、いった。

木暮は、線の細い感じの美男子だった。似合いのカップルのように見えるのは、マネージャーの三浦アキが、元女優だったせいかも知れない。

一見したところ、二人には、外傷は、見当らなかった。頭や顔に殴られた形跡はない。

二人が死んでいたベンツは、八王子署の裏に、置かれていた。近づくと、まだ、排気ガスの臭いが、鼻をついた。

なるほど、ドアの隙き間には、ガムテープが、貼りつけてある。そして運転席に、差し込まれたゴム管が、見えた。

「発見したのは、近くのマンションに住む学生で、恋人と、散歩に来て、止まっているのに、エンジンのかかっているベンツを見て、おかしいと思い、のぞき込んだら、運転席に倒れている男女を見つけ、

すぐ、一一〇番してくれたわけです」
と、白木刑事が、いった。
二人の遺体が、解剖のために、運ばれて行ったあと、亀井は、沢木に、彼等のことについて、いろいろと、聞いてみることにした。
「木暮明は、本当は、小坂井めぐみという女と、つき合っていたんじゃありませんか？」
と、亀井が、きくと、沢木は、
「名前は、知りませんが、つき合っていた人間がいたことは、うすうす気付いていましたね。ただ、それが、誰なのかは、知りませんでしたよ。彼だって、もう、立派な大人ですからね。恋愛は、自由ですから」
「マネージャーの三浦アキさんとの関係は、どうだったんですか？」
「信じられない。それが、正直な感じですよ。第一、三浦君は、結婚してるんです。旦那は、普通のサラリーマンです。もちろん、だから木暮明と、関係がなかったとはいえませんが」
と、沢木は、いう。
「二人が誰かに殺されたということは、考えられませんか？」
と、亀井は、きいた。
「殺された？　誰が、何のために、二人を殺すんですか？」
沢木が、びっくりした顔で、きき返した。
「木暮明の口封じです。三浦マネージャーの方は、関係なかった。たまたま、一緒にいたので、心中に見せかけて殺した。そういうことも考えられると、思うのですがね」
「木暮を、憎んでいた人間が、そんな恐しいことをしたというわけですか？」
「いや、彼を憎んでいたからではないと、思うのです。今、いった、小坂井めぐみという女のことを、

木暮明に喋られたくないので、殺したんじゃないかと、思っているんです」
「その小坂井めぐみというのは、いったい、何者なんですか？」
「それが、わからないので、われわれは、調べているんですよ。警察に知られては困る人間がいて、彼女のことを知っている人間を、殺しているのではないかと、思っているんです」
「木暮は、その女と、親しかったわけですか？」
「輸入家具を、二人で、買いに行っています」
「それだけですか？」
「今、わかっているのは、それだけです。木暮明が殺されたとすると、彼女のことを、いろいろと、知っていた可能性がありますね」
と、亀井は、いった。
「どんな顔をした女ですか？」
と、沢木がきく。
亀井は、小坂井めぐみの似顔絵を、沢木に見せた。
「魅力的な顔の女性ですね」
と、沢木が、いった。
「そうです。なかなかの美人ですよ」
と、亀井は、いってから、
「木暮明のマンションを調べさせてくれませんか」
「しかし、プライバシーが――」
「心中ではなく、殺人の疑いが出て来たら、調べさせてください」
と、亀井は、いい直した。

第四章　釈放への道

1

亀井は、警視庁に戻ると、本多捜査一課長に、会った。
「何とか、福島県警に、圧力をかけて頂けませんか？　県警と、福島地裁にです」
と、亀井は、本多に、いった。
「十津川警部の釈放を、要求することかね？」
「そうです」
「要請は、ずっと、しているよ。しかし、向うは、容疑が濃い以上、逮捕しないわけにはいかないと、いってるんだ」
「あれは、罠ですよ」
「そうかも知れないが、それを、証明することは、出来ないんだろう？」
と、本多が、きいた。
「今は、出来ません。しかし、東山温泉で、十津川警部が殺したといわれる小坂井めぐみという女を調べ始めたら、二人の犠牲者が出たんです。木葬明というタレントと、そのマネージャーです。無理心中と思われていますが、私は、殺人だと思っています」
「つまり、小坂井めぐみのことを、調べられては困るという人間がいて、そいつが、彼女の関係者の口封じをしたと、君は、考えているわけだね？」
と、本多は、きいた。
「そうです。私がいいたいのは、この事件は、まだ、終っていないということなんです。いや、むし

ろ、始まったばかりだと思います。また、これは、そのまま、十津川警部が、無実の証拠でもあると、私は、思うのです。福島県警のいうように、十津川警部が、犯人なら、彼を拘束しているわけですから、事件は、もう終っているわけですよ」

亀井は、腹立たしげに、いった。

「君が、今、いった男女の死だが、殺人だという証拠は、まだ、ないのだろう？」

「ありません」

「それでは、向うに、強く要求は、出来ないよ。新潟県警にもだ」

本多は、眉をひそめて、いった。

「それでは、もし、殺人だとわかったら、強力に、要求して頂けますか？」

と、亀井はきいた。

「もちろん、そうなれば、部長とかけ合って、要求して貰うよ」

と、本多は、約束した。

亀井が、部屋に戻ると、聞き込みを指示しておいた西本刑事から、電話が、入っていた。

「何か、わかったのか？」

と、亀井は、大声で、きいた。

「今、木暮明と、三浦アキの知人、友人から、日下刑事たちと一緒に、二人の話を聞いています。その結果、いくつかわかりました。まず第一に、三浦アキですが、夫との間はうまくいっていて、木暮明と、心中するなどということは、考えられないと、いっています」

「他には？」

「木暮明の友人たちも、同じことをいっています。彼は、今、大事なところにいるので、愛とか恋なんか考えられないと、いっていたそうで、マネージャーと心中なんか、信じられないと、いっています。芸能記者仲間でも、木暮明と、三浦アキでは、どう

考えても、結びつかないと、いっていますね」
「全部、状況証拠だな。弱いね」
と、亀井は、いった。
亀井も、警察の人間だからわかるのだが、状況証拠だけでは、動かないものなのだ。また、そうしたことで、方針が、ぐるぐる変っては、困るということもある。
木暮明と、三浦アキの解剖結果も、報告されてきた。
死因は、もちろん、一酸化炭素による中毒死である。
また、二人とも、睡眠薬を、多量に飲んでいたことも、わかった。
これは、亀井にとって、いい知らせでもあり、また、よくない知らせでもあった。この無理心中が殺人ならば、睡眠薬は、その犯人が飲ませたものといえる。そう考えれば、睡眠薬の件は、プラスなのだが、心中を覚悟した人間が、恐怖を忘れるために、睡眠薬を飲むことは、よくあることである。特に、無理心中の場合は多い。そう考えれば、逆にマイナスなのだ。

2

「今、八王子署に木暮明の妹が、来ています」
と、日下刑事から、電話が入った。
「その妹を、説得して、木暮明の部屋を、調べる許可を貰ってくれ」
と、亀井は、いった。
「何とか、やってみます」
「何とかじゃない。必ず、説得するんだ。どんな感じの妹だ？」
と、亀井は、きいた。
「大学生で、兄が、心中したなんて、信じられない

と、いっています」
と、日下は、いう。
「それなら、説得できるだろう。彼女の疑問を明らかにするためには、彼の部屋を調べることが、必要だと、いうんだ。私は、深大寺のマンションの方へ、行っているよ」
と、亀井は、いった。
彼は、パトカーで、深大寺に向った。
二時間近くたって、日下刑事が、沢木プロの社長と、木暮明の妹の明子を連れて、やって来た。
日下は、亀井の傍へ来ると、
「例の件は、賛成して貰いました」
と、いった。
明子は、亀井に向って、
「兄が、マネージャーの方と心中したなんて、私、信じられません」
と、強い声で、いった。
「われわれも、そう思っています。だからこそ、お兄さんの部屋を、調べたいのです」
と、亀井は、いった。
「そうすれば、何かわかるんでしょうか？」
明子は、大きな眼で、亀井を見た。
「わかることを、期待しています」
と、亀井は、自分の希望を、いった。
亀井と日下は、明子や、沢木と一緒に、木暮の部屋に入った。
前に、のぞいた時も、亀井は、感じたのだが、どこか、普通の若い男の部屋と違った印象を受けた。
あまり、男臭い匂いが、感じられないのだ。
いや、木暮明というタレント自体、どこか、中性的な匂いがあるし、また、それで、売り出してもいるのである。
部屋の壁には、木暮自身のカラー写真が、何枚も、かかっていた。

どの写真も男を強調したものではなかった。上半身裸の写真もあるが、それにしても、美少年の美しさという感じだった。

「お兄さんは、ナルシストだったようですね？」

と、亀井は、明子に、きいた。

「ええ。昔から、そうでした」

と、明子は、小声で、いう。

「沢木さん、ちょっと」

と、亀井は、沢木を、廊下に、引っ張って行った。

「何ですか？」

と、沢木が、眼をとがらせた。

「正直に、いって欲しいんですよ。木暮明さんは、ナルシストで、女性には、興味がなかったんじゃありませんか？」

と、亀井が、きいた。

すぐには、沢木は、返事をしなかった。

「木暮さんは、もう亡くなってしまったんだから、正直に話して下さっても、いいでしょう？」

と、亀井は、いった。

「そうですねえ」

「私は、木暮さんは、心中に見せかけて、殺されたと思っているんです。それを、はっきりさせるためにも、真実が、知りたいんですよ」

「わかりました」

と、沢木は、急に、きっぱりとしたいい方になって、

「人気に障るというので、ホモ傾向のあることは、隠すように、いって来たんです。また、わざと、美人女優とのロマンスを、でっちあげたこともあります。しかし、木暮の場合は、治りませんでしたね」

「それを、なぜ、八王子署で、話してくれなかったんですか？」

「そんなことを口にすれば、死者に鞭打つことにな

ると思ったからですよ。それは、木暮明を愛してくれたファンにも、申しわけないと、思いましてね」

と、沢木は、いった。

「まあ、いいでしょう。しかし、木暮さんが、女性に、興味がなかったとすれば、三浦アキさんと心中するというのは、不自然ですね」

「そうです。三浦君には、ちゃんとしたご主人がいるわけですしね」

「とすると、これは、間違いなく、殺人だが、心当りは、ありませんか？」

と、亀井は、きいた。

「ありません。とにかく、あまりにも、突然のことで、びっくりしているんですよ」

と、沢木は、いう。

「六十歳ぐらいで、センドウという男については、何か知りませんか？」

と、亀井は、きいた。

「それは、どういう人ですか？」

「最初は、ある女性のパトロンと思っていたんですが、或いは、木暮明のパトロンだったのかも知れません」

「木暮のパトロンですか？」

「そうです。彼には、沢山、ファンがいたわけでしょう？」

「そうです」

「いわゆる大物といわれるファンもいたと思うのですよ。後援会のメンバーの中に、政財界の大物がいたりするんじゃありませんか？」

と、亀井は、きいた。

「それほど木暮は、大物のタレントじゃありません。大物といわれる人たちは、自分にプラスになると思わなければ、芸能人の後援者にはなりませんからね。木暮にも、ファンクラブはありましたが、まだ、小さな組織でした」

「すると、隠れたファンというか、隠れたパトロンということになると、思うんですが、やはり、センドウという六十歳前後の男に、心当りはありませんか？」

と、亀井は、もう一度、きいた。

「今、考えてるんですが、記憶がありませんね」

「しかし、木暮明のパトロンに、そういう男がいなかったとは、いい切れないでしょう？」

「もちろん、そうです。私は、木暮のプライバシーの全てを、把握しているわけじゃありませんからね」

「木暮明が、ホモセクシャルだということは、芸能界では、知られていることだったんですから」

「知っている人は、知っていたということです。例えば、テレビ局のプロデューサーの中には、ホモの人もいますから。木暮を、その気で、ドラマに登用したりしますからね」

と、沢木は、苦笑しながら、いった。

「そのプロデューサーの名前を、教えて貰えませんか？」

「それは、まずいですよ。私が、そんなことを話したとわかったら、マークされて、うちのタレントが、使って貰えなくなりますからね」

「しかし、そのプロデューサーも、知っている人間は、知っているということなんでしょう？」

「ええ。芸能界では、有名ですから」

「それなら、いいでしょう？　あなたから聞いたとは絶対に、いいませんよ」

と、亀井は、いった。

それでも、沢木は、まだ、ためらっていたが、

「K局の池田プロデューサーですよ」

と、教えてくれた。

亀井は、木暮の部屋の捜査は、日下刑事に委せておいて、すぐ、K局に向った。

そこでも、亀井は、警察手帳の力を利用して、強引に、池田プロデューサーに会った。
池田は、大男で、丁度、喫茶ルームで、コーヒーを飲んでいた。
「六十歳ぐらいで、センドウという男を、知りませんか？」
と、亀井は、単刀直入に、きいた。
池田は、コーヒーカップを持ったまま、じろりと、亀井を睨んで、
「いきなり、何のことですか？」
「時間がないのですよ。あなたなら、知っていると思って、やって来たんですよ。死んだ木暮明のパトロンではないかと、思っているんですが、ご存知ありませんか？」
「なぜ、僕が、知っていると、思うんですか？」
「あなたが、木暮明を、よく知っておられると、思うからですよ」
とだけ、亀井は、いった。
「それなら、僕より、彼がいたプロダクションの社長の方が、よく知っている筈ですよ」
「普通のことなら、そうかも知れませんが、木暮明と、そのパトロンの間には、ホモの関係があったのではないかと、思われるのです」
と、亀井は、いった。
「だから、僕に聞くということですか？」
「そうです」
「どういう意味ですか？　それは」
池田の顔が、ゆがんでいた。
「それは、何もいいません。私としては、とにかく、このセンドウという男を見つけたいのですよ。殺人事件に、関係しているかも知れませんのでね」
と、亀井は、いった。
池田は、黙って、考え込んでしまった。
（何か知っている）

と、亀井は思い、じっと、池田が、話してくれるのを待った。

七、八分もたったろうか。池田は、自分が作った沈黙に、耐え切れなくなったように、

「前に、うちのドラマに、木暮明が、出ることになっていて、駄目になったことがありましてね。スポンサーは、五社相乗りだったんですが、その一つに、城南ポンプという会社があったんですよ。そこの社長の名前が確か、仙堂さんだった筈です」

と、いった。

3

城南ポンプというと、なにか、町の水道屋みたいな感じだが、実際には水力発電、海水の淡水化、水資源の活用など、広範囲にわたる事業を行う大会社だった。

城南ポンプという名前は、戦後すぐ、町工場から出発した時のもので、創始者の仙堂徳一郎が亡くなったあとも、息子の仙堂肇が、初心を忘れぬためといって、会社の名前を変えずにいるのである。

見方を変えれば、この会社が、ワンマン社長を頂く同族会社ということでもあった。

城南ポンプが、株式公開していないことにも、それは、表れていた。九十パーセントの株を、社長の仙堂肇と一族が、持っているのである。

肇は、現在、五十九歳。弟の功は、三歳年下で、厚生大臣を務めたことがある。この時、大臣の地位を利用して、城南ポンプに利益を与えたということで、週刊誌に、叩かれたことがあった。

功は、すでに妻子があるが、兄で、社長の肇は、独身である。

亀井が、調べたところ、仙堂肇には、さまざまな噂や、批判があることが、わかった。

その多くが、この会社が、仙堂のワンマン会社であることから来ているようだった。社長の一存で、何十億という金が動かせるからである。

保守党のある派閥に、二十億、三十億の政治献金をして、そのおかげで、弟の功が、厚生大臣になったともいわれている。

第二は、仙堂のタレント好きである。木暮明も、その一人だったのだが、仙堂は、自分が気に入ったタレントのパトロンになり、びっくりするような援助をし、そのタレントを連れて、銀座を飲み歩くことが多かったらしい。

そのタレントの多くが、若い美男子だったことから、ホモの噂が、流れているのだろう。

第三は、ライバル会社を叩き潰すのに、暴力団を使ったという噂があるせいか、自分を守るために、元警察関係者を、高給で、採用していた。その一人、浦辺は、元警視庁の刑事部長だった男で、亀井も、名前を、知っていた。現在、浦辺は、城南ポンプの管理部長の肩書きだが、どうやら、問題が起きた時、その始末に当るのが、彼の仕事のようだった。亀井が、聞いたところでは、警察関係者が、五人、それに、元検事二人が、仙堂の周辺にいるという。

また、弟を通じて、政界にも、知人が多いといわれている。

「それに、優秀な顧問弁護士がついていて、すぐ、告訴をするそうだよ」

と、本多一課長が、教えてくれた。

「下手な攻撃をすると、逆襲してくるということですか？」

と、亀井は、きいた。

「まあ、そうだね。だから、慎重に、対応して欲しい」

と、本多は、いった。

「彼に、会うのは、かまいませんか？」
「会って、どうするのかね？」
「小坂井めぐみのことを、聞いてみたいと、思っています」
と、亀井は、いった。
「聞くのはいいが、決めつけるようないい方は、しなさんなよ」
と、本多は、釘を刺した。
亀井は、西本刑事を連れて、渋谷の松濤にある仙堂肇の邸を訪ねた。
近くに、渋谷の繁華街があるとは思えないような静かな構えで、通された奥の座敷から、庭の池に群れる鯉を見ることが、出来た。
仙堂は、和服姿で現われた。大柄な男である。見事な白髪だった。
（聞いているセンドウの風貌そのままだな）
と、亀井は、思った。
「私は、警察が好きでね」
と、仙堂が、いきなり、切り出した。
亀井は、あっけにとられた感じで、
「ありがとうございます」
「今の日本で、信頼できるのは、自衛隊と、警察だよ。他のものは、信用できん」
と、仙堂は、大きな声で、いった。
「しかし、社員の方は、信頼されておられるんでしょう？」
と、西本が、きいた。
仙堂は、じろりと、西本を、見て、
「うちには、千人近い社員がいるが、信用できる奴もいれば、出来ん奴もいるよ。時には、私を裏切る奴だっている」
と、ニコリともしないで、いった。
「今日は、小坂井めぐみさんのことで、伺ったんです」

と、亀井は、話題を、肝心なことに、持っていった。

「それは、何者かね？」

「先日、福島の東山温泉で、殺された女性です」

「それなら、私より、向うの警察に聞いたらいいんじゃないのかね？」

「しかし、彼女が、あなたと思われる男性と、輸入家具を買いに、来ているのを見たという人がいるのです」

「それが、私だと？」

「ええ。襟に、バッジがついているということでした。失礼ですが、城南ポンプにも、会社のバッジがあるわけでしょう？」

「もちろん、あるがね。君のいう男は、私じゃないね。私は、その女を知らんし、洋家具には、興味がないんだよ」

と、仙堂は、いった。

「それでは、木暮明というタレントは、ご存知ですか？」

と、亀井は、きいた。これも、知らないと否定するかと思ったが、意外にも、あっさりと、

「知っている。いい味のあるタレントだよ」

と、いった。

「亡くなったことは、ご存知ですか？」

「ああ、テレビのニュースで聞いて、驚いているんだ。将来性のあるタレントだったからね。私も、ささやかだが、援助をしていたんだがねえ」

と、仙堂は、いう。

「マネージャーの女性と、心中したことになっていますが、あれは、どう思われますか？」

「とにかく、意外だったな。それ以上のことは、いえんね」

「あれは、本当は、心中ではなく、それに見せかけて、殺されたのではないかと、思っているんです」

と、亀井は、いった。
「ほう。いかにも、警察らしい見方だねえ」
と、仙堂は、笑った。
「木暮明のことを、あれこれ、調べられるのを嫌がった人間が、先手を打って、殺したのではないかと、思うのですが、どうでしょうか？」
と、亀井は、きいた。
仙堂は、眉をひそめて、
「警察が、私に、意見を求めるのかね？」
「仙堂さんが、木暮明のことを、よくご存知だからです」
と、亀井が、いうと、仙堂は、突然、笑い出して、
「私は、確かに、木暮明を知っているがね。それは、私が、何人ものタレントを、応援していて、その中の一人だという意味でだよ。当然、私なんかより、タレントの仲間や、彼の所属しているプロダクションの社長なんかの方が、ずっと、よく知っている筈だ。だから、私より、そうした人たちに、聞いたらいいんじゃないのかね？」
と、いった。
確かに、その通りだから、亀井は、返す言葉を、失ってしまった。
「仙堂さんは、十津川警部を、ご存知ですか？」
と、亀井は、質問を変えた。
「トツガワ？　知らないが、なぜかね？」
と、仙堂が、きき返した。
「仙堂さんが、警察にくわしいといわれたので、十津川警部のことも、ご存知かと、思いまして」
「いや、知らないね。今の三上刑事部長は、知っているが、警部ぐらいの人間は、失礼だが、知らんのだ」
と、仙堂はいい、続けて、
「その警部が、どうかしたのかね？　金に困ってい

るとでもいうのなら、喜んで、お貸しするよ。今もいったが、警察の人間は、好きだからね」
「いえ。そういう話ではありません」
「気になるが、どんな話なのかね？」
「いえ、われわれ、警察の身内の話ですから」
と、亀井は、いった。

4

「福島の東山温泉へ、行かれたことがありますか？」
と、西本が、きいた。
「温泉は、嫌いじゃないが、東山温泉へは、行ったことがないね」
と、仙堂は、いう。
「喜多方は、いかがですか？」
「ちょっと、待ちたまえ。何のために、そんな詰らん質問をするのかね？」
仙堂は、顔をしかめた。
「ある事件を調べているのですが、調べていますと、仙堂さんと思われる人物が、浮んで来ましたので」
と、亀井は、いった。
仙堂の表情が、険しくなった。
「警察が調べているといえば、凶悪な事件だろう？それに、私が、関係しているとでもいうのかね？もし、そう思っているのなら、関係しているという証拠を見せたまえ。想像で、決めつけるのが、今の警察のやり方なのかね？」
「そんなことは、ありません。ただ、捜査に、協力して頂きたいと思うだけです」
亀井は、あわてて、いった。
それでも、仙堂の険しい表情は、変らず、立ち上ると、

「不愉快だ。帰りたまえ」
と、いった。
「失礼しよう」
と、亀井も、かたい表情で、西本にいい、立ち上った。
外に出ると、若い西本は、腹立たしげに、
「不愉快な男ですね。自分を、どこかの殿様とでも、思っているんでしょうか？」
と、いった。
「向うも、私たちを、不愉快だと、思っているさ。いきなりやって来て、死んだ木暮明のことを聞いたりしたからね」
亀井は、笑って見せた。
「小坂井めぐみが殺された時の彼のアリバイを聞いてやったら、面白かったんじゃありませんか？」
「それは、駄目だよ。あの男には、アリバイがあるに、決っている。彼女を殺したのは、十津川警部によく似た男なんだ。あの仙堂じゃない」
「仙堂が、その男にやらせたんですよ」
と、西本が、いう。
亀井は、難しい顔で、
「大事なことを、君は、忘れてるよ。仙堂の動機だ」
「動機は、彼が、小坂井めぐみと関係があって、それに嫌気がさして、殺したくなったんでしょう」
「仙堂は、ホモだといわれてるんだ。それに、小坂井めぐみを殺す理由があったとしても、なぜ、十津川警部を罠にかけたんだ？　いろいろと、網を張りめぐらせてだ」
と、亀井は、いった。
「きっと、十津川警部に、ひどい目にあったことがあるんじゃありませんか？　例えば、何かの事件で、容疑者扱いされたとか」
西本が、いった。が、亀井は、首を横に振った。

「そんなことがあったかも知れないと思って、ずっと、考えていたんだ。私は、いつも、十津川警部と、仕事を一緒にして来たから、仙堂が怒るようなことをしていれば、私も、覚えている筈だ」
「記憶がありませんか？」
「ないんだ。初めて、今日、会ったよ」
「すると、個人的な怨念でしょうか？」
「個人的？」
「そうです。例えば、あの男が、酔っ払って、ケンカをしている。そこへ通りかかった十津川警部が、注意した。それを、バカにされたと思って、復讐に出たといったことですが」
と、西本は、いった。
「なるほどね」
「駄目ですか？」
「いや、仙堂が、十津川警部を罠にかけたんだとすれば、君のいうようなことかも知れない。ああいう男は、他人には、ちょっと注意されただけでも、怒り狂うものだからね」
と、亀井は、いった。
二人で、警視庁に戻ると、亀井は、すぐ、岩室温泉にいる十津川に、電話をかけた。
亀井は、小坂井めぐみのことを調べている途中で、木暮明が、心中に見せかけて、殺されたこと、その背後に、仙堂肇という男がいるような気がすることなどを、話した。
「仙堂は、城南ポンプの社長で、弟は、厚生大臣になったことがあります。五十九歳で、白髪の大男です。傲慢を、絵に描いたような男で、タレントのパトロンになりたがるところがあります。小坂井めぐみとも、関係があったようなんですが、本人は、否定しています。問題は、この男が、黒幕だとしますと、なぜ、警部のことを、恨んでいるのかということなんです。仙堂肇とか、城南ポンプという社名

に、記憶はありませんか？」
「センドウ・ハジメか」
「そうです。西本刑事は、仙堂が、酔っ払って、ケンカをしているのを、警部に、注意されて、それを、恨んでいたんじゃないかと、いっていますが」
「ケンカの仲裁の記憶はないねえ」
と、十津川は、いった。
「全く、仙堂という名前に、記憶はありませんか？」
「今、考えているんだが、全く、思い出せないな」
と、十津川は、いう。
「そうですか――」
「その男に、家族はいないのか？」
「独身で、両親は、すでに死亡しています。弟は、今もいったように、政治家です」
「知らないな。家族と、私が、何かあったということでもないんだな」
「もう少し、調べてみます。必ず、何とかしますから、期待していて下さい」
と、亀井は、いった。

5

亀井も、仙堂肇は、今回、初めて聞いた名前だった。弟の仙堂功の名前もである。城南ポンプという会社名も、今日、初めて、知ったのである。
それに、仙堂功という厚生大臣がいたことも、亀井は、知らなかった。多分、大した仕事もしなかった大臣なのだろう。
亀井は、ほとんど、十津川と行動を共にしていたから、十津川が、仙堂兄弟や、城南ポンプを知らなくても、不思議はないのである。
「時間がないんだよ」
と、亀井は、西本刑事たちを集めて、もう一度、

発破をかけた。
「十津川警部が、福島地検や、新潟地検で起訴されてしまったら、釈放に持っていくのは、難しい。それまでに、何とか、警部を、自由にしたい」
「問題は、仙堂が、警部を恨む理由がわかればいいんですね？」
と、西本が、きく。
「そうだ。今のところ、仙堂肇にも、弟の功にも、警部との接点がない。あれだけ、手の込んだ罠を仕掛けたんだから、よほど、警部を恨んでいると思うんだがね」
「仙堂は、全く知らないということは、考えられませんか？」
日下刑事が、いった。
亀井は、眼を大きくして、日下を見た。
「どういうことだね？」
「仙堂としては、目障りな小坂井めぐみを消してしまえばよかった。それを、誰かに、頼んだとします。頼まれた人間が、十津川警部を恨んでいて、彼女を殺し、警部をその犯人に仕立てあげることを計画したんじゃないでしょうか？　それなら、仙堂と、警部がつながらなくても、不思議はありません」
「しかし、殺人を頼むとすれば、仙堂が、よほど信頼している人間ということになるよ。その人間が、たまたま、警部を恨んでいたというのは、偶然すぎるんじゃないかね？」
「私が考えているのは、警視庁を辞めて、城南ポンプの部長をやっている浦辺さんのことです。彼と、十津川警部との間に、現職の頃、何か、確執があったんじゃないかと、思ったんですが」
と、日下は、いった。
亀井は、首を横に振って、
「それはないね。改めて、調べてみたが、浦辺さん

が、警視庁を辞めたあと、十津川警部は、捜査一課に来ているんだ。入れ違いなんだよ。警部は、もちろん、浦辺さんの名前は、知っているだろうが、接触は、なかった筈だ」

「すると、やはり、十津川警部に、罠を仕掛けたのは、仙堂本人でしょうか？」

と、清水刑事が、きく。

「そう考えざるを得ないんだよ」

「しかし、仙堂自身は、十津川警部と接点がないとしたら、彼が愛していた人間が、警部に痛い目にあったということしか考えられませんね。仙堂は、その仇を討とうとした――」

「確かに、そうなんだが――」

と、亀井は、呟いてから、

「よし。調べ直してみよう」

「何をですか？」

「仙堂には、妻子はいない。となれば、可愛がっていたタレントということになる。その一人が、警部に痛い目にあったということになってくる」

「しかし、最近、タレントが関係した事件を、うちで、担当したことは、なかったんじゃありませんか？」

と、西本が、異議を唱えた。

「そうだな。タレント好きは有名らしいが、仙堂は、美しい男が好きなんだ。とすると、タレントとは限らないかも知れない」

亀井が、いうと、日下が、

「それなら、ひとりいますよ。去年の十二月、野球選手が、交通事故で、女をはねて、死なせてしまった事件があったでしょう？　二十三歳の若い選手です」

「ああ、あれか」

亀井の声が、大きくなった。

その選手の名前は、早見明。二年前、O大学か

ら、ドラフトの二位指名で、東京レンジャースに入団した。長距離打者として期待されたのだが、一年目は、鳴かず飛ばずで、二軍暮しだった。

オフの十二月十日の深夜、愛車のフェラーリで走行中、若い女をはねて、死亡させた。

彼女が突然、飛び出して来たので、避け切れなかったというのが、早見の証言だった。

最初は、その証言が信用されて、交通事故として扱われた。が、疑問を持った十津川が、早見と、被害者の女性の関係を調べあげ、二人の間に、男と女の交際があったことを突き止めた。

交通事故ではなく、殺人として、捜査することになったのである。

被害者の菊地のり子は、早見の子供を堕したことがあり、結婚してくれなければ、それを、週刊誌にのせて貰うと、脅していたこともわかった。

早見には、彼女と結婚する気はなかったが、彼女とのことが公けになれば、選手生命が、絶たれてしまう恐れがある。

だから、交通事故に見せかけて、殺した。それが、捜査の結論だった。早見は、犯行を否定し続けたが、起訴され、一ヵ月前の四月に、有罪の判決が、下された。

早見は、最近の若い野球選手らしく、すらりとした長身で、ハンサムである。タレントとしても、十分に、通用するといわれ、CMにも出ていた。

判決は、八年の実刑だった。

「あの男か」

と、亀井は、呟いた。

「そうです。早見と、仙堂が、関係があったとなれば、きっと、十津川警部を、恨んでいますよ」

と、日下が、いう。

「それを、調べてくれ」

と、亀井は、いった。

6

刑事たちは、当時の新聞に眼を通し、球団に行き、菊地のり子の友人、知人に、会った。

亀井は、新聞を読み返してみて、マスコミの態度が、変化していくのが、面白かった。

最初は、早見の証言を信じ、「不運な交通事故」という見出しになっている。亡くなった菊地のり子が、この時、酒を飲んで、泥酔して、歩いていたことがわかると、もっと、早見に、同情的な記事になった。

それが、突然、変るのだ。十津川が、二人の間に関係があり、それも、彼女が、早見の子を、堕したことがあることを調べ出したあたりから、早見は、自分勝手な人殺しになってしまうのである。

「問題の車ですが、早見は、自分で、買ったんじゃありませんね」

と、西本が、報告した。

「赤いフェラーリがかね？」

「そうです。三千万近くする車ですが、早見は、親しい友人に、スポンサーに買って貰ったと、自慢していたそうです」

「そのスポンサーが、仙堂だといいんだがね」

と、亀井は、いった。

その線が、追及された。その結果、金が出ているのは、城南リースという会社と、わかった。この会社は、仙堂が、会社の金を私的に流用する時に使うダミー会社だった。

他にも、いくつかわかったことがある。

仙堂が、行きつけのクラブに、早見を連れて行ったことが、何度かあったことである。

そのクラブのママの証言によれば、仙堂は、嬉しそうに、早見を紹介したという。

また、早見の公判では、大物の弁護士が二人ついたが、その一人は、現在、仙堂の顧問弁護士になっていることもわかった。

深夜だったが、亀井は、岩室温泉にいる十津川に、電話をかけた。

「早見のことなら、よく覚えているよ」

と、十津川は、電話で、いった。

「仙堂は、早見を可愛がっていました。高価な車を買い与えたり、自慢げに、クラブに、連れて行ったりしていたようです」

「それで、私を恨んでいたということか？」

「警部が、十二月の交通事故に疑問を持たなければ、酔ってはねられた被害者の方が悪いことになって、早見は、簡単に釈放された筈です。それが、警部のおかげで、八年の懲役ですから、恨んでも、おかしくはありません」

と、亀井はいった。

「なるほどね」

「もう一つあります。先日なくなった木暮ですが、顔が、早見に似ています」

「仙堂の好きなタイプということか」

「そう思います。しかし、仙堂が、本当に、可愛がっていたのは、早見だったんじゃないかと思うのです」

と、亀井はいった。

「しかし、仙堂が、直接、私を罠にはめたとは思えないな。東山温泉では、私によく似た男が、小坂井めぐみを、殺している」

と、十津川は、いった。

「仙堂みたいな男は、金で、何でも出来ると思っていますから、金で、傭った男だと、思いますよ。とにかく、今までにわかったことで、三上部長に、そちらの県警や、福島県警に話して貰います」

と、亀井は、いった。

「あまり、無理はするなよ」
「大丈夫です。警部が、そちらにいたんじゃ、今度の事件は、解決できません」
と、亀井は、いった。
電話を切ると、亀井は、すぐに、本多一課長に会った。
「私と、一緒に、部長に頼んで下さい」
と、亀井はいい、今までにわかったことを、話した。
「行こう」
と、本多も、肯いて、立ち上った。
二人は、三上刑事部長に会い、亀井が、説明した。
三上は、肯いて、聞いていたが、聞き終ると、難しい顔になって、
「相手が、悪いな」
と、いった。
「仙堂肇がですか？」
「そうだ。もちろん、仙堂が、真犯人だという、しっかりした証拠があれば、彼が、何者だろうとかまわないが、君たちの話を聞くと、ただの推測でしかないからね。推測で、立ち向かうには、相手が、大き過ぎる」
「別に、仙堂を、今すぐ、逮捕したいといってるんじゃありません」
と、亀井はいった。
本多も、口を合せて、
「十津川警部を、釈放させたいだけです。彼が、いないと、今度の事件の解決は、難しいと思います」
「しかし、その理由が、仙堂犯人説なんだろう？」
「そうです。ただ、今は、十津川警部以外に、容疑者がおり、その人間が、警部を恨んでいて、罠にはめたことが、十分に考えられる。それだけに、警部が動かないと、事件は解決しないということが、向

うの県警に、理解して貰えればいいんです」
と、亀井は、いった。
「それに、両県警にしても、同じ警察ですから、十津川警部が、殺人容疑で、送検されれば、恥になると思いますが」
と、本多も、いった。
それでも、三上が、迷っていると、亀井が、
「一般の人たちにとって、警察は、全部、同じです。十津川警部が、起訴されれば、警察全体が、批判され、県警も、同じことです」
と、いった。
「仙堂が、犯人だということに、自信はあるのかね？」
と、三上は、きいた。
「あります」
「十津川君が、釈放されてから、事件が解決せずに、投げ出すんでは、困るよ。弁明のしようがなくなるからな」
「わかっています。十津川警部と、協力できれば、必ず、事件は、解決できます」
と、亀井は、断言した。
「わかった、電話してみよう」
と、三上は、いってくれた。
刑事部長室を出ると、本多が、心配そうに、
「大丈夫かね？」
と、きいた。
「大丈夫です」
「しかし、部長もいっていたが、相手は、大物だぞ。もし、仙堂の容疑が、証明できないと、十津川君を助けたいための嘘だと思われるし、彼に対する県警の態度が、一層、厳しくなることも考えられるよ」
と、本多は、いう。
「それも、わかっています」

と、亀井が、いうと、
「それなら、いい」
と、肯いた。
三上刑事部長が、福島と、新潟の両県警に、どう話をしてくれたかは、わからなかった。
県警にも、面子というものがあるだろう。亀井が、一番恐れるのは、それだった。こちらが、釈放を迫れば迫るほど、向うの態度が、硬化する心配もあったからである。
こちらの頼みは、同じ警察だということと、向うも、実際には、十津川が、無実かも知れないと、思っているに違いないということだった。
翌朝になって、やっと、三上部長から、電話があった。
「十津川君が、釈放されたよ。私が、強力に主張したのが、よかったらしい」
と、三上は、例によって、自慢をした。
「ありがとうございます」
「しかし、喜んでばかりいては、困るよ。これで、真犯人が、あがらないと、私の面目が、丸潰れになるからね」
「わかっています。十津川警部と協力して、必ず仙堂が、犯人であることを、証明して見せます」
と、亀井は、約束した。

7

新潟を通って、上越新幹線で帰ってくる十津川を、亀井は、上野駅まで、迎えに行った。
午後二時少し前に、十津川は、上野駅のホームに降りた。その顔を見て、亀井は柄にもなく、目頭が、熱くなってしまった。
「警部、お帰りなさい」
と、亀井が、声をかけると、十津川は、苦笑し

て、
「何だか、出所した親分を迎えに来たみたいだねえ」
「とにかく、ほっとしました。警部がいないと、何をしていいか、わからなくなってしまいます」
一緒に、改札口に向って歩きながら、亀井は、そんなことを、いった。
「そんなことはないさ。カメさんたちのおかげで、私は、こうして、東京に、戻って来られたんだ」
「三上部長は、なるべく早く、真犯人を逮捕しろといっています。出来なければ、福島と、新潟の県警は、また、警部を逮捕するだろうし、その時には、もう、かばい切れないと」
「当然だろうね。私も、向うの警察に念を押されたよ。無実だと信じて、釈放に同意したんじゃないとね。だから、制限つきの釈放なんだ。少くとも、三、四日中に、犯人を見つけ出して、逮捕する必要がある」
と、十津川も、いった。
二人は、駅の近くにとめておいたパトカーに乗った。
「ひとまず、警視庁へ帰ります」
と、亀井は、いった。
「木暮明と、女のマネージャーの事件は、殺人事件として、捜査されていないのだね？」
と、十津川は、きいた。
「私たちは、あれを、殺人と考えているんですが、正式に、捜査本部を置いて、捜査するところまで、行っていません」
と、亀井は、いった。
「それじゃあ、捜査も、大変だな」
「大丈夫ですよ。警部が、帰って来られたし、本当の狙いは、仙堂ですから」
亀井は、ニヤッと笑って見せた。

「仙堂のことは、どの程度、調べが、進んでいるんだ？」

「正直にいいまして、表面的なことしか、わかっていません。プロ野球選手の早見のことにしても、仙堂との間に、ホモセクシャルな関係があったという証拠はありません。状況証拠だけです」

と、亀井は、いう。

「早見明のことは、よく覚えているよ」

と、十津川は、去年の暮の事件を思い出しながら、いった。

捜査一課の十津川が、この事件に、関心を持ったのは、事件に対する新聞の書き方に、首をかしげたからだった。

普通、人身事故が起きた時、車を運転していた方に落ち度がなくても、悪く書かれるものである。

それなのに、この交通事故に限って、被害者の菊地のり子の方が悪いように、書かれていた。誤って、はねてしまった早見は、前途有望なプロ野球の星であり、菊地のり子の方は、クラブのホステスで、酔っ払っていたということが、記者たちの心証を、悪くしたのだろうし、球団の猛烈な弁護があったこともある。

十津川は、そうした空気に腹を立て、ひとりで勝手に調べて行き、殺人事件であったことを、明らかにしていった。

結局、十津川の勝利に終ったのだが、正直にいって、早見の実刑が決ったとき、喜びはなかった。むしろ、一人の前途ある青年を、刑務所に送ってしまったことへの心の痛みを、強く感じたのである。

正義が行われるということは、時々、こうした痛みが、伴うものなのだ。

だが、この時、自分が、自分の知らない男から、激しく、憎まれているとは、考えもしなかった。

恨まれているとすれば、ドラフトで、早見に大金

を投じた球団と、早見のファンからだろうと、思っていたのである。

事実、早見の熱烈なファンから、警視庁宛に、三十通近い抗議の手紙が寄せられた。だが、彼等は、気まぐれで、新しい選手のファンになっていくのだ。

「仙堂肇に、会いに行ってみるかな」

ふと、十津川が、いった。

「会われますか？」

「仙堂が、犯人だという証拠はないんだろう？」

「ありません。それに、仙堂は、誰かに、今度の犯行を、やらせたと思います」

「それなら、仙堂に一度会って、反応を見てみたいね」

と、十津川はいった。

「圧力をかけるのには、私も、賛成ですが、理由は、何にしますか？　相手は、優秀な弁護士がついているし、前に、警視庁にいた浦辺さんも、仙堂の会社で、部長をやっていますから、反発が、厳しいですよ」

亀井が、不安そうにいった。

「だが、時間がないんだよ」

と、十津川は、いった。

8

いったん、警視庁に戻り、十津川は、本多一課長と、三上刑事部長に、釈放された礼をいい、そのあと、仙堂肇に、会いに出かけた。

相手が、拒否するかなと思ったが、意外にあっさりと、邸の中に、通された。

仙堂には、奥の座敷で、会ったのだが、驚いた表情は、見せなかった。

（おれが、釈放されたことは、ちゃんと情報が入っ

ていたらしい）

と、十津川は、思った。

OBの浦辺がいるし、優秀な弁護士がついていれば、当然、情報収集に、全力をつくしているのだろう。

「初めて、お会いしますが、十津川です」

と、わざと、紋切り型のあいさつをした。

「仙堂です」

と、相手も、落ち着いた声で、いう。

しかし、眼の色が普通ではなかった。明らかに、憎しみの色が、あった。

それを発見して、十津川は、改めて、早見の事件を思い出すと同時に、ほっともした。相手が、十津川に対して激しい憎しみを持っていれば、また、何か、仕掛けてくるに、違いなかったからである。

「それで、私に、何の用ですか？」

と、仙堂が、きいた。

「木暮明と、マネージャーの死亡について、調べています。われわれは、あれを、殺人事件と考えて、関係者に当っているところです」

「私も、関係者ということですか？」

「その通りです。あなたが、木暮さんのパトロンだという噂がありますのでね」

「私は、関係ない」

「しかし、仙堂さんが、若いタレントを援助されていることは、みんな知っていますよ。そうだ。今、刑務所に入っているプロ野球選手の早見明にも、援助されていましたね。偶然かも知れないが、二人とも、名前は、明ですね」

十津川は、何気ない調子で、いった。亀井が一瞬、はっとした顔で、十津川を、見た。

仙堂の顔が、赤くなった。が、語調は、あくまでも、おだやかに、

「私は、若者が好きなんですよ。若者には、無限の

可能性がありますからね」
と、いった。
「それで、金銭面の援助をされていたということですか？」
「幸い、私には、資産がありますからね。何百億も出して、絵を買うより、ずっと、建設的でしょう？」
と、仙堂は、微笑した。
「そうだとすると、早見が刑務所に入った時には、さぞ、がっかりされたでしょうね？」
と、十津川は、意識して、相手の傷口に触れていった。
仙堂の笑いが、消えた。じっと、何かを、耐えている表情になって、
「若者の挫折は、いつでも悲しいものですよ」
と、いった。声が、かすかに、ふるえていた。
「わかりますね。しかし、早見は、自分の栄光のために、女を殺したんだから、刑務所に、入れられても、仕方がありませんよ。励ましに府中刑務所に、会いに行かれましたか？」
と十津川は、続けて、きいた。
「なぜ、私が、刑務所に会いに行かなければいけないんだ？」
と、仙堂が、眉をひそめて、きき返してきた。
「早見明を、援助されていたんでしょう？　だからですよ」
「君は、心中事件のことで私に会いに来たんじゃなかったのかね？」
仙堂の声が荒くなった。
明らかに、堪忍袋の緒が、切れかかっているのだ。
十津川は、わざと、微笑した。
「これは、まずいことを質問してしまいましたか？」

「関係のない質問をするんだったら、帰って貰う」
「しかし、仙堂さんにとって、木暮も早見も、同じように、可愛い若者で、同じように、援助されていたんじゃないかと、思ったものですからね」
と、十津川は、いった。
「プライベートな問題には、答えたくありませんな」
「しかし、私は、早見の事件も、今度の木暮の事件も、根は、同じだと、思っているんですよ」
「それは、どういう意味です？」
仙堂は、探るような眼つきで、十津川を見た。
「文字通りですよ。つまり、事件の裏に、同じ人間の意志が働いているということです」
と、十津川は、いった。
「まさか、同じ人間というのは、私のことじゃないでしょうね？」
と、仙堂が、きく。
十津川は、どう返事をしたら、一番、効果的だろうかと、考えてから、
「あなたの影がちらつくのは、感じていますよ」
と、いった。
仙堂は、黙って、立ち上り、部屋を出て行ってしまった。

9

外に出たところで、亀井が、ほっとした顔で、
「ちょっと、心配でしたよ」
と、十津川に、いった。
二人は、車に戻った。
「最初は、もう少し、やんわりと、話し合おうと思っていたんだがね。時間との競争になれば、宣戦布告しておいた方が、早いと、思ったんだよ」
「仙堂が、どう出て来るか、わかりません。圧力を

かけてくるかも知れませんよ。何しろ、彼の弟は、元国務大臣ですから」

と、亀井が、いう。

「わかってるさ。だがね、こっちも危険だが、仙堂も、私の覚悟が、わかった筈だ。あの男は、殺人に関係している。私を、罠にもかけた。となれば、当然、危機感を覚える筈だよ」

「警部の狙いは、それですか？」

「政治的に圧力をかけてくるぐらいでは、私には、どうしようもない。対抗手段がないからね。だが、もう一度、私を罠にかけようとするか、私を消そうとすれば、私にも、チャンスが出てくる。それが、狙いだよ」

「政治的な圧力だけを加えて来たら、どうされますか？」

「もう一度、あの男に会って、もっと、こちらが、脅してやるよ。私が、危険極まりない男だと思わせてやるよ」

と、十津川は、笑った。

「危険ですよ」

「仕方がないさ。危険な状況を作らなければ、仙堂も、表に出て来ないからね。カメさんたちには、申しわけないが、難しい立場に、立たせてしまうかも知れないな」

と、十津川はいった。

亀井は、笑って、

「警部と一緒に危険な目にあうのは、望むところですよ。仙堂のような男を見ると、私は、むかついてくるんです。自分は、安全な場所にいて、人を殺したり、人を罠にはめるような男はね」

「浦辺さんを、私は、よく知らないんだが、カメさんは、どうだ？」

「私も、知りません」

「彼のことを、いろいろと、知りたいな」

「彼が、前面に出てくると、思われますか？」
と、亀井が、きいた。
「警察に詳しいのは、浦辺さんということで、仙堂は、私を叩き潰すのに、彼を利用するに決っている。金と、会社での地位を餌にしてね。私を罠にかける方法も、多分、浦辺さんが、考えたものだろう。ああすれば、刑事が、飛びついてくると読んだのは、犯人が、刑事だったからだと、思うんだよ」
と、十津川はいった。
「警察のOBが、そんなことをしたとすると、情けなくなりますよ」
「人間は、変るものだし、金のためにはどんなことでもやる気持になることもあるさ」
と、十津川は、いった。
警視庁に戻ると、浦辺が、在職中に手がけた事件の捜査記録を取り寄せて、眼を通すことにした。
浦辺が、警部だったときの捜査、それに、一課長時代、刑事部長時代の捜査の記録である。
一件ずつ、十津川は、丁寧に、読んでいった。
全部の調書に、眼を通し終ったのは、深夜になってだった。十津川は、浦辺の捜査方針に、一つの癖があることに、気がついた。多分、浦辺が、動くとすれば、その癖が、出てくるに違いない。

第五章　対決

1

十津川が、眼を通した調書は、全部で、二十六件である。

殺人事件が二十件、あとは、誘拐、傷害、現金強奪などである。

特に、興味があったのは、二十件の殺人事件だった。全て、犯人を自供に追い込んで、名刑事の評判を高くしたのだが、その中の三分の一が、容疑者を引っかけて、自供させているのである。

少し間違えると、でっちあげになりかねないのだ。

いや、明らかに、でっちあげもあるのだが、容疑者が、恐れ入って、自供したので、救われている。

例えば、容疑者のライターとか、万年筆、キーホルダーなどを、犯行現場に、置いておき、容疑者を、追いつめていくのだ。

無実の人間に、そんなことをしたのなら、冤罪事件を引き起こしかねない。ただ、浦辺は、勘が鋭く、犯人と見込んだものしか、この手を使わなかった。それで、救われているのだ。

今回、十津川を罠にかけたのが、浦辺だとすれば、納得がいく。人を罠にかけるのが、得意だからである。それでも、現職中は、さまざまな制約があるため、遠慮があったのだが、今は、浦辺の性格が、全面的に押し出されてくるに違いない。

今回、十津川を、罠にかけたのが、いい例だと思う。そのために、三人の人間が、死んでいるのだ。

今のところ、罠をかけたのが、仙堂の指示を受けた浦辺の仕業だという証拠はない。だが、その可能性は、強いのである。

浦辺のような男は、自分の計画が失敗したら、もう諦めるという性格ではない。むしろ、その失敗を取り返そうとして、より暴力的になってくるものである。

浦辺の関係した過去の事件を検討すると、それが、よくわかる。

彼が、捜査一課の警部時代に扱った事件に、こういうのが、あった。

この事件でも、浦辺は、容疑者を、罠にかけて、犯行を認めさせようとしたのだが、相手は、頑として、認めなかった。その時、浦辺は、怒って、暴力に訴え、容疑者を、拷問してしまい、問題化したのである。

これは、浦辺の性格だと、十津川は、思った。

十津川を罠にかけ、起訴できかけたのに、一時的とはいえ、釈放され、仙堂の前に現われて、宣戦を布告した。

仙堂は、浦辺に向って、何をしているのだと、叱りつけただろう。

そうだとすると、浦辺は、再び、智恵をしぼって、十津川を罠にかけようとするよりも、暴力的に出てくる可能性が強いと、十津川は、思った。

十津川は、その考えを、亀井に、話した。

「同感ですね」

と、亀井も、肯いた。それに、続けて、

「警部を、うまく罠にはめたと思っていたのに、警部が、思った通りに起訴されないということで、次は、どんな手段を使ってでも、警部を、消してしまうか、殺人犯に仕立てるかのどちらかの行動に出てくると思います。危険ですよ」

「危険は、わかってるよ」

と、十津川は、笑った。
「浦辺の動きを、監視しましょう」
と、亀井は、突き詰めた顔で、いった。十津川が、新潟で、拘束されている間の心細さが、身にしみているからだった。どんなことをしてでも、十津川を、守らなければならないと、思っていた。その気持が、言葉や、態度に出てくるのだ。
「浦辺は、警視庁のOBだよ」
と、十津川が、いった。
「わかっています」
「それに、良い悪いは別にして、刑事時代は、敏腕だった」
「それも、わかっています」
「となれば、こちらが、ひそかに、監視をしても、気付かれてしまうよ」
「気付かれても、監視していれば、警部を守れます」
と、亀井は、いった。
「ありがたいが、そうは、したくないんだよ。私は、一刻も早く、仙堂を逮捕したいんだ。そのためには、仙堂の手先である浦辺に、私を、襲わせたいんだよ。向うが動かないと、こちらも、動けないからね」
と、十津川は、いった。
「浦辺を、監視していないと、何をするか、わかりませんよ」
「それで、いいんだ」
「しかし、仙堂は、浦辺に、いくらでも、金を出すんじゃありませんか？　彼は、個人資産が莫大ですし、どうも、仙堂には、偏執狂的なところがあるようですから、いくらでも、浦辺に、払いますよ。浦辺は浦辺で、名誉挽回とばかり、その金で、暴力組織の人間を傭って、警部を襲わせるかも知れません」

「覚悟はしているさ。とにかく、私としては、相手に行動させて、逮捕したいんだ。一番いいのは、相手の行動が、予測できれば、いいんだがね」

と、十津川は、いった。

「それでは、今度は、こちらが、罠を仕掛けたらどうでしょうか？」

と、亀井が、いった。

「罠を？」

「そうです。よくいうじゃありませんか。謀る者は、謀られやすいと。浦辺は、彼が扱った事件の調書を見ても、大変な自信家です。そういう人間ほど、罠にかけ易いと思いますね。絶対に、自分は、罠になんかはまらないと、思い込んでいる筈です。罠にかけるのは、自分の方だ、とです」

と、亀井は、いう。

十津川の顔に、微笑が、浮んだ。

「それは、確かだな。自信家ほど、サギに引っかかるともいうからね。問題は、どんな罠にするかだな」

「それですが、単純な罠の方がいいと思いますね。複雑な罠だと、浦辺は用心しますから」

と、亀井は、いった。

「なるほどね」

「素朴な罠で、いいんです。浦辺は、捜査一課の人間が、こんな単純な罠をかけてくるとは、思わないでしょうから」

と、亀井は、いった。

2

十津川は、部下の亀井たちと、浦辺を罠にかける方法について、相談した。

だが、なかなか、これといった案が出ない。

「よし。まず、浦辺に、尾行をつけよう」

と、十津川は、いった。
「しかし、警部。さっき、警部がいわれたように、浦辺は、元刑事ですから、すぐ、尾行に気付かれると思いますよ」
と、亀井が、いう。
「気付かれた方がいいんだ。だから、西本と日下の二人には、そのつもりで、尾行して貰う」
と、十津川は、いった。
「それでは、わざと、気付かれるように、尾行しますか？」
西本が、つまらなそうにきいた。十津川は、小さく首を横に振って、
「いや、そんなことをしたら、浦辺に、陽動作戦と、気付かれてしまう。わからないように尾行していても、浦辺は、気付くさ」
「それで、どんな効果が、期待できますか？」
と、日下が、きいた。
「浦辺は、多分、こう思っているだろう。十津川は、罠にかけたのは、仙堂に指示された自分だと、思っているだろう。そこで、十津川は、きっと、自分を監視するだろうとね。だから、尾行をつければ、浦辺は、自分が、考えた通りだと、ほくそ笑む筈だ。捜査一課も、たいしたことがないなと、安心するに違いない」
と、十津川は、いった。
「なるほど」
と、日下が肯いた。
「しかし、そのあと、どうしますか？」
「浦辺は、仙堂の命令で、私を、もう一度、罠にかけるか殺すかしようとするに決っている。だが、尾行されていては、それが、出来ない」
「尾行を、撒こうとするでしょうね」
と、西本が、いった。
「そうだ。彼が、そんな動きを見せたら、行動を起

こす前触れとみていい。君と、日下刑事は、撒かれたふりをして、私に、連絡するんだ」
「わかりました」
「その時、君たちは、大声で、私に連絡して貰いたいんだよ。すぐ、こちらへ来てくれとね。撒かれた場所を、いってくれれば、いい」
「浦辺が、聞いているかも知れませんよ」
と、西本が、いう。
「それは、聞いていると思うよ。浦辺は、ひとりで、動いているわけじゃない。恐らく、尾行されながら、君たちの動きを、他の連中に、監視させると思っている。よくやる手だ」
「それで、わざと、聞かせるんですか？」
「歩いて尾行している時だったら、近くの公衆電話で、私に、連絡する」
「聞こえるようにですね？」
「そうだ。覆面パトカーで尾行中なら、わざと、ドアを開けて、私に、連絡して、すぐ、来てくれと、いうんだ」
「やってみますが――」
「尾行を撒かれて、あわてて、連絡するという形にすれば、大声を出しても、浦辺は、怪しまないだろう」
「うまく、芝居が出来るかどうか、わかりませんが」
と、西本は、自信なさそうないい方をした。
「出来るさ」
と、十津川は、笑って、
「芝居は、下手な方がいいんだ。ぎこちなければないほど、尾行を撒かれて、君たちが、あわてているように見えるからね。肝心なのは、私を呼ぶことだ。それが、聞こえれば、浦辺は駈けつける私を、狙うだろう」
と、十津川はいった。

「もし、狙わなかったら、どうしますか？」
「その時は、繰り返せばいい。浦辺を尾行し、また、撒かれる。そして、すぐ、私に、来てくれと、叫ぶ」
と、十津川はいい、続けて、
「それを、繰り返すと、浦辺は、私の行動様式をつかんだと思って、それに従って、計画を立てる筈だ。従って、第一回の時には、浦辺は、私の行動を見張るだけで、何もしないかも知れない。二回目か、三回目が、チャンスだな」
と、十津川は、いった。
「いずれにしても、危険ですよ」
と、亀井が、いった。
西本たちも、同じように、危険だと、いった。
「わかっているが、私は、やりたいんだよ」
と、十津川は、いった。
「しかし、いつ、浦辺が襲うか、わかりません。一回目か、二回目か」
と、亀井が、いう。
「いや、推測は出来るよ」
「どんな風にですか？」
「人混みの中で、私を襲うことは、いくら浦辺でも、出来ないだろう。明るい時にもだよ。そうなると、暗くなってから、人の気配のない場所で、尾行を撒いた時が、向うのやる時だと思うね」
と、十津川は、いった。
「確かに、そうかも知れませんが――」
「危険は、わかっている。とにかく、明日から、尾行は、やって貰うよ。そして、西本君たちには、申しわけないが、尾行に失敗して貰う」
十津川は、きっぱりと、いった。
翌日、西本と、日下は、覆面パトカーで、早朝、出発した。
浦辺は、八王子のマンションに、住んでいた。そ

のマンションの前で、張り込むためだった。
浦辺は、午前八時三十分に、マンションを出ると、シーマを運転して、会社に向う。
西本と、日下は、そのシーマを、尾行した。
わざと、車間距離を詰めてみる。
シーマが、急に、スピードをあげた。
「気付いたぞ」
と、助手席の日下が、いった。
西本も、シーマに合わせて、スピードをあげた。
「われながら、下手な尾行だよ」
と、運転しながら、西本が、呟いた。
今度は、シーマが、道路の端に寄って、とまってしまった。
尾行されているかどうか、調べる初歩的なやり方だった。こんな時、わざと、追い越しておいて、向うの車が見えなくなった場所で、待つのだ。
西本は、その通りに、車を、動かした。
「教科書通りにやるよ」
と、西本は、苦笑しながら、日下にいった。
「浦辺は、笑ってるだろうな。警察のやり方は、全然、進歩しないなと、思ってね」
と、日下も、いった。
「身体を隠そう。これも、定跡だ」
と、西本はいい、二人は、座席で、頭を低くした。
とまっている覆面パトカーの横を、浦辺のシーマが、通過して行った。
西本は、運転席に起きあがって、再び、尾行に、移った。
「これで、完全に尾行に、気付かれたな」
と、西本が、いった。
もう、シーマは、スピードを早めたり、とまったりしなかった。そのまま、会社に向った。
その報告を受けた十津川は、亀井に向って、

「始まったな」
と、小さく、いった。

3

西本と日下の二人は、覆面パトカーを、会社の前にとめ、交代で、仮眠を取りながら、浦辺が出て来るのを待った。
午後七時過ぎに、浦辺のシーマが出て来て、西本たちは、再び、尾行に移った。
この日は、浦辺は、何処にも寄らず、自宅マンションに帰った。十津川は、夜に入ってから、清水と三田村の二人の刑事を、西本たちと、交代させた。
翌日も、浦辺は、自分で、車を運転して、会社に行き、夜になると、戻って来た。
これといった動きは、示さないのだ。十津川が、釈放されたのは、知っているくせに、それを、完全に、無視したような動きを見せている。
十津川は、自分に対する新潟と、福島の県警の疑惑が消えていないだけに、焦りを覚えた。
動く敵は、謀り易いが、動かぬ敵は、謀り難いという。何とかして、仙堂なり、浦辺を、動かさなければならないのである。
十津川は、もう一度、仙堂に会って、圧力をかけることにした。具体的に、いわなければ、圧力にはならないと考え、福島の東山温泉で、女を殺した男のことを追いかけ、ほぼ、身元の割り出しに成功したと、告げた。
「私によく似た男ということで、探しました。多くの情報が集まりましたが、その中に、あなたのところで働いている浦辺部長と、関係のある男がいることがわかりましてね。その男を、今、追いかけています」
と、十津川は、いった。もちろん、嘘である。

浦辺と関係のある男というのも、はったりだったが、全くのでたらめを、いったわけではなかった。

十津川を、罠にかける計画を、仙堂自身が、考えたとは思えない。自分は、安全な所にいて、全て、浦辺にやらせたと、十津川は見ている。だから、彼によく似た男も、浦辺が、見つけて来たに違いないと、推理したのである。

その翌日、会社に出た浦辺は、まっすぐ、自宅には帰らず、新宿西口の中央公園で、シーマを降りた。

午後八時頃だった。

覆面パトカーで尾行していた清水と三田村の二人の刑事も、車から降りて、雑沓の中を、浦辺の尾行に移った。

相手は、警視庁のOBだし、ベテラン刑事だった男である。その上、自分が、尾行されていることを知っているのだ。

十二、三分もすると、見事に、撒かれてしまった。

清水と、三田村の二人は、近くにあった公衆電話に飛びつくと、十津川に向って、

「浦辺を、見失いました。場所は、西口の小田急の前です。何か、企んでいるのかも知れませんから、すぐ来て下さい」

と、前もって、指示された通り、かなりの大声で喋った。

「すぐ行く」

と、十津川は、返事をした。

十津川は、亀井と二人、覆面パトカーを飛ばして、新宿西口に、急いだ。

「こちらの計画に、引っかかったと、思いますか？」

と、運転しながら、亀井がきいた。

「わからないが、引っかかってくれたことを、希望

するね」
と、十津川は、いった。
「しかし、浦辺が、動きを見せたことは、間違いありませんよ」
「そうだね。あとは、こちらの動き次第だな」
と、十津川は、自分に、いい聞かせるように、いった。これから先は、浦辺との化し合いになるだろう。
十津川が、新潟と、福島の県警から圧力をかけられているように、浦辺も、傭い主の仙堂から、十津川を何とかしろと、圧力をかけられているに違いない。
ただ、相手は、古狐である。こちらが、罠を仕掛けていると気付けば、さっと、退いてしまうだろう。
十津川たちは、小田急ビルの前に着いた。
すでに、デパートは、閉っているが、駅から吐き出されてくる人々の波は、続いている。
十津川と、亀井は、車から飛び出すと、待っていた清水と、三田村の傍に駈け寄った。
「ここで、浦辺を見失ったのか？」
と、十津川は、声をかけた。
「そうです。見事に、撒かれました」
と、清水が、答える。
「奴は、何を考えているのかわからないから、探してみてくれ」
と、十津川は、いった。
清水と、三田村が、雑沓の中に、散って行った。
十津川と、亀井は、車に戻った。
十津川は、無線電話を取り上げて、西本に、連絡した。
「今、新宿西口にいる。ここで、清水刑事たちが、浦辺に撒かれた」
「浦辺は、何か企んでいると、思いますか？」

と、西本が、きく。
「いや、今日は、こちらの反応を見ているだけだと思うね。彼は、こうやって、君と連絡している私の様子を、何処かで、見ている筈だ」
と、十津川は、いった。
「すると、私たちが、何を話しているか、気になるでしょうね」
と、西本は、電話の向うで、小さく笑った。
十津川は、笑うわけにはいかなかった。浦辺の眼が、気になるからだ。
「君も、早く結婚したまえ」
と、十津川は、難しい顔で、いった。
「結婚ですか？」
「何か、指示を与えている様子を、見せたいんだよ」
と、十津川はいった。
「しかし、私は、結婚のことは――」
「これは、真面目にいうんだが、結婚は、早くした方がいいぞ」
と、十津川は、いって、電話を切った。
一時間ほどして、清水と三田村が、戻って来た。
「浦辺は、見つかりません」
「彼の乗って来た車は？」
「まだ、中央公園の、傍にとめてあります」
と、清水がいった。
「君たちは、浦辺のマンションに行ってくれ。私たちは、彼のシーマを見張る」
「しかし、浦辺が、車に戻ってくるかどうか、わかりませんよ」
「それでもいいんだよ」
と、十津川は、いった。
清水と三田村が、車に乗って、出かけたあと、十津川と亀井は、中央公園に移り、道端にとめてあるシーマの五、六メートル後に、自分たちの車を、と

めた。
見張りの常識どおり、車内灯も消した。
「全部、浦辺に見られているでしょうね」
と、亀井が、小声でいう。
「そうでないと、困るよ」
と、十津川も、小声でいった。
「浦辺はきっと、われわれのことを、型にはまった尾行をすると、笑っているでしょうね」
「今の中、笑っていて欲しいね。こっちを、甘く見て貰いたいんだ」
と、十津川は、いった。
三十分、一時間とたったが、浦辺が、戻ってくる気配がない。
突然、パトカーが、ゆっくりと近づいて来て、シーマの前に、とまった。
パトカーから、二人の制服の警官が、降りて来て、シーマに近づいて行き、車の中を、のぞき込んだ。
「何をしてるんだ？　あいつら」
と、亀井が、舌打ちをした。
十津川は苦笑して、
「こちらの反応を見ているのさ」
「こちらの？　あの警官たちがですか？」
「いや、浦辺がだよ」
と、十津川はいい、車から降りて、警官たちの傍へ、近づいて行った。
十津川は、二人に、警察手帳を見せ、
「パトカーに戻ってくれ」
と、小声で、いった。
二人の警官は、十津川に押されるように、パトカーに戻って行く。
「なぜ、あの車を調べていたんだ？」
と、十津川は、相変らず、小声で、きいた。
「電話があったそうなんです。中央公園脇に、ずっ



と青いシーマがとまっている。何か変だから、調べてくれという電話です」
片方の警官が、緊張した声で答えた。
「男か女か、どっちだね？」
「男の電話です」
「わかった。とにかく、すぐ、立ち去ってくれ」
と、十津川は、いった。
パトカーは、その指示通り、走り去った。
十津川は、自分の車に戻った。
「やはり、電話したのは、浦辺のようだよ」
と、十津川は、亀井に、いった。
「われわれの反応を、見るためですか？」
「他に、考えられるかね。われわれが、本気で、彼の尾行をしているかどうか、調べたいんだろう」
と、十津川は、いった。
「浦辺も、これが、罠かどうか、疑っているんですね？」
「古狐だから、簡単には、のって来ないさ」
「それで、どうでしょうか？」
「あわてて、パトカーを追い払ったからね。私の動きも、当然、浦辺は、見ているだろうから、それを、どう見たかだね」
と、十津川は、いった。

4

更に、三十分ほどして、黒い人影が、シーマに、近づいて来て、ドアを開け、乗り込んだ。
「浦辺ですよ」
と、亀井が、囁いた。
シーマが、動き出す。十津川たちは、すぐ、尾行に移った。あくまで、定跡どおりの尾行をして行かなければならないのだ。
浦辺は、まっすぐ、自宅マンションに、帰った。

十津川と、亀井は、あとを、清水たちに委せて、帰ることにした。

翌日も、浦辺のシーマは、会社から、まっすぐ、自宅に戻らなかった。

甲州街道に入り、西に向って、走って行く。

尾行するのは、夜半に交代した西本と、日下だった。

時間は、午後八時を過ぎている。

下高井戸、烏山と過ぎると、次第に、周囲が、静かになっていく。ネオンも、なくなった。

「何処まで行くつもりかな？」

と、覆面パトカーを運転しながら、西本が、日下に、声をかけた。

「向うの心理は、わからんよ」

と、日下が、ぶっきらぼうに、答える。

やっと、シーマが、とまったのは、パチンコ店の前だった。

広く駐車場をとった、典型的な郊外のパチンコ店である。

シーマが、駐車場に入り、浦辺が、降りて来て、店の中に入って行った。

西本は、道路の反対側に、車をとめ、日下ひとりが降りて、パチンコ店の中に入って行った。

店内には、半分ほどの客が、入っていた。浦辺は、奥の椅子に腰を下して、楽しげに、玉をはじき始めている。

日下も、五百円で、玉を買い、入口に近い台で、遊び始めた。

浦辺は、煙草を取り出して、火をつけた。

三十分ほどしたとき、浦辺は、席を立ち、トイレに入った。

（こちらを、撒く気だな）

と、日下は、思った。とすれば、上手く、撒かれなければならない。

十五、六分経った。が、浦辺は、トイレから出て来ない。

（失敗した）

という感じで、日下は、あわてて、トイレの中に入った。

トイレの窓が、開いている。そこから、脱け出したことは、はっきりしていた。

日下は、急いで、パチンコ店を出ると、道路の向うにとめてある覆面パトカーに向って、駈けた。どこかで、浦辺が、見守っているだろうと、思いながらである。

車に乗り込むと、日下は、すぐ無線を使って、十津川に、連絡をとった。

「浦辺に、撒かれました。場所は、府中近くのパチンコ店『レインボー』の前です」

「彼の車は？」

「パチンコ店の駐車場に、置かれたままです」

「わかった。すぐ、そこへ行く」

と、十津川が、いった。

十津川と、亀井が、覆面パトカーを飛ばして、駈けつけた。

十津川は、西本たちに、「ご苦労さん」と、ねぎらってから、

「これから、浦辺のマンションに行ってくれ」

「昨日と、同じことをするわけですか？」

と、西本が、きく。

「繰り返すことが、大事なんだよ」

と、十津川は、いった。

西本たちの車が、引き返して行ったあと、十津川と、亀井は、車の中から、パチンコ店の駐車場を、見張ることにした。

「浦辺は、こんなことを繰り返して、何をしているんですかね？」

と、亀井が、声を落として、きいた。

「こちらの反応を見ているのさ。われわれの反応が、いつも同じだとわかれば、次には、何か、罠を仕掛けてくる筈だよ」

と、十津川は、いった。

「どんな罠ですか？」

「そこまでは、わからないが、私をどうにかしようとする罠であることだけは、確かだよ。私を、また、殺人の容疑者にするか、或いは、荒っぽく、私を消そうとするかの、どちらかだろうがね」

と、十津川は、暗い駐車場に眼をやりながら、いった。

5

十津川は、浦辺が、仙堂に、早くどうかしろと、せっつかれているに違いないと、読んでいた。

折角、罠にかけて、殺人容疑で逮捕できると考えていたのに、十津川が、釈放されて、眼の前を、うろうろしていれば、仙堂にとって、これほど、目障りなものはないだろうからである。

浦辺も当然、焦っているはずなのだ。

それに、うまく罠にかけても、また、釈放されてしまうのではないかという不安と、焦りがある筈だった。

と、すれば、浦辺が、どう出て来るかは、だいたい予想が出来る。

二時間半ほどして、どこからか、浦辺が現われ、駐車場にとめてある青いシーマに、乗り込んだ。

彼が、何処にいたかわからないが、何処にいたにしろ、こちらをじっと監視していたことだけは、間違いないのだし、十津川の方もそれを知っていて、こうやって、無駄とわかっていながら、浦辺の車を監視していたのである。

青いシーマが、動き出す。十津川たちは、尾行

に、移った。
浦辺のシーマは、こちらをからかうように、スピードを上げたり、下げたりしながら、自宅に向っている。
「向うさんは、どんな気持でいるんですかね？」
と、亀井が、運転しながら、十津川に、きいた。
「どんな気持というより、こうやって、同じことを繰り返している中に、浦辺の頭の中に、どんな考えが、固定化して来るかが、問題だよ」
「どういうことですか？」
「浦辺は、こちらをかなり警戒していたと思うね。彼は、警察のOBだから、こちらの実力を知っているからだ。だが、こうやって、われわれが、浦辺に、いいように引きずり廻されていると、彼の頭に、徐々に、こちらを甘く見る気持が、生れてくるんじゃないか。それを、期待しているんだよ」
「もう、相当、こちらを、甘く見るようになっていると思いますよ。もともと、浦辺は、警視庁時代から、自分より偉い者はいないと思っていたようですから」
「そうだといいがね」
「もし、浦辺の頭に、期待するような考えが生れてきたとすると、どうなります？」
「私を、殺せると思うだろうね」
と、十津川は、他人事みたいに、いった。
「殺す――ですか？　また、罠にかけようとするんじゃありませんか？」
「それも考えてみたが、仙堂は、今度こそ、完全に、私を叩き潰せと、厳命している筈なんだ。面倒くさい罠にはめても、また、釈放されては、腹が立つだろうからね。浦辺だって、今度こそ、私の息の根を止めないと、馘首になりかねない。だから、今度は、私を、殺そうとする筈だ」
「そんなことは、させませんよ。絶対に」

亀井が、息まいた。
十津川は、笑って、
「浦辺が、私を殺そうと思ってくれないと、困るんだよ」
「そうかも知れませんが――」
浦辺のシーマは、自宅マンションに、帰った。
十津川は、例によって、あとの監視を、部下に委せて、警視庁に、帰った。
その後、三日間、何事も起きなかった。浦辺は、自宅と会社の間を、往復するだけで、他に寄ろうとしない。それでも、十津川は、きっちりと、彼の尾行を続けた。
その三日間、浦辺が、何を考え、何を企んでいたのかは、わからない。しかし、十津川は、それを、準備期間と見ていた。十津川を殺すための準備期間である。
四日目。
午後五時と、いつもより早く会社を出た浦辺のシーマは、まっすぐに奥多摩に向った。
西本と日下の二人が、尾行している。その報告を受けながら、十津川は、壁の地図を眺めていた。
拝島を通過した。
「今日は、ずいぶん遠くまで行きますね」
と、亀井が、いう。
「いよいよかも知れないな」
「遠くへ、警部を誘い出して、殺す気でしょうか？」
「かも知れん」
と、十津川が、いったとき、西本から、無線が入った。
「大型トラックが、突然、出て来まして、おかげで、浦辺のシーマを見失いました」
「今、何処だ？」
「青梅の近くです」

「すぐ行くから、そこにいるんだ」
と、十津川は、答えておいて、亀井に向っては、
「今日は、私一人で行く」
「なぜですか？」
「多分、今日、浦辺は、私を殺そうとするような気がするんだ。だから、危険だ」
「とんでもない。それなら、私も一緒に行きますよ」
亀井の声が、大きくなった。
「しかし、浦辺が狙うのは、私一人だよ。カメさんまで、危険な目に遭うことはない」
「警部。危険だから、一緒に行きたいんです。第一、今度だけ、警部が一人で、車を運転して行ったら、浦辺は、警戒しますよ。いつもと違えば、罠かも知れないと、思いますからね」
と、亀井は、いう。
十津川は、小さく肯いて、
「確かに、カメさんのいう通りだ」
「それに、申しわけありませんが、私の方が、警部より、車の運転は、上手ですよ」
と、亀井は、笑いながら、いった。自慢することの滅多にない亀井が、そんないい方をするのは、十津川のことを心配してのことに決っている。
「ああ、そうだったね」
と、十津川も、肯いた。
「じゃあ、行きましょう」
と、亀井が、十津川を促して、立ち上った。

6

現場に着いた時は、午後九時に近かった。
奥多摩湖方面につながる道路は、ほとんど、人影も、車の姿もない。
「突然、大型トラックに、前方をさえぎられまし

て」

と、西本が、十津川にいう。

「それで、いいんだ。君たちは、東京に戻ってくれ」

と、十津川は、西本たちに、いった。

西本たちの覆面パトカーが、Uターンして、引き返して行く。

それを、十津川と、亀井は、車の中から、見送った。浦辺も、何処かで、見送っているに違いないと、思いながらである。

周囲が、静かになった。

亀井は、ハンドルに、手を置いて、

「浦辺は、どんな手で来ますかね？」

と、小声で、いった。

「わからんな。見られている気はするんだが」

と、十津川が、いう。

内ポケットの拳銃に、そっと、触った。浦辺は、殺そうとして、来るだろうが、簡単に、殺されては、たまらない。

亀井が、車内灯を消した。右手が、小高くなっていて、森がある。その森の中から、狙撃されたら困ると、思ったのだ。

背後から、車のライトが近づいて来て、トラックが、横を、すり抜けて行った。

この辺りは、自家用車より、トラックの方が、多い感じだった。

五分、十分と経過した。

また、ライトが、近づいて来た。

そのライトが、早いスピードで、迫ってくる。

こちらの横をすり抜けるのなら、ライトの方向が、変る筈なのに、全く変らない。

「危いぞ！」

と、思わず、十津川が、叫んだ。

亀井も、それを感じ取ったとみえて、素早く、ギ

アをシフトして、アクセルを踏みつけた。
チューニングしたエンジンが、唸り、車体がはねるように、飛び出した。その瞬間、強い衝撃が、襲いかかった。
後方から来た大型のダンプが、ぶつかって来たのだ。
「この野郎！」
と、亀井が、叫びながら、ハンドルを切った。
車体が、ガードレールをこすりながら、加速する。
ダンプも、負けずに、加速して来る。
「常識的な手を使いやがる」
と、十津川は、バックミラーを見ながら、呟いた。
「しかし、体当りされたら、終りですよ」
と、亀井が、いう。
確かに、その通りだった。向うは、大型のダンプカーだ。体当りされたら、こちらは左手の谷底に、転落してしまうだろう。
「どうします？　スピードをあげて、振り切りますか？」
と、亀井が、きく。
「振り切れるのか？」
「出来ますよ」
「だが、そうしたくないな。浦辺を、捕えたいんだ」
と、十津川は、いった。
「では、向うの出方を見ましょう」
と、亀井は、いう。
そのままのスピードで、五、六分走ったとき、突然、前方に、眩しいライトが、見えた。
ライトが、四つ並んでいる。前方にも、大型ダンプが、二台、道をふさぐ恰好で、とめてあるのだ。
思わず、亀井が、ブレーキを踏み込んだとたん

に、後方から迫って来たダンプが、ぶつかってきた。

すごい衝撃だった。二人の乗った車が、はねあがり、叩きつけられた。

亀井が、必死に、ハンドルを右に切り、脇道へ、飛び込んだ。

大型ダンプも、車輪をきしませながら、脇道へ突っ込んで来た。

ダンプの車体で、道路を、ふさがれてしまい、他の車は、入って来られない。

「追い込む気だ」

と、十津川が、いった。

両側は、雑木林で、そこに、車を入れることは、出来ない。

細い、未舗装の道を、先に進むより仕方がない。

眼の前が、急に、広くなった。

壁に囲まれた円型の広場のように見える。多分、採石場の跡なのだ。

二人の車は、まるで、闘牛場の囲いの中に追い込まれた牛に見えた。

入口は、大型ダンプが、ふさいでしまった。

亀井は、急ブレーキをかけて、車をとめた。

「変な匂いがするぞ」

と、十津川が、眉を寄せて、呟いた。

「ガソリンの匂いです！」

と、亀井が、叫んだ。

「われわれを、焼き殺す気か」

と、十津川が、いったとき、突然、広場の周辺が、燃えあがった。

円型の広場に、前もって、ガソリンが、まかれていたのだ。

浦辺は、三日間、十津川を殺す場所を探し、ここを見つけ、準備しておいたのだろう。

熱風が、じわじわと、近づいてくる。

「車の屋根に、あがって下さい！」
と、亀井が、怒鳴った。
「あがって、どうするんだ！」
と、十津川が、怒鳴り返す。
「とにかく、あがって下さい」
と、亀井はいい、十津川の身体を押しあげた。
二人は、車の屋根に、立ちあがった。火の輪に包まれてしまっている。逃げ道を塞いだダンプの姿も、炎の向うにかくれてしまっていた。
「きれいだね」
と、十津川は、一瞬、危険を忘れて、感嘆の声をあげた。
ふいに、眼の眩むような光が、頭上から降って来た。
何かが、上からおりてくる。ロープだった。
気がつくと、頭上で、警視庁のヘリコプターが、轟音を立てているのだ。
「つかまって下さい！」
と、亀井が、叫ぶ。
十津川が、ロープをつかんだ。亀井も、つかむ。
次の瞬間、二人の身体が、はじかれたように、舞い上った。
円型の炎の輪が、急速に、小さくなっていく。
「ヘリは、カメさんが、呼んだのか？」
ロープにぶら下った恰好で、十津川が、きいた。
「大事な警部を、死なせたくないので、万一に備えて、近くまで、来て貰っておいたんです。それが、役に立ちました」
と、亀井が、いう。その声が、風に飛ばされて、切れ切れに、聞こえる。
「これで、カメさんに、頭があがらんな」
「そんなことより、今度は、反撃に移りましょう」
と、亀井が、いった。
二人の身体が、ヘリの機内に引き揚げられた。

「無茶をしてはいけませんね」
と、機長が、十津川に、声をかけた。
「無茶は、向うだよ」
と、十津川は、笑い、
「犯人を捕えたいね」
と、いった。
ヘリは、下方を照らすサーチライトをつけた。
強烈な光芒が、道路を照らし出した。
ダンプが、浮かびあがる。運転手が、飛びおりて、逃げ出すのが見えた。

7

ヘリコプターは、高度を下げて、男を追いつめていった。回転翼の作り出す猛烈な風圧に、逃げる男が、よろめいて、地面に伏せてしまった。
「そのまま、動くな！」
と、マイクで、亀井が、男に、警告する。
強烈なサーチライトの光の中で、土煙りが巻き上っているのが、見える。
地上すれすれで、ホバリングするヘリから、十津川と、亀井が、飛びおりて、伏せている男に、近づいていった。
ヘリが、急上昇して行く。
十津川と、亀井は、やっと起き上った男の両腕をつかみ、手錠をはめた。
遠くから、消防車のサイレンが、聞こえてくる。
「放火と、殺人未遂。重罪だな」
と、亀井が、男にいった。
三十五、六歳のジャンパー姿の男は、
「おれは、こんなになるとは知らなかったんだ――」
と、声をふるわせた。
「じゃあ、その何も知らない事情を話すんだ」

と、十津川が、男に、いった。
一台、二台と、消防車が、三人の横をすり抜けるようにして、炎上を続けている火災現場に、走って行く。
少しおくれて、西本と日下が、パトカーで、到着した。ヘリの上から、連絡しておいたのである。
十津川は、そのパトカーで、男を、連行した。
すぐ、取調室で、訊問が開始された。連行されてから、男は、急に、黙り込んでしまったが、名前は、彼の指紋から、わかった。
小原実、三十五歳。傷害の前科が二つあった。それで、二年間、刑務所に入っている。
名前が、わかってしまうと、小原は、急に、べらべらと、喋り始めた。
「ただ、脅かすだけだといわれたんだ」
と、小原は、青白い顔で、十津川に、いった。
「誰にいわれたんだ？　浦辺にか？」
と、十津川は、きく。
「そうですよ。あの人には、世話になってるから、嫌とはいえなかったんだ」
「二回目に、傷害で捕まったとき、浦辺が、その事件を指揮していたんだな？」
「ああ。刑務所に入ってからも、励ましの手紙をくれたし、出所後の仕事の世話もしてくれたし、だから、今度のことを頼まれたとき、出来ないとは、いえなかったんだよ」
「何をしろと、いわれたんだ？」
「覆面パトカーが来るから、あの廃虚の中へ、追い込んでくれと、頼まれたんだ。あんな恐しい仕掛けがあるなんて、知らなかった。本当だよ」
「他にも、同じことを頼まれた奴がいるだろう？」
「ああ、三人いた。みんな、ダンプの運転手だ」
「浦辺から、金を貰ったんだな？」
「貰ったよ」

と、小原は、いう。
「頼まれたのは、今度のことだけじゃないだろう？」
と、横から、亀井が、いった。
とたんに、小原の顔が引きつった。
十津川は、そんな小原に向って、
「やっぱり、前にも、浦辺に頼まれて、何かやったんだな？」
「――――」
「いいか。何もかも喋ってくれれば、私たちが、焼け死にしかけたことと、君は、無関係だと思う。しかし、隠し続ければ、君を、殺人未遂で、逮捕する。私たちが、殺されると知っていて、あの場所に追い込んだとしてだ」
十津川は、厳しい表情で、小原を、睨んだ。
「――――」
「どうなんだ？　殺人未遂だと、前科があるから、十年は、戻れなくなるぞ」
と、亀井が、脅した。
「たいしたことは、やってないよ」
と、小原は、いう。
「それなら、話したらいいだろう」
「写真を渡されたんだ」
「何の写真を？」
「あんたの顔写真だよ」
「私の？　浦辺にか？」
「ああ」
「それで？」
「年齢は、四十歳ぐらいで、身長は百六十五センチから百七十五センチまでで、この写真の男に似た前科者を、見つけて来いと、いわれたんだ」
「なるほどな。それで、見つけたのか？」
「おれと一緒に、府中刑務所に入っていた男がいたんだ。そいつが、よく似ていたんで、連れていった

よ」
「その男の名前は？」
「確か、大野木という男だった。おれと同じで、傷害で、府中刑務所に、入っていた奴だよ」
「浦辺のところへ連れて行って、それからどうしたんだ？」
「おれは、浦辺さんから、十万円貰った。そのあとのことは、知らないよ」
「そのあと、大野木に会ってないのかね？」
「会ってないよ」
「彼は、何処に住んでたんだ？」
「阿佐ケ谷のアパートだよ」
「アパートの名前は？」
「忘れたな。汚いアパートだったよ」
と、小原は、いい、アパートの場所を、メモ用紙に、書いて見せた。
十津川は、いったん、訊問を打ち切って、警察庁に、大野木という男のことを、調べて貰った。
確かに、水戸で、傷害事件を起こして、逮捕され、府中刑務所に入っていた男だという。名前は、大野木三郎、三十九歳である。
顔写真も、コピーして貰った。
「感じが、警部に似てますよ」
と、亀井が、笑いながら、いった。
十津川は、西本たちに、浦辺を見つけて、連行してくるように命じておいて、自分は、亀井と、阿佐ケ谷へ出かけた。
大野木がいたというアパートは、すぐ、わかった。
確かに、古びたアパートで、取りこわされようとしていた。住民も、出てしまったらしい。
その二階の隅の部屋には、大野木と書いた紙が、表札代りに、ドアに、貼りつけてあった。
確認が出来たので、十津川は、浦辺のマンション

に、廻った。
西本、日下の車が、マンションの前に、とまっていた。マンションから出て来た西本が、十津川を見て、
「浦辺が、いません。隣室の住人にも、聞いてみたんですが、今夜は、戻って来た様子が、ありませんね」
と、いう。
「やはり、逃げたか」
「われわれを殺そうとして、失敗したんで、姿を消したんでしょう」
と、亀井が、いった。
十津川は、腕時計に、眼をやった。
「もう、十一時を過ぎているから、飛行機で、国外には、脱出できないな」
「浦辺は、警察のOBですから、われわれに捕まるのは、何としても、我慢できないんじゃありませんか。とすれば、国外へ逃げると思います」
「明日から、空港へ張り込ませよう」
と、十津川は、いった。

8

翌朝から、成田空港への張り込みが行われた。全国にある国際空港には、それぞれの県警や、府警に頼んで、張り込んで貰うことにした。
だが、なかなか、浦辺は、現われない。
三日目は、十津川自身が、成田に、張り込んだ。
その日の午後二時過ぎに、突然、十津川は、出発ロビーのアナウンスで、呼ばれた。電話が、かかっているというのである。
十津川は、亀井に、小声で、
「誰かに、見られていたらしい」
「誰ですか？」

「私の顔を、よく知っている人間だよ」
「浦辺でしょうか？」
「かも知れない。私は、電話に出てくるが、その間、さり気なく、探していてくれ」
と、いい残して、十津川は、空港事務局にかかっている電話に出た。
「十津川です」
と、いうと、
「十津川君。なかなか、がん張ってるじゃないか」
と、男の声が、いった。
「浦辺さんですね？」
先輩なので、一応、丁寧に、いった。
「そうだ。いっておくが、私は、捕まらんよ」
「捕まえますよ」
「どうだ、私と、取引きしないかね？」
と、浦辺が、いう。
「取引きって、何のことですか？」
「君は、まだ、福島県東山温泉の殺人事件で、無罪になったわけじゃないんだ。いぜんとして容疑者だ。君が、刑事でなければ、とっくに、裁判にかけられていたよ」
「それが、どうかしたんですか？」
「君が、私の国外脱出を、黙認してくれたら、君の代りに、女を殺した奴を、引き渡してやる。そうすれば、君の無実は、証明されるんだ」
「大野木三郎という男ですね？」
「ほう、知っていたのか？」
「知っていますよ」
「そうか。小原が捕って、喋ったんだな。だが、大野木は、君には、見つけられないよ」
「何処にいるんです？」
「どうなんだ？　取引きに応じるのかね？」
「私は、刑事ですよ」
「刑事だって、人間だろう。自分の利益を考えたっ

て、構わん筈だよ」
と、浦辺は、いうのだ。
「あなたは、構わないかも知れませんが、私は、出来ませんよ。悪徳警官には、なりたくないんです」
「大人になれよ。大野木三郎に、金をつけてもいい。五百万だ。どうだね？」
「今、何処にいるんです？」
「取引きに応じるのかね」
「あなたを逮捕します」
と、十津川はいった。とたんに電話が、切れてしまった。
十津川は、ロビーに取って返した。
浦辺が、空港にいるに違いないと、確信していたからである。
亀井を、見つけて、
「どうした？　浦辺はいたか？」
「まだです」
「早く見つけるんだ。空港にいる筈だ！」
と、十津川は、怒鳴った。
亀井の持っているトランシーバーが、鳴った。
「浦辺がいました！　喫茶店Aの近くです。すぐ、来て下さい！」
と、トランシーバーに、西本の大声が、飛び込んできた。
十津川と、亀井は、ロビーの人混みをかきわけるようにして、Aという喫茶店のある方へ、急いだ。
日下の姿が見えた。
「タクシーのりばの方です！」
と、日下が、走りながら、叫ぶ。十津川と、亀井も、日下と一緒に、駈けた。
タクシーのりばに出たが、浦辺も、西本も、いない。
また、トランシーバーが、鳴った。
「車で、逃げようとしています。白のブルーバード

です。追いかけます！」
と、西本が、叫ぶ。
十津川と、亀井も、とめておいたパトカーに走った。
日下も、一緒に乗せて、走り出した。今度は車の無線に、西本が、連絡してくる。
「浦辺のブルーバードは、国道51号線に入って、千葉に向っています！」
と、いう。
リア・シートの日下が、関東地方の地図を、一生懸命になって、広げている。
「車のナンバーを教えてくれ！」
と、十津川が、無線に向って、大声を出した。
西本が、ブルーバードのナンバーを、知らせてくる。
十津川は、そのナンバーを、総合司令室に報告した。
向うから、千葉県警に、協力を要請してくれるだろう。
午後三時を過ぎて、国道は、混み始めている。
十津川は、サイレンを鳴らした。
前方を走っている車が、左側に避ける。十津川たちのパトカーは、その隙間を、速度を上げて、突っ走った。
だが、なかなか、浦辺のブルーバードも、西本のパトカーも、見つからない。向うも、スピードを上げて、逃げているのだ。
「千葉市内に入りました！」
と、西本の声が叫ぶ。次の瞬間、
「くそ！」
と、西本が舌打ちした。
「どうしたんだ？」
「見失いました！」
「探せ！」

と、十津川は、怒鳴った。
十津川たちのパトカーも、千葉市内に、入った。
「今、何処だ？」
と、十津川が、無線に向って、きく。
「ＪＲ千葉駅の前です。あッ。ブルーバードを見つけました。しかし、浦辺は、乗っていません！」
「すぐ行く！」
と、十津川は、いった。
ＪＲ千葉駅前に着くと、西本が、血走った眼で、十津川たちを迎えた。
白いブルーバードがとまっているのが、見えた。
「探すんだ！」
と、十津川はいい、一斉に、パトカーから飛び出した。

第六章　再び越後・会津

1

刑事たちの必死の追跡にも拘らず、浦辺は、消えてしまった。

もちろん、浦辺のマンションにも、戻らなかった。

「なぜ、見つからないのか、不思議です」

と、亀井が、口惜しそうにいうのへ、十津川は、意外に、醒めた顔で、

「見つからないのが、当然かも知れないよ」

と、いった。

「なぜですか？」

「浦辺は、用心深い性格だから、失敗したときの隠れ家だって、ちゃんと、用意しておいたと、思うからだよ。仙堂に、用意させたんじゃないかな」

「なるほど」

「浦辺は、千葉市内に向ったとすると、その辺りに、隠れ家があるのかも知れない。或いは、隠れ家は、いくつも、用意されていることだって、考えられるよ」

「浦辺が、逮捕できないと、黒幕である仙堂を、どうすることも、出来ませんね。例のダンプの運転手は、浦辺に傭われたことは認めても、仙堂については、名前も知らないでしょうから」

と、亀井が、いった。

「その通りだよ。だから、何とかして、浦辺を、逮捕したい」

と、十津川は、力を籠めて、いった。

捜査本部には、関東地方の地図が、張られた。
だが、地図をいくら見つめても、浦辺の行方が、わかるものではなかった。
浦辺の友人、知人のところにも、刑事が、飛んで行ったが、彼は、現れなかった。
十津川は、その結果には、別に失望しなかった。最初から、浦辺が、友人や、知人のところに、身を隠す可能性は、少いと、思っていたからである。
問題は、仙堂なのだ。浦辺は、仙堂のために、すでに殺人まで犯している。莫大な金を貰っているだろうし、他にも、要求しているに違いない。
多分、十津川を殺したあと、浦辺は、海外へ逃亡することを計画していたのだろうし、現に、成田へ現れている。
仙堂だって、浦辺が逮捕されて、自分のことを喋られたら、困るだろう。そう考えれば、仙堂は、必死になって、浦辺を、助けようとするだろう。いや、いざとなれば、浦辺の口を封じようとするかも知れない。
「しかし、浦辺を殺すにしても、仙堂が、自分で、手を下すとは、思えませんね」
と、亀井が、いった。
「確かに、そうだな。浦辺だって、金で傭ったんだから、彼の口封じも、誰かに、やらせるだろう」
と、十津川は、いった。が、すぐ、自分の言葉を、自分で否定するように、
「しかし、金で傭った人間に、殺させると、また、その人間が、アキレス腱になるからね。だから、とにかく、浦辺を逃がすことに、全力をあげるだろう」
と、いった。
「逃がすといっても、日本国内の空港は、全部、おさえてしまいましたよ。港もです。浦辺が、日本国内から、海外へ出るのは、まず、不可能じゃありま

せんかね？」
　若い西本刑事が、首をかしげた。
「しかし、国内に潜伏するのは、短かい期間なら可能だが、長くは、出来ないよ。しかも、浦辺が捕まれば、その時点で、仙堂の命取りになるんだ。だから、何としてでも、海外へ出そうとする筈だ。恐らく、スイスの銀行にでも、浦辺のために、かなりの額の預金がしてあると思うよ」
　と、十津川は、いった。
「しかし、どうやって、脱出させるんでしょうか？」
「君は、どう思うね？」
　と、十津川は、逆に、西本にきいた。
「まず、正規のパスポートでは、名前がわかってしまいますから、偽造のパスポートを、作るんじゃありませんか？」
「それから？」
「空港、港以外から、脱出します」
「例えば、どこからだ？」
「そこまでは、わかりませんが――」
「密航か？」
「そうです」
「それが、いい線かも知れないな」
　と、十津川は、いった。
「しかし、警部。チェックが厳しいから、密航も、楽じゃありませんよ」
　亀井が、眉を寄せていう。
「ああ、わかってる。空港や、港からは、難しいだろう。だから、公海上で、脱出するんだ」
「ああ、そうだ。まず、日本の二百カイリの外へ出て、そこから、船に乗り込む。それ以外に、方法は、ないでしょう」
　と、西本が、いった。
「仙堂は、ヨットを持ってないかな？」

「クルーザーを持っていて、よく伊豆七島まで、釣りに行くと、聞いたことがあります」
「それを使うかも知れないな。公海上で、例えば、中東行のタンカーに乗せてしまえば、中東へ着くまでに、十日から、二十日は、かかるだろう。その間に、何とか考えられるし、われわれは、どうすることも出来ない。或いは、世界一周を考えているヨットに、乗せてしまう」
「乗せるでしょうか？」
「仙堂が、個人的に財政援助しているヨットなら、乗せるんじゃないかね」
「そういえば、仙堂は、そういうもののパトロンになるのが、好きでしたね。タレントを援助したり――」
「もし、そうしたヨットに、浦辺を乗せてしまえば、百日も二百日もかかって、世界一周をする。公海上を走ってる限り、偽造パスポートの人間が、船内にいても、処罰はされないし、逮捕もされないだろう。その中に、世間も、浦辺のことは、忘れてしまう。忘れた頃、何とかして、海外へ逃亡する。こんなことも、考えているんじゃないかな。もちろん、小さなヨットに、余分の人間を乗せることは出来ないから、かなり、大きなヨットだと思うね」
「そんなヨットが実在するかどうか、調べてみます」
と、亀井が、いった。
刑事たちが、手分けして、調べにかかった。出入国管理事務所に聞き、ヨット協会に問い合せた。
その結果、三日前に、五人乗りのヨットが、三浦半島の油壺から、世界一周の旅に出発していることが、わかった。予定では、一年かけて、また、油壺に帰港することになっている。
「船の名前は、セント・キャッスル号です」
と、亀井が、ニヤッと笑って、十津川に、報告し

た。
「仙堂を、無理に、英語にしたか？」
「そうです。仙堂が、資金を提供して、建造されたヨットです。船内に、七つのベッドがある、豪華ヨットだといわれています」
「それなら、もう一人ぐらい増えても大丈夫だな」
「それに、本当は、十日後に出港する予定だったのに、急遽、一週間繰りあげて、出港したそうです」
「現在、どの辺りにいるんだ？」
「三宅島近くだそうです」
「それなら、モーターボートで、追いつけるね」
「乗せてしまえば、あとは、どうにでもなるんじゃありませんか。公海で、漂流中に救助したということにでもすれば、怪しまれませんし、向うで上陸も、許されるかもしれません」
と、亀井が、いう。
「仙堂のボートは、何処にあるんだ？」
「同じ油壺に、繋留されていることになっているんですが、調べたところ、現在油壺には、見当らないそうです」
と、西本がいった。
「大きなボートなのか？」
「十二人乗りのクルーザーで、百馬力のエンジンが二基ついていて、高速が出るそうです」
「大野木も、そこに、かくまわれているか、監禁されているんだろう。だから、私には、見つけられないし、いつでも、引き渡せるとも、浦辺は、いっていたんだ」
と、十津川は、いった。
「浦辺も、そのクルーザーの中に、隠れているのかも知れませんね。とすると、すでに、三宅島に向っているんじゃありませんか」
と、亀井が、いう。
「すぐ、海上保安庁に連絡して、そのクルーザー

と、セント・キャッスル号を、探して、押さえて貰おう」

十津川は、大きな声で、いった。

「われわれは、どうしますか？」

「ヘリで、三宅島へ、飛ぼう。この手で、浦辺を、捕えたいんだ」

二人は、警視庁航空隊に急行し、大型ヘリコプターに、乗り込んだ。

こちらの想像どおりなら、浦辺を乗せたクルーザーは、三宅島に向って、航行中だろう。

そして、世界一周のヨット「セント・キャッスル号」に乗ってしまったら、公海上では、逮捕できなくなってしまうだろう。

まだ、朝は早い。

海上に出ると、海面が、朝陽を受けて、きらきら光っている。

じっと、見つめていると、眼が痛くなってくる。

それでも、十津川と、亀井は、双眼鏡で、海上を見つめた。

大島を通過した。

海上に、ヨットが二つ、三つと、浮んでいる。最近八丈島あたりまで、ヨットで行く人が、増えてきている。

夜明け前に、出港している巡視船「みうら」が、眼下に、見えた。

「みうら」は、全速力で南下している。しかし、間に合うかどうか、わからない。

伊豆七島の他の島々が、見えては、後方に消えて行った。

三宅島空港に着陸すると、燃料を給油して、再び、舞いあがった。

ヨット「セント・キャッスル号」と、クルーザー「セイントⅠ世号」を見つけるためである。

どちらも、大きな船の筈なのだが、広大な海の上

では、ただの点でしかない。その上、海面が、ちりめん状に、小さく波立って、見えにくい。

パイロットが、高度を下げてくれた。

無線で、油壺にあるヨット協会を呼び出し、「セント・キャッスル号」から連絡がないかと、聞いてみた。

答は、昨夜おそくから、無線機の故障か、連絡がとれなくなっているという。もちろん、嘘だろう。現在位置を知られるのが嫌で、無線交信を止めてしまっているのだ。

浦辺を、乗せた、クルーザーとの会合場所は、すでに決めてあるに違いない。

十津川の乗ったヘリは、レーダーで、二隻の船を探した。だが、波頭や、イルカの群れが、レーダーに、捕えられるだけで、なかなか、肝心の船が、つかまらない。

いったん、空港に帰り、一時間の休みをとった。

また、飛び上がる。

やっと、巡視船「みうら」が、到着した。ヘリと海上の巡視船の間で、無線交信が、始まった。

海上が、うす暗くなり始めた時、「みうら」から、「問題のクルーザーを発見！」

の連絡が入った。

巡視船と別の海域を捜索していたヘリコプターは、急遽、指定された海上に、戻った。

眼下に、黒いシルエットになった船らしきものが見える。

強力な探照灯のスイッチが入り、光芒が、船を、捕えた。

真っ白なクルーザーだった。

ヘリが、低く降下して、船名を確認する。間違いなく、「セイントI世」の文字が、読めた。

「こちら、警視庁。セイントI世号は、直ちに、停船せよ！」



と、マイクで、呼びかけた。
だが、眼下のクルーザーは、スピードを、ゆるめようとしない。
十津川は、双眼鏡で、「セイントⅠ世号」の前方を見た。
セールを張った大型のヨットが見えた。セールが、下ろされていく。
停船したヨットに、クルーザーが、接近していく。浦辺と大野木を乗せ、ヨットが、公海上に出ていれば、もう、捕まる心配はないと、考えているのだろう。
「セイントⅠ世号」が、ヨットの傍で、停船した。
「セイントⅠ世号」から、ゴムボートが、おろされた。それに、二人の人間が、乗り込むのが、見える。
巡視船「みうら」は、全速力で近づいているが、ゴムボートが、ヨットに二人の人間を運んでしまうかも知れない。
「少し、荒っぽくやりますよ」
と、ヘリのパイロットが十津川にいった。
ヘリが、高度を下げて行く。
ヘリの回転翼が巻き起こす風に、「セント・キャッスル号」が、大きく傾くのが見える。
海上は、波立ち、二人の人間の乗ったゴムボートが、動けなくなった。
二人の人間は、ボートの底にうつぶせになって、風圧から、身を守っている。
巡視船「みうら」の船影が、近づいてくるのが、見えた。
クルーザー「セイントⅠ世号」が、まず、逃げ出した。ヨットも急に、セールを張って動き出した。
ヘリが、ゴムボートを、押さえ続ける。巡視船「みうら」が、ゴムボートに接近するのを見届けてから、ヘリは、上昇した。

「二人を、三宅島へ連行する」
と、いう「みうら」からの連絡を聞いてから、ヘリは、安心して、三宅島空港へ戻ることにした。
空は、うす暗くなり、三宅島も、すでに、シルエットになってしまっている。
「助かりましたよ。あれ以上、とどまっていたら、燃料切れになって、われわれが、巡視船に救助されるところでしたよ」
と、パイロットが、ほっとした顔で、十津川に、いった。

2

空港に着くと、十津川と亀井はすぐ、三宅島警察署に、向った。
二人が、着くと、署の中が、異様な空気に包まれている。救急車も、駈けつけてきた。
「何があったんですか？」
と、十津川が、きくと、署長が、青い顔で、
「巡視船が連れて来た二人の男の片方が、死にかけています」
「死にかけてるって、どういうことですか？」
「突然、苦しみ出しましてね。救急車を呼んだんですが、脈が、消えてしまっています」
「そんなバカな！」
と、十津川は、思わず、大声を出した。
奥に行くと、大野木が、担架にのせられているのが見えた。のぞき込むと、手足は、硬直して、顔は、土気色である。
浦辺は、その傍で、ニヤニヤ笑いながら、見守っている。
十津川は、むかついて、浦辺に向い、
「あんたが、殺したのか？」
「私が？　私は、何も知らんよ。急に、こんな風に

なったんだ」
「信じられないね。口封じに、毒でも飲ませたんじゃないのか？」
と、十津川は、浦辺を、睨んだ。
担架の上の大野木の脈を診、瞳孔を診ていた救急隊員が、小さく首を横に振った。
「駄目ですか？」
と、亀井が、きく。
「手おくれですが、一応、病院に運びます」
という救急隊員の声が、はね返ってきた。
「毒物の服用ですか？」
十津川が、きいた。
「と、思いますね」
「あんたが、飲ませたのか？」
と、十津川は、また、浦辺を睨んだ。
「私は、何も知らんよ。心臓発作でも起こしたんじゃないのかね？」
浦辺は、平然としていた。
救急隊員が、大野木を運んで行った。明らかに、口封じに、殺したのだと、十津川は、思った。多分、毒物入りのカプセルでも、飲ませたのだろう。
「どうかね？　私は、まだ、取引きをしてもいいと思っているがね」
と、浦辺が、十津川の顔を、のぞき込むように見た。
「何の取引きだね？」
「大野木のことさ。彼が死んでしまったら、君の無実を証明する人間は、いなくなるよ。私は、君のために、証言する気はないからね」
と、いって、浦辺は、また、ニヤッと笑った。
「私のために、証言してくれなくてもいい。あんたには、仙堂の犯行を、証言して貰いたいんだ。仙堂の指示で、私を罠にかけたんだろう？」
「そこで、取引きだがね」

「何をいいたいんだ？」
「大野木の証言を、ちゃんと、テープにとってある。君を、罠にかけたことを、自供したテープだよ。私を、海外に逃がしてくれたら、そのテープを渡すが、どうかね？　それを使えば、君が欲しがっている仙堂の逮捕だって、出来ると思うがねえ」
と、浦辺は、いった。
「自分が、逃げるためには、ボスの仙堂も、売るということかね？」
十津川が、眉をひそめて、きくと、浦辺は、小さく肩をすくめて、
「何を、子供みたいに、怒っているんだ？　私一人ぐらい、取り逃がしたって、どうってことはないだろう？　その代りに、君の濡れ衣は、晴らせるし、黒幕の仙堂も、逮捕できるんだ。こんな、おいしい話は、ないんじゃないかね？」
「あんたも、現職の頃、そんな汚い取引きを犯人と、やっていたのかね？」
と、十津川が、いうと、浦辺は、直接、答えず、
「私は、総監賞を、何度も、貰っているよ。そして、狙った犯人を、逃がしたことはないんだ」
「それも、デッチあげで、犯人を、作ったんじゃないのか？」
「私の逮捕した犯人は、全員、自供しているよ」
と、浦辺は、いった。
「拷問も、やったのか？」
「何を、そう、カッカしているのかね？　刑事だって、有利な取引きは、喜んで、するものだよ」
と、浦辺が、さとすようないい方をした。
十津川は、顔を赤くして、
「あんたに、いっておくが、私は、取引きは、絶対にしない。それに、あんたみたいな男は、どんなことをしても、刑務所に、送り込んでやる」
「話のわからん男だな。私が、協力しなければ、仙

堂は、逮捕できんよ」
「それは、どうかな」
と、十津川は、わざと、笑って見せた。とたんに、浦辺の顔に、不安の色が、のぞいた。

3

大野木は、病院に運ばれたが、そこで、死亡が、確認された。医者の話でも、毒物死だろうと、いう。
犯人は、もちろん、浦辺に、決っている。
恐らく、大野木は、何か持病があって、カプセルに入った薬を常用していたのだ。浦辺は、そのカプセルに、毒物を入れておいて、捕まる寸前に、飲ませたに違いない。
その浦辺は、十津川が、取引きを拒否してから、黙秘を、続けていた。
「テープの話は、本当なんでしょうか？」
と、亀井は、十津川に、きいた。
「大野木の自供を録音したというテープかね？」
「そうです。あれは、はったりだったんじゃありませんかね。少しでも、自分が、助かりたいものだから、いい加減なことを、いったんじゃないかと、思うんですが」
と、亀井が、いう。
十津川は、小さく頭を横に振った。
「いや、あの男は、慎重な人間だよ。大野木が、裏切らないように、彼の自供をテープにとって、持っていたことは、十分に、考えられるんだ」
「しかし、彼の所持品の中に、テープなんか一本もありませんでしたが」
「わかってる。だから、何処かに、保管してあるんだ」
と、十津川は、いった。

「それが見つかれば、警部の濡れ衣を、晴らせますね」
「ひょっとすると、他にも、浦辺は、保管してあるものがあるかも知れない」
「と、いいますと？」
「浦辺は、海外に、逃亡しようとしていた」
「そうです」
「海外生活で、一番、必要なのは、金だ。彼は、すでに、かなりの金を仙堂から貰ってるだろうが、海外にいて、いつでも、仙堂から、金を送らせるための用意をしてあるんじゃないかな」
と、十津川は、いった。
「あり得ますね」
「例えば、仙堂の犯罪を証明するようなものを、誰かに預けておく。仙堂が、送金をためらったりすれば、その人間が、証拠を、警察に、持参するようにしてあるのかも知れない。その証拠の中に、大野木の自供テープも、入っているんじゃないかな」
「そうですね。浦辺は、用心深い男だから、そのくらいのことは、してあるかも知れません」
と、亀井も、肯いた。
十津川と、亀井は、浦辺を、東京に連行して、改めて、訊問したが、黙秘を、やめなかった。
十津川は、浦辺の関係者を、徹底的に、洗うことにした。
誰かが、大野木の自供テープや、仙堂に脅しをかけるものを、浦辺から、預っているに違いないと、思ったからである。
浦辺の女性関係を、まず調べた。
妻とは、とうに、離婚してしまっているし、子供もいない。
仙堂の会社で働くようになってから、金廻りがよくなったのか、新宿のクラブのホステスと、親しくなっていたことが、わかった。

だが、その女は、他にも、男がいて、大事なことを、頼むような信頼は、浦辺は、置いていなかったろうと、考えられた。

念のために、彼女に、「殺人の共犯」という脅しをかけてみたが、ただ、びっくりし、怯えるだけで、何の手応えもなかった。

「浦辺が、信用している人間じゃなければならないんだよ」

と、十津川は、いった。

「そんな人間が、いるでしょうか？　彼自身、疑い深い男ですから、誰かを、信用することなんか、なかったんじゃありませんか？」

と、亀井が、いう。

「しかし、警察にいた頃は、名人気質だとかいわれて、彼のことを、尊敬している刑事も、多かったんだよ」

「それは、そうかも知れませんが――」

「それかも知れないな」

「刑事ですか？」

「まさか。現職の刑事が、いくら、浦辺を尊敬していても、犯罪の片棒は、担がんだろう。現職時代に、浦辺の下で働いていて、今は、民間にいる人間だよ」

と、十津川は、いった。

「調べてみましょう」

と、亀井が、いった。

調べるのは、さほど、難しくはなかった。浦辺の下で働いていて、彼が辞めたあと、警視庁を退職した人間は、限定できるからだった。

かつて、浦辺の部下で、現在、警視庁を辞めている人間は、五人だった。

刑事時代の経験を生かして、私立探偵を始めた者もいれば、警備会社に、再就職した者もいる。故郷に帰って、家業を継いだ者もいた。

そうした元刑事たちの中で、十津川が、マークしたのは、久保田という三十六歳の男だった。

久保田は、五年間、浦辺の下で働き、浦辺が辞めると、その一ヵ月後に、辞職し、自分で、興信所を開いた。

十津川が、注目したのは、この久保田興信所が、仙堂の会社の仕事を、何回も、引き受けていることだった。

もちろん、社長の仙堂が、久保田に、仕事を依頼したとは思われない。部長の浦辺が、依頼していたのだろう。それは、二人が、警察を辞めてからも、ずっと、つき合いがあったことを意味している。

十津川は、亀井と、久保田興信所に、出かけて、久保田に、会った。

刑事時代の写真を見ると、痩身で、顎のとがった青年だが、今は、すっかり、太っていた。

「浦辺さんのことで、話がありましてね」

と、十津川は、久保田に会うなり、いった。

「浦辺さんが、どうしたんですか？」

久保田は、探るような眼で、十津川を見た。

「海外へ逃亡しましたよ」

と、十津川が、いうと、案の定、久保田の顔に、ほっとした表情が、浮んだ。

十津川は、苦笑して、

「やはり、あなたには、海外へ逃亡することは、話していたんですね？」

と、いった。とたんに、久保田の顔に、今度は、狼狽の色が走って、

「何のことですか？」

「本当のことをいうと、浦辺さんは、逮捕しました。殺人容疑でね」

「――――」

「今日、われわれが、ここへ来たのは、あなたを、その共犯で、逮捕したものか、それとも、捜査の協

力者として、お礼をいうべきなのか、わからなかったからですよ」

と、十津川は、いった。

「それは、どういうことですか？」

と、久保田が、きく。

「わかっている筈ですよ。そのどちらかを決めるのは、あなた自身だ。われわれに、協力するか、それとも、浦辺容疑者と、運命を共にするか、決めて下さい」

「私は、何もやっていない」

「しかし、あなたも、刑事だったから、わかっている筈です。殺人を証明できるものを持っていながら、それを隠すということが、どんな罪になるのかをね。私としても、元刑事の犯罪人を、二人も、出したくないんだ。浦辺一人で沢山だ」

と、十津川は、吐き出すように、いった。それは、久保田に聞かせるための言葉ではなく、本音だった。

それを、久保田も、感じ取ったのだろう。急に、肩を落として、

「私だって、この年齢になって、犯罪者になりたくはない」

「それなら、われわれに、協力して下さい。浦辺から預ったものを、渡してくれませんか」

と、十津川は、丁寧に、いった。

久保田は、キャビネットの引出しを開け、封をした大きな茶封筒を取り出して、十津川の前に置いた。

「これを、浦辺さんに、預ったんですが、中に、何が入っているか、知りません。本当ですよ」

と、久保田は、甲高い声で、いった。

十津川は、微笑した。

「私も、そう思いますよ。あなたは、嘘をつける人じゃありません」

「そうです。中身を知っていれば、私は、警察に届けていますよ」
「そうでしょうね。これは、あなたの方から、自発的に、警察に届けたことにしておきますよ」
と、十津川がいうと、久保田は、やっと、ほっとした表情になった。
十津川と、亀井は、捜査本部に戻って、封筒を開けた。
最初に出て来たのは、録音テープが、二本である。その一本は、大野木の告白を録音したものだった。
もう一本は、浦辺が、仙堂との電話を、録音したものである。
十津川と、亀井は、それを、何回も聞いた。

4

十津川は、そのテープ二本を、三上本部長のところに持っていって、聞いて貰った。
「改めて、浦辺の逮捕状を出して下さい」
「君に対する殺人未遂の他に、大野木に対する殺人教唆かね？」
「そうです。大野木を毒殺したのも、浦辺だと思いますが、今のところ、証明は、できません」
「このテープに入っている声が、大野木と、浦辺と、そして、仙堂であることは、間違いないんだろうね？　それが違っていたら、大変なことになるよ」
と、三上は、まだ、慎重ないい方をした。
「証人は、何人でも連れて来ますよ。それに、このテープを預っていた久保田元刑事の宣誓書も、とって来てあります。大事なものだから、誰にも渡すなと、浦辺にいわれたという宣誓書です」
と、十津川は、いい、署名、押印したものを、三

上に、見せた。
「久保田というのは、浦辺の下で働いていた刑事だな？」
「そうです。浦辺のことを、尊敬していた人間です」
「その男が、最後には、浦辺を、裏切ったということか」
「久保田は、警視庁を辞めて、第二の人生を、歩いています。その新しい人生まで、失いたくはなかったんだと思いますよ」
と、十津川は、いった。
「そうか」
と、三上は、肯いてから、急に、小さく、溜息をついて、
「これが、公けになったら、マスコミは、元刑事の犯罪として、書き立てるだろうね。前にも、元刑事が主犯の犯罪があって、私は、頭を下げ続けたんだよ」
「よく覚えています。土地の売買に絡んだ殺人事件でしたね」
「ああ。そうだ。また、頭を下げなければならんのかと思うと、憂鬱になってくるよ」
「申しわけありません」
「君が、謝ることはないんだが――」
「私が、仙堂に恨まれたのが、原因ですから」
「そうだ。その仙堂を、逮捕できるのかね？　このテープで」
三上が、十津川を見つめて、きいた。
「それは、仙堂に対する逮捕令状を出して下さるかどうかに、かかっています」
と、十津川は、いった。
「このテープを、仙堂に突きつけても、彼は、デッチあげだと、主張するかも知れんよ」
「テープの中で、浦辺は、何度も、『仙堂さん』と、

呼びかけています。本来なら『社長』と、いうべきなのに、わざと、そういっているのは、明らかに、浦辺が、このテープを、ゆすりの手段に使おうと考えて、したことだと思っています」

「しかし、君は、浦辺じゃないんだ。浦辺なら、仙堂のことをよく知っているし、現実に、彼の下で、働いていた。彼なら、このテープに入っている声は、仙堂に間違いないといい切れるし、仙堂も、反論は、出来まい、だが、君は、仙堂のことはよく知らんし、関係もない。その君が、この声は、仙堂に間違いないと断定しても、相手が否定した場合、どうするつもりだ。証明は、難しいんじゃないのかね？」

と、三上が、きいた。

「確かに、難しいです」

「それでは、逮捕令状は、無理だな」

と、三上は、いう。

「二時間後に、もう一度、お願いに来ます」

と、十津川は、いった。

「二時間？　その間に、何か出来るのかね？」

「わかりませんが、とにかく、二時間、待っていて下さい」

と、十津川は、繰り返した。

十津川は、三上本部長の部屋を出ると、留置場から、浦辺を出し、屋上に連れて行った。

梅雨特有の厚い雲が、空を覆っていて、陽は、射していなかった。

やたらに、蒸し暑い。

十津川が、黙って、煙草を差し出すと、浦辺は、手錠のまま、それを受け取って、口にくわえた。

「今度は、ここで、訊問かね？」

と、浦辺は、煙草をくわえたまま、きいた。

十津川は、自分もくわえて、まず、浦辺の煙草に火をつけてやった。

「昔、あんたの部下だった久保田から、録音テープを受け取った」
と、十津川は、いった。
「あいつも、だらしのない男だな」
と、浦辺は、苦笑してから、
「それなら、もう、私に用はないだろう。あのテープがあれば、私の有罪は、立証できるし、君も、無実が、証明されるからな」
「しかし、仙堂の有罪が、立証できない」
「そうか。あのテープを、法廷に持ち出しても、仙堂が、否定すれば、テープの中の声が、仙堂だと証明するのは、難しいか」
浦辺は、皮肉な眼つきをした。
「あなたが、協力してくれれば、仙堂は、逮捕できる。あなたは、仙堂の下で働いていたし、彼の命令を実行した。あなたの証言には、重味があるし、このテープの他にも、仙堂が、私を罠にかけようとしたという証拠を、持っていると、思っている」
「私に、協力しろというのかね？」
「して貰いたい」
と、十津川は、いった。
「代りに、何をくれるね？　海外へ逃がしてくれるかね？」
「取引きは、出来ない」
「それじゃあ、私も、君の手助けをする気はないね。さっさと、私を、送検したまえ」
と、浦辺は、いった。
「あなたは、警視庁で、いくつもの難事件を解決してきた優秀な刑事だった。今でも、あなたのことを、尊敬している刑事もいる」
「おい、おい。今度は、泣き落しか？」
「私は、あなたの良心に、訴えたいんだ」
「私はね、良心を、金に代えて生きて来た男だよ」
と、浦辺は、いった。

「私は、そうは、思わないな。良心の全部を、金に代えるなんてことが出来るわけがない。誇りもだ。今だって、あなたは、今の刑事には、絶対に負けるものかという自負を持っている筈だ」

と、十津川は、いった。

「十津川君。今、私が、君を、ここから突き落したら、どうなるかな？　突き落して、逃げたら？」

「そんな意味のないことを、あなたが、する筈がない。第一、私が死んで、喜ぶのは、仙堂だけだ」

「かも知れないな」

「私は、あなたのような、警察の誇りだった人が、法廷に立たされて、その原因になった人間が、のうのうと、ぜいたくな生活を続けるのが、我慢ならないんだ。口惜しいんだ！」

十津川は、声を荒らげて、いった。

浦辺は、急に、黙ってしまった。空を見上げて、

「雨が降りそうだ。そろそろ、留置場に、帰してくれないかね」

と、いった。

5

十津川は、諦めて、浦辺を、留置場に、戻した。

二時間かけて、何とか、浦辺を説得しようと思ったのだが、無駄とわかって、十津川は、二時間後、もう一度、三上本部長に、会った。

「浦辺の自尊心に訴えたんですが、駄目でした」

「やはり、駄目かね」

と、三上が、肩をすくめた時、電話が鳴った。

受話器を取った三上の顔色が、変った。

「浦辺が、自殺を図った？」

その言葉で、十津川も、青くなった。

十津川は、留置場に向って、走った。階段を駈けおりる。

看守が、真っ青な顔で、十津川を迎える。それを、突き飛ばすようにして、通路に倒れている浦辺を、抱き起こした。

浦辺の身体は、小刻みに、けいれんしている。

「救急車は？」

と、十津川は、看守をふり向いた。

「呼んでいます」

「何が、どうなったんだ？」

「それが、最初、今の心境を、書いておきたいというので、紙と、ペンを与えました。ずっと、書いていましたが、五枚ほど書いたところで、それを読んでくれというので、つい、眼を通している間に、ペンの先で、シャツを引き裂き、それをロープにして――」

「首を吊ったのか？」

「鉄格子に、引っかけまして。申しわけありません」

と、看守が、いう。

救急車が、駆けつけ、浦辺を、近くの病院に、運んで、行った。

十津川は、浦辺が書いたという五枚の便箋を、ポケットに突っ込んで、救急車に、同乗した。

すぐ、蘇生手段が、とられた。

だが、もう手おくれなことは、十津川にも、わかった。浦辺は、死ぬ気で、首に、ロープを巻きつけたのだ。助かるような不様なことはしない筈だった。

それでも、医者から、死にましたという言葉を聞くまで、十津川は、一縷の望みを、持とうとしていた。

十津川は、病院から、三上本部長に、電話をかけ、浦辺が、亡くなったことを告げてから、ポケットに入れてきた五枚の便箋を、取り出した。

細かい字で、丹念に書かれた告白だった。

〈私の良心など、もう、どこかに、消えてしまっている。しかし、自尊心だけは、かすかに残っていたらしい。私は、法廷に立たされ、あれこれ、検事に質問されるのは、真っ平だ。その揚げ句、どうせ、死刑の判決が下されるのなら、自分で、死刑を宣告した方がいい。

その置土産に、仙堂について、書いておこう〉

こんな書き出しの告白文には、去年の四月に起きた殺人事件のことが、書かれてあった。

去年の四月二十五日、仙堂は、伊東の別荘に、若いタレントの若宮圭吾を連れて行った。何かと、世話をしていたハンサムな二十歳のタレントである。

ところが、別荘で、ケンカになり、カッとなった仙堂が、猟銃で、若宮を射殺してしまった。そのあと、電話で、浦辺を呼びつけ、どうにかしてくれと、泣きついた。

浦辺は、死体の処置を、一千万円で、引き受け、遠く離れた奥多摩の山まで、車で運んで、埋めた。

〈――あとで、仙堂から、もう少し、ゆすってやろうと考え、死体は海に沈めたと、嘘をついておいた。血のついた彼の背広も、焼き捨てたと、嘘をついて、死体と一緒に埋めてある。そのシャツで一千万、死体で、五千万は、ゆすれると思っていたのだが、仙堂をゆするより、彼の会社で、出世した方がトクだと考えて、死体は、埋めたままにしてある。あれを、掘り起こせば、仙堂は、殺人容疑で、逮捕できる筈だ。それが、私の置土産だ〉

と、告白文には、書かれ、死体を埋めた場所も、書いてあった。

十津川は、亀井たち四人の刑事を連れて、奥多摩

に向った。
問題の場所に着いた時は、すでに、夜になっていたが、十津川たちは、懐中電灯を頼りに、雑木林の奥の一点を、掘り起こした。
一メートルを越す深さから、若い男の射殺体と、血で汚れた背広が、出てきた。
ダンヒルの茶色の背広には、仙堂のネームも、入っていた。
十津川たちは、それを、捜査本部に、運んだ。
「妙な具合になりましたが、これで、仙堂を、殺人容疑で、逮捕できると思います」
と、十津川は、三上本部長に、報告した。
「去年四月の殺人か」
「そうです。調べてみましたら、その頃、若宮圭吾の失踪事件が、起きていて、まだ、未解決になっています」
「仙堂は、当然、疑われたんじゃないのかね？」
「疑われましたが、浦辺が、仙堂のアリバイを証言してやって、助けています」
と、十津川は、いった。
「なるほどねえ。浦辺は、アリバイ作りまで、みてやったわけか」
「逮捕令状は、とれますね？」
と、十津川は、きいた。
「もちろん、取れると思うよ」
と、三上は、肯いてから、
「浦辺は、なぜ、自殺の前に、こんなことを、われわれに、教える気になったのかね？　気まぐれか、それとも、最後に、良心が、書かせたのかね？」
と、きいた。
「わかりませんが、私は、浦辺の心に、元刑事としての自尊心が、甦ったんだと、考えたいと思っています」
と、十津川は、いった。

若宮圭吾殺しの逮捕令状が出て、十津川と、亀井が、それを持って、深夜、仙堂の邸を訪ねた。

最初、仙堂は、十津川が、

「殺人容疑で、あなたを、逮捕します」

と、いった時、馬鹿にしたような、表情を見せた。

東山温泉の件や、岩室温泉の事件には、自分には、アリバイがあり、何とか、切り抜けられると、思っていたからだろう。どちらも、浦辺が、勝手にやったものだと、弁明するつもりだったのかも知れない。

去年の四月二十五日に、若宮圭吾を、殺害した容疑だと、十津川がいうと、仙堂の顔色が、変った。

6

新聞に、仙堂の逮捕が報道され、大きなショックを与えた。

大会社の社長が、殺人容疑で逮捕されたということもあるが、それ以上に、動機が、社長の美青年愛好癖にあったらしいということだったからである。

もう一つ、マスコミが、大きく取り上げたのは、浦辺のことだった。警察としては、触れられたくない問題だったが、避けては、通れない。

元警視庁刑事の犯行であり、しかも、留置場で自殺したということが、注目されたのだ。

意地の悪い新聞は、浦辺に、いろいろと喋られては困るので、留置場の看守が、自殺をわざと、見逃がしていたのではないかと、書いた。一応、抗議したが、自殺してしまったのは本当だから、弁解の余地のないことだった。

仙堂は、連行されてから、しばらくの間、黙秘を続けたが、それは、強気の態度というよりも、逮捕されたことへの動揺のため、訊問に対して、どう応

えていいか、わからないらしかった。
その証拠に、落ち着いてくると、十津川の訊問に対して、意外に、すらすらと、自供を始めた。
その間、十津川は、仙堂の声をテープにとり、浦辺が、残していったテープにあった仙堂の声と、声紋を比較することも、忘れなかった。
もちろん、声紋は一致した。浦辺との電話で、十津川を、罠にはめるように、指示していた男の声は、仙堂のものと、確認されたのである。
仙堂の起訴の決った日に、十津川は三上部長に、呼ばれた。
「これから、すぐ、福島と、新潟に、行って来たまえ」
と、三上が、いう。
「しかし、事件は、もう終りましたが」
「だが、福島と、新潟の二つの県警では、まだ、捜査本部を解散していないと、いっている」
三上が、難しい顔で、いった。
「それは、つまり、まだ、私が容疑者ということですか？」
「そうだよ。私としては、事件の経過を、両県警本部に説明したんだが、向うにも面子があるからね。君が、直接、行って、君自身の口から、説明しないと、向うも、納得しないと思うんだよ」
と、三上は、いった。
十津川は、微笑して、
「わかりました。向うの気持も、よくわかります。私を、容疑者と見ながら、私に、捜査するチャンスを与えてくれたことに感謝して、お礼を、いって来ます」
「警視庁としての説明と、感謝は、すでに、両県警に伝えてあるから、あとは、君が、個人的に、向うの了解を得ればいい。そうだ。四日間、休暇をとりたまえ」

と、三上は、いった。
「両県警への用なら、二日で、十分です」
「あとの二日は、ゆっくり、温泉で、休んで来たまえ。どちらも、温泉で起きた事件だからね」
三上にしては、珍しく、ニッコリ笑って、いった。
十津川は、いわれた通り、四日間の休暇をとり、浅草から、特急「スペーシア」に乗って、まず、会津若松に向った。
車内で、じっと、車窓に流れる景色を見つめていると、いやでも、今度の事件の最初の会津行きのことが、思い出された。
罠とわかっていながら、特急「スペーシア」に乗った時のことがである。正直にいって、どんな罠が待ち受けているのかわからず、不安だった。
五月の中旬だったのが、今は、六月に入り、典型的な梅雨空が、続いている。今日も、空は、どんよりと、重い。
(下手をすると、今頃、留置場に入って、この梅雨空を見上げていたかも知れなかったんだ)
そんな思いが、十津川の脳裏をかすめていった。
会津若松に着いた時は、とうとう、雨が降り出してきた。その雨の中を、十津川は、まず、会津若松署へ、足を運んだ。
三上のいった通り、まだ、捜査本部の看板が、出たままである。そこに、福島県警の意地のようなものが、感じられた。
十津川は、気を引き締めて、捜査本部長に会い、捜査の経過を説明し、合せて、自由に動くことを許可して貰ったことへの感謝の言葉を、口にした。
本部長は、初めて、ニッコリして、
「何が、あなたを助けたと思いますか？　犯人のミスですか？　それとも、あなたの推理力ですか？」
と、きいた。

「犯人のミスです」
と、十津川は、いった。
「どこに、犯人のミスがあったんですか？　私には、あなたを罠に落とす計画は、完全だったと思うんだが」
「犯人は、一つだけ、ミスを犯したんです。東山温泉で、殺人事件があり、犯人は、私ということになりました。それ自体は、成功だったんですが、犯人のミスは、被害者に、小坂井めぐみを選んだことです」
と、十津川は、いった。
「それが、なぜ、犯人のミスなんですか？」
「小坂井めぐみは、仙堂と関係のあった女で、それをタネに、仙堂から、金をせびっていたんです。仙堂としては、私を罠にかける際、その被害者に、小坂井めぐみを選べば、一石二鳥だと思ったんでしょう。その計画は、一見、うまくいったんですが、代りに、私たちは、小坂井めぐみを調べていって、仙堂に辿りついたんです。それから、仙堂をマークする捜査を進めることが、出来ました」
と、十津川はいった。
「そうだとすると、犯人が、もし、全く無関係な泊り客を殺していたら、どうなったと思いますか？」
と、本部長が、きく。十津川は、小さく、肩をすくめて、
「そうだったとすると、被害者から、仙堂に辿りつけませんから、まだ、捜査を続けていたと、思いますね。犯人が、欲張ったおかげで、私は、仙堂という男を知り、浦辺にも、辿りつけたんです。もし、あの時、行きずりの女性を、殺していたら、私は、なかなか、仙堂に辿りつけなかったでしょうし、浦辺にもです」
と、いった。謙遜でいっているのではなかった。正直な気持だった。

小坂井めぐみを調べていって、「センドウ」という名前に、ぶつかることが、出来たのである。

「仙堂は、欲張りすぎて、逮捕される破目になったというわけですか」

本部長が、面白そうに、いった。

「そうです。私の立場から見れば、ついていたことになります」

と、十津川は、いった。

その日、十津川は、東山温泉に、一泊することにした。三上部長の言葉を、有難く実行して、温泉を、楽しむことにしたのである。

今度の事件で、東山温泉にも、来ているが、その時は、自分が、殺人事件の渦中にいて、何とか、苦境を乗り越えたいと、思っていたから、温泉を楽しむどころでは、なかったのだ。

十津川は、夕食を旅館ですませると、散歩に出た。幸い、雨はあがっている。

十津川は、今度の事件のおさらいをするような気持で、小坂井めぐみが殺された神社まで歩いてみた。

事件を離れてみると、静かで、歴史のある神社だった。

あの夜、小坂井めぐみも、浦辺に誘い出されて、ここにやって来たのだろう。そして、大野木に、殺されてしまったのだ。十津川を、罠にかけるためにである。

しばらく、神社の境内を歩いてから、旅館に戻り、ゆっくりと、温泉に入ってから、眠った。久しぶりの休みだった。

翌日、今度は、燕三条署に行き、同じように、捜査の経過を説明し、礼をいった。二本のテープは、コピーして持ってきたものを、聞かせた。

それで、こちらの警察も、了解してくれたが、刑事の一人が、

「すると、岩室で、渡辺ひろみを、殺したのも、浦辺ということですか？」

と、十津川に、きいた。

「浦辺が、自殺してしまったので、確証はありませんが、当然、彼か、彼に傭われた人間が殺した筈ですよ」

「なぜ、彼女まで、殺したんでしょうか？　十津川さんを罠にはめるのに、渡辺ひろみも、使ったので、口封じをしたんでしょうか？」

と、その刑事が、更に、きいた。

「それも、多少はあるでしょうが、浦辺は、渡辺ひろみに、私の犯行の目撃者という役目を与えてしまったことが、大きいと、思いますね。本当に、私が犯人とすれば、何とかして、目撃者を、消そうとする。だから、渡辺ひろみが、犯人に全く狙われないとなると、おかしくなってくるんです。だから、浦辺としては、渡辺ひろみを、殺すしかなかったんですよ。そうしないと、折角の罠に、ほころびが出来てしまうと、思ったんでしょう」

と、十津川は、いった。

「なるほど、それでよくわかりました」

と、刑事が、肯いた。

「別のいい方をすれば、渡辺ひろみを消したことで、私に対する罠は、完全なものになったんですよ。少くとも、浦辺や、仙堂は、そう考えた筈です」

と、十津川はいった。

7

十津川は、燕三条から、岩室に出て、あの時と同じ旅館に、入った。

この旅館にいる時、県警の刑事二人が、彼を逮捕しに押しかけて来たのである。

そのことがあるので、旅館の主人や、お手伝いは、びっくりしたような顔で、十津川を迎えた。
十津川は、半信半疑の顔でいる旅館の人たちに向って、事件の経過を説明し、テープの一部も、聞かせた。
それで、やっと、旅館の人たちは、十津川が、シロだとわかってくれたようだった。
「本当に、よかったですねえ」
と、旅館の主人は、笑顔でいい、お手伝いの女性も、
「おめでとうございます」
と、いってくれた。
旅館では、あの時と同じ部屋を、わざわざ、用意してくれた。
庭に続く広い和室である。まだ、夕食までに時間があるので、十津川は、庭下駄を突っかけて、庭を散歩した。
あの時は、ゆっくりと、庭を見るなどという余裕はなかった。今日、初めて、その気で、庭を歩くことが出来た。
立派な庭だと、初めて、気がついた。池の鯉を眺めたりして、戻ると、温泉に入った。二日続けて、温泉に入れる幸せを噛みしめながら、床に入る。
二日続けて、温泉で、のんびり過ごせるのは、刑事になってから、何年ぶりだろうか。三上部長は、あと二日、温泉で、ゆっくり休んで来いと、いってくれているのだ。
刑事にも、年間で、二十日間の有給休暇が与えられているが、都内で、事件が続発していて、まともに、休みをとれたことがなかった。
それが、四日間も、休めるのである。しかも、温泉で。
翌朝、いつものように、七時頃に、目ざめたが、今日は、休みなのだと思い出し、また、眠った。

その中に、自分の名前を呼ばれて、十津川は目をさました。が、まだ、夢うつつでいると、また、
「十津川さん」
と、呼ばれた。呼んでいるのは、どうやら、この旅館のお手伝いのようだった。
腕時計を見ると、すでに、午前十一時に近い。昨夜、明日の朝食の時間を聞かれて、久しぶりに、ゆっくり眠りたいので、朝食はいらないと、いってある。だから、そのことで、起こしに来たのではないだろう。
布団の上に、起きあがって、
「何ですか？」
と、襖越しに、きいた。
「お客さまが、いらっしゃってます」
「お客？」
「はい。亀井さんという方が、おいでになりました」
と、お手伝いが、いう。
「すぐ、通して下さい」
と、十津川は、笑顔になって、いった。
廊下に、足音がして、亀井刑事が、顔をのぞかせた。
「やあ。カメさんも、休暇を貰って、来てくれたのか」
と、十津川が、笑顔を向けると、亀井は、とんでもないというように、小さく、顔を横に振って、
「三上部長に、警部を、呼んで来いといわれて、来たんです」
「部長には、四日間、休みを貰ったんだ。珍しく、部長が、ゆっくり温泉に浸って来たまえと、いってくれてね」
「部長は、そんなことは、すっかり忘れてしまってますよ。世田谷で、一家五人殺しが起きたんで、すぐ、警部を、連れ戻せと、いわれたんです」

「やれやれ、また事件かね」
「部長には、警部が、こちらで、病気になったと、いっておきましょうか？」
「ありがたいが、すぐ、帰京しよう。とにかく、二日間は、のんびり出来たんだ」
と、十津川は、いい、立ち上った。

●初出

「週刊現代」'91年6月8日号～'91年11月23日号連載

越後・会津殺人ルート

一九九二年二月五日第一刷発行　一九九二年二月十五日第二刷発行

KODANSHA NOVELS

定価はカバーに表示してあります

著者―西村京太郎
© 1992 KYOTARO NISHIMURA Printed in Japan
発行者―野間佐和子

発行所―株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二―〇一

編集部〇三―五三九五―三五〇六
販売部〇三―五三九五―三六二六
製作部〇三―五三九五―三六一五

印刷所―凸版印刷株式会社　製本所―大口製本印刷株式会社
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。
ISBN4-06-181603-9（文三）

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

書下ろし本格トラベルミステリー
北列車連殺行　阿井渉介

書下ろし本格トラベルミステリー
火の湖（うみ）列車連殺行　阿井渉介

書下ろし本格トラベルミステリー
雪列車連殺行　阿井渉介

書下ろし本格トラベルミステリー
終列車連殺行　阿井渉介

書下ろし本格トラベルミステリー
列車消失　阿井渉介

書下ろし傑作トラベルミステリー
Y列車の悲劇　阿井渉介

書下ろし本格トラベル推理
赤い列車の悲劇　阿井渉介

書下ろし本格トラベル推理
銀河列車の悲しみ　阿井渉介

ユーモアミステリー
東西南北殺人事件　赤川次郎

ユーモアミステリー
起承転結殺人事件　赤川次郎

ユーモアミステリー
冠婚葬祭殺人事件　赤川次郎

ユーモアミステリー
人畜無害殺人事件　赤川次郎

ユーモアミステリー
純情可憐殺人事件　赤川次郎

ユーモアミステリー
結婚記念殺人事件　赤川次郎

長編ユーモアミステリー
三姉妹探偵団1　失踪篇　赤川次郎

長編ユーモアミステリー
三姉妹探偵団2　キャンパス篇　赤川次郎

長編ユーモアミステリー
三姉妹探偵団3　珠美・初恋篇　赤川次郎

長編ユーモアミステリー
三姉妹探偵団4　怪奇篇　赤川次郎

長編ユーモアミステリー
三姉妹探偵団5　復讐篇　赤川次郎

長編ユーモアミステリー
三姉妹探偵団6　危機一髪篇　赤川次郎

長編ユーモアミステリー
三姉妹探偵団7　駈け落ち篇　赤川次郎

長編ユーモアミステリー
三姉妹探偵団8　人質篇　赤川次郎

長編青春怪奇ミステリー
沈める鐘の殺人　赤川次郎

長編青春ミステリー
棚から落ちて来た天使　赤川次郎

長編青春ミステリー
ぼくが恋した吸血鬼　赤川次郎

長編ユーモアミステリー
秘書室に空席なし　赤川次郎

長編ユーモアミステリー
静かな町の夕暮に　赤川次郎

長編ミステリー
死が二人を分つまで　赤川次郎

長編ミステリー
微熱　赤川次郎

長編伝奇小説
剣王伝　麻倉一矢

新麻雀小説
ヤバ市ヤバ町雀鬼伝1　阿佐田哲也

新麻雀小説　ここが地獄の一丁目編
ヤバ市ヤバ町雀鬼伝2　阿佐田哲也

受賞作家自身によるHOWTO推理作家
推理作家製造学　入門編　姉小路祐

サラリーマン官能サスペンス
誘惑調査室　阿部牧郎

長編官能ピカレスク小説
誘惑魔　阿部牧郎

長編サラリーマン官能小説
誘惑夫人　阿部牧郎

サラリーマン官能小説
不倫の戦士たち　阿部牧郎

官能オフィスミステリー
深夜の顔　阿部牧郎

長編官能推理
オフィス街のエロス　阿部牧郎

トリックの名人が放つ読者への罠
花火と銃声　泡坂妻夫

書下ろし黄金の驚の秘密
義経埋宝伝説殺人事件　荒巻義雄

書下ろし家康埋宝伝説の謎
日光霊ライン殺人事件　荒巻義雄

書下ろし古代史ミステリー
黄河遺宝殺人事件　荒巻義雄

書下ろし古代史ミステリー
「マ」の邪馬台国殺紀行　荒巻義雄

書下ろし伝奇ミステリー
能登モーゼ伝説殺紀行　荒巻義雄

書下ろし本格推理・大型新人鮮烈デビュー
十角館の殺人　綾辻行人

書下ろし衝撃の本格推理第二弾！
水車館の殺人　綾辻行人

書下ろし驚愕の本格推理第三弾！
迷路館の殺人　綾辻行人

書下ろし戦慄の本格推理第四弾！
人形館の殺人　綾辻行人

究極の新本格推理
時計館の殺人　綾辻行人

新本格推理強力新人痛快デビュー
8の殺人　我孫子武丸

書下ろし新本格推理第二弾！
0の殺人　我孫子武丸

書下ろし新本格推理の怪作
メビウスの殺人　我孫子武丸

書下ろしソフィストケイティッド・ミステリー
探偵映画　我孫子武丸

書下ろし空前のアリバイ崩し
マジックミラー　有栖川有栖

長編推理&トリックの醍醐味
空中密室40メートルの謎　浅川　純

熱血・冒険ハードボイルド
地獄からの脱走　生島治郎

長編ハードボイルド推理
兇悪の警察　生島治郎

長編伝奇アクション
Dの鏡　北海道バトル篇　石井敏弘

長編伝奇アクション
Dの鏡2　東京インフェルノ篇　石井敏弘

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

KODANSHA NOVELS 講談社ノベルス

長編伝奇アクション
Dの鏡3 ニューヨーク死闘篇 石井敏弘

書下ろしハードボイルドミステリー
夢魔の嗤う夜 井上 淳

書下ろし新本格推理
ハムレットの殺人一首 岩崎正吾

大胆不敵なトリック 大型新人鮮烈デビュー
長い家の殺人 歌野晶午

書下ろし新本格推理第二弾!
白い家の殺人 歌野晶午

書下ろし新本格推理第三弾!
動く家の殺人 歌野晶午

書下ろし探険隊の黒い野望
シーラカンス殺人事件 内田康夫

名機「ゼニガタ」の脳細胞
パソコン探偵の名推理 内田康夫

書下ろし長編本格推理
江田島殺人事件 内田康夫

長編本格推理
漂泊の楽人 内田康夫

長編本格推理
琵琶湖周航殺人歌 内田康夫

戦略テクノ・サスペンス
B-1爆撃機を追え 大石英司

長編ハードボイルド
氷の森 大沢在昌

書下ろし新本格推理
霧の町の殺人 奥田哲也

書下ろし連続殺人事件
三重殺 奥田哲也

書下ろし長編異色推理
赤い雪崩 太田蘭三

書下ろし山岳渓流推理
破牢の人 太田蘭三

書下ろし山岳渓流推理
餓鬼岳の殺意 太田蘭三

書下ろし山岳渓流推理
南アルプス殺人峡谷 太田蘭三

書下ろし山岳渓流推理
木曽駒に幽霊茸を見た 太田蘭三

書下ろし山岳渓流推理
殺意の朝日連峰 太田蘭三

書下ろし山岳渓流推理
寝姿山の告発 太田蘭三

書下ろし山岳渓流推理
謀殺水脈 太田蘭三

時代エンタテイメント
葬が泣く 平手造酒異聞 太田蘭三

書下ろし山岳渓流推理
密殺源流 太田蘭三

書下ろし山岳渓流推理
殺人雪稜 太田蘭三

書下ろし新本格推理 一人六役の離れ技!
僕の殺人 太田忠司

書下ろし新本格推理
美奈の殺人 太田忠司

書下ろし新本格推理
昨日の殺人 太田忠司

書下ろし競馬ミステリー
あした天気にしておくれ 岡嶋二人

事件だ出番だ山本山コンビ
三度目ならばＡＢＣ　岡嶋二人

乱歩賞ＳＰＥＣＩＡＬ心理サスペンス
チョコレートゲーム　岡嶋二人

プロ野球情報戦ミステリー
ビッグゲーム　岡嶋二人

書下ろし国際冒険小説
スペイン灼熱の午後　逢坂　剛

愛のミステリー長編
逆光のなかの女　落合恵子

書下ろしサスペンス・ホラー
震えてララバイ　岡江多紀

書下ろし長編推理
螺旋館の殺人―『盗作のロンド』　折原　一

書下ろしミステリー・ロマン
仮面の火祭り　勝目　梓

復讐ハードミステリー
闇が裂ける　勝目　梓

長編ハードバイオレンス
殺し屋　勝目　梓

精選・情事の現場12
肉狩り　勝目　梓

長編エロティシズム＆バイオレンス
不倫の報酬　勝目　梓

長編バイオレンス・復讐と性
引き裂かれた夏　勝目　梓

鮮烈エロス＆ネオバイオレンス
炸裂　勝目　梓

長編エロス＆ハードアクション
はみだし者　勝目　梓

ハードバイオレンス＆エロス
炎　勝目　梓

長編サスペンス＆エロス
誘拐狂想曲（キッドナップ・ブッディ）　勝目　梓

書下ろし本格トリック犯人探し
裏六甲異人館の惨劇　梶　龍雄

書下ろし本格トリック犯人探し
鎌倉ＸＹＺの悲劇　梶　龍雄

書下ろし本格トリック犯人探し
奥信濃鬼女伝説殺人事件　梶　龍雄

書下ろし医学ロマン
美貌のメス　門田泰明

書下ろし医学ロマン
愛憎のメス　門田泰明

書下ろし医学ロマン
狂（きょうらん）瀾のメス　門田泰明

特命武装検事黒木豹介
さらば黒豹　門田泰明

特命武装検事黒木豹介
黒豹忍殺し　門田泰明

戦慄のサスペンス
人妻鬼　門田泰明

書下ろし超能力アクション
サイキック戦争1　笠井　潔

書下ろし超能力アクション
サイキック戦争2　笠井　潔

書下ろし長編サスペンス
悪の迷宮　加野　厚

新・パパは唐獅子牡丹
殴り込みだよ人生は　菊地昭典

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

書下ろしスーパー伝奇バイオレンス
妖戦地帯1 淫鬼篇　菊地秀行

スーパー伝奇バイオレンス
妖戦地帯2 淫凶篇　菊地秀行

長編超伝奇バイオレンス
妖戦地帯3 淫闘篇　菊地秀行

本格ホラー作品集
怪奇城　菊地秀行

ハイパー伝奇バイオレンス
キラーネーム　菊地秀行

スーパー伝奇エロス
淫蕩師1 鬼華情炎篇　菊地秀行

スーパー伝奇エロス
淫蕩師2 呪獣淫形篇　菊地秀行

長編ハードボイルド
鎖　北方謙三

書下ろしハード・バイオレンス
聖夜のテロリスト　国広佳秀

書下ろし新本格推理
聖なる死の塔　黒崎緑

長編スーパー伝奇
神州日月変[上][下]　栗本薫

乱歩賞SPECIAL 伊集院大介VS栗本薫
猫目石[上][下]　栗本薫

傑作ミステリー
伊集院大介の冒険　栗本薫

傑作ミステリー
伊集院大介の私生活　栗本薫

長編歴史ロマン
旅券のない旅　胡桃沢耕史

ニューヒーロー貴族探偵名推理
バロン探偵局　胡桃沢耕史

特命全権美少女探偵Gスカのニーナ
可愛い拳銃使い　胡桃沢耕史

特命全権美少女探偵Gスカのニーナ
女子高生は諜報員　胡桃沢耕史

痛快アクション&エンターテイメント
美人キャスターは殺し屋　胡桃沢耕史

書下ろしクラッシュ・ノベル
新宿純愛物語　桑原譲太郎

書下ろし純愛物語2
六本木戦争　桑原譲太郎

書下ろし純愛物語3
京都飛恋伝説　桑原譲太郎

書下ろし純愛物語4
大雪殉愛狂走曲　桑原譲太郎

国際ハイテクサスペンス
マサカド・レッスン　W・ケネディ　伊藤和子訳

書下ろし〈超能力者〉シリーズ1
超能力者狩り　今野敏

書下ろし〈超能力者〉シリーズ2
妖獣のレクイエム　今野敏

書下ろし〈超能力者〉シリーズ3
超人暗殺団　今野敏

書下ろし〈超能力者〉シリーズ4
復讐のフェスティバル　今野敏

書下ろし〈超能力者〉シリーズ5
裏切りの追跡者　今野敏

書下ろし〈超能力者〉シリーズ6
怒りの超人戦線　今野敏

書下ろし青春サスペンス&エロス
流浪（さすらい）期　小嵐九八郎

書下ろし青春カタルシスロマン
諏訪青春水滸伝　小嵐九八郎

書下ろし長編モダンホラー
死者はまどろむ　小池真理子

推理"単身赴任の男"
D支局長の事件簿　佐野　洋

乱歩賞SPECIAL　悪夢の将棋〈最高位戦〉
新・殺人の棋譜　斎藤　栄

長編本格推理　犯人探し
日美子の誘拐集団　斎藤　栄

犯人探し本格長編ミステリー
日美子の完全犯罪　斎藤　栄

タロット日美子長編本格ミステリー
鎌倉さざんか寺殺人事件　斎藤　栄

長編本格推理・日美子スペシャル
淡紅（うすくれない）の女の殺人　斎藤　栄

長編本格推理
夜明け　笹沢左保

長編本格推理
昼下り　笹沢左保

長編本格推理
夕暮れ　笹沢左保

ドライバー探偵夜明日出夫の事件簿
追越禁止　笹沢左保

書下ろし新本格推理仕掛け一杯のデビュー作！
思い通りにエンドマーク　斎藤　肇

読者に挑戦！百パーセントのフェアプレイ！
思いがけないアンコール　斎藤　肇

書下ろし掟やぶりのミステリー
思いあがりのエピローグ　斎藤　肇

書下ろしアクションファンタジー
魔法物語（上）黒い風のトーフェ　斎藤　肇

書下ろしアクションファンタジー
魔法物語（下）青い光のルクセ　斎藤　肇

書下ろし新本格推理
夏の死　斎藤　肇

書下ろしトラベル推理
花まつり殺人事件　斎藤　澪

書下ろしトラベル推理
炎まつり殺人事件　斎藤　澪

書下ろしサスペンス&推理
贋作師　篠田節子

書下ろしカゲキ美人署長・竜子警視正
真夜中の首領を追え　志茂田景樹

カゲキ美人署長・竜子警視正2
深夜プラスVIPの罠　志茂田景樹

カゲキ美人署長・竜子警視正3
リバーサイドの悪魔の館　志茂田景樹

書下ろし出世&アクション
サラリーマン裏太閤記　志茂田景樹

書下ろし出世&アクション
サラリーマン裏太平記　志茂田景樹

書下ろし出世&アクション
サラリーマン裏新撰組　志茂田景樹

書下ろし出世&アクション
サラリーマン裏忠臣蔵　志茂田景樹

書下ろし怪奇ミステリー
斜め屋敷の犯罪　島田荘司

KODANSHA NOVELS 講談社ノベルス

KODANSHA NOVELS 講談社ノベルス

書下ろし時刻表ミステリー
死体が飲んだ水　島田荘司

長編本格推理
占星術殺人事件　島田荘司

都会派スリラー
殺人ダイヤルを捜せ　島田荘司

長編本格推理
火刑都市　島田荘司

長編本格ミステリー
網走発遙かなり　島田荘司

四つの不可能犯罪
御手洗潔の挨拶　島田荘司

長編本格推理
異邦の騎士　島田荘司

書下ろし海洋冒険ロマン
裂けて海峡　志水辰夫

書下ろし冒険ロマン
散る花もあり　志水辰夫

書下ろし新本格推理
飛ぶ男、墜ちる女　白峰良介

アクション&エロス痛快海外サスペンス
裏切りのタヒチ　S・ジョンソン　森　洋子訳

近未来情報サスペンス
情断！　鈴木輝一郎

長編伝奇オカルトバイオレンス
超人類生誕秘録1 紅孔雀の巻　谷　恒生

長編伝奇オカルトバイオレンス
超人類生誕秘録2 紅小蛇の巻　谷　恒生

長編伝奇オカルトバイオレンス
超人類生誕秘録3 紅蓮の巻　谷　恒生

書下ろし女流剣士ロマン
雪姫七変化　谷　恒生

書下ろし女流剣士ロマン
雪姫 巨悪を斬る　谷　恒生

書下ろしアクション&トリック
津軽逆転の3重殺　鷹羽十九哉

書下ろしファントム・シリーズ1
ファントム強奪　竹島　将

書下ろしファントム・シリーズ2
人質空中輸送　竹島　将

書下ろしファントム・シリーズ3
鮮血の貴婦人　竹島　将

書下ろしファントム・シリーズ4
灼熱の女獣　竹島　将

書下ろしファントム・シリーズ5
空獣狂熱祭（くうじゅうカーニバル）　竹島　将

書下ろしファントム・シリーズ6
戦慄の女神　竹島　将

書下ろしファントム・シリーズ7
ファントム蒼空戦線　竹島　将

書下ろしファントム戦士伝説1
女獣戦線　竹島　将

書下ろしファントム戦士伝説2
熱空の女王　竹島　将

書下ろしファントム戦士伝説3
黒衣の略奪者　竹島　将

書下ろしファントム戦士伝説4
戦士誕生　竹島　将

書下ろしファントム戦士伝説5
英雄復活［上］　竹島　将

書下ろしファントム戦士伝説6
英雄復活「中」　竹島　将

書下ろしファントム戦士伝説7
英雄復活「下」　竹島　将

書下ろしファントム戦士伝説8
英雄戦線「上」　竹島　将

書下ろしファントム戦士伝説9
英雄戦線「下」　竹島　将

書下ろしファントム戦士伝説10
燃える戦線　竹島　将

長編本格推理
匣の中の失楽　竹本健治

長編ミステリー・ロマン
京都で消えた女　多岐川恭

書下ろし長編ミステリー・ロマン
長崎で消えた女　多岐川恭

書下ろし本格旅情ミステリー
仙台で消えた女　多岐川恭

乱歩賞SPECIAL　明治新政府の大トリック
倫敦暗殺塔　高橋克彦

怪奇ミステリー館
悪魔のトリル　高橋克彦

空前のスケール超伝奇SFの金字塔
総門谷　高橋克彦

長編本格推理
歌麿殺贋事件　高橋克彦

書下ろし歴史ホラー推理
蒼夜叉　高橋克彦

奇想天外の新本格推理
予告された殺人の記録　高原伸安

書下ろし長編伝奇
創竜伝1〈超能力四兄弟〉　田中芳樹

書下ろし長編伝奇
創竜伝2〈摩天楼の四兄弟〉　田中芳樹

書下ろし長編伝奇
創竜伝3〈逆襲の四兄弟〉　田中芳樹

書下ろし長編伝奇
創竜伝4〈四兄弟脱出行〉　田中芳樹

書下ろし長編伝奇
創竜伝5〈蜃気楼都市〉　田中芳樹

書下ろし長編伝奇
創竜伝6〈染血の夢〉　田中芳樹

書下ろし長編伝奇
創竜伝7〈黄土のドラゴン〉　田中芳樹

書下ろし本格推理&暗号
かぐや姫連続殺人事件　谷口敦子

妖艶怪奇な新本格推理
からくり人形は五度笑う　司　凍季

書下ろし新幹線トラベル推理
寝台超特急ひかり殺人事件　辻　真先

書下ろし北海道旅情ミステリー
幻の流氷特急殺人事件　辻　真先

青春トラブルミステリー
愛して盗んで　辻　真先

書下ろしトラベル推理
沖縄県営鉄道殺人事件　辻　真先

書下ろし鉄壁のアリバイ崩し
瀬戸内を渡る死者　津村秀介

書下ろし連続殺人のアリバイ崩し
京都着19時12分の死者　津村秀介

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

書下ろし 消えた死体とアリバイ崩し
新横浜発12時9分の死者　津村秀介

書下ろし 鉄壁のアリバイ崩し
大阪経由17時10分の死者　津村秀介

書下ろし 鉄壁のアリバイ崩し
松山着18時15分の死者　津村秀介

書下ろし 鉄壁のアリバイ崩し
小樽発15時23分の死者　津村秀介

長編トラベル推理
異域の死者 上野着17時40分の死者　津村秀介

長編本格推理
首を売る死体　鳥羽　亮

書下ろし 列島パニック長編
放射能獣X　友成純一

書下ろし 怪獣パニック長編
インカからの古代獣V　友成純一

書下ろし 鮮血のパニック長編
ネッシー殺人事件　友成純一

書下ろし 長編ミステリー&エロス
秘書室の殺人　豊田行二

書下ろし 長編伝奇ミステリー
時をさまよう恋人たち　鳥井加南子

書下ろし 歴史伝説ミステリー
南紀殺人海の密室　長井　彬

長編サスペンス&エロス
成城官能夫人　南里征典

長編官能サスペンス
武蔵野薔薇夫人　南里征典

書下ろし 長編官能サスペンス
麻布憂愁夫人　南里征典

書下ろし 長編官能サスペンス
自由ケ丘密会夫人　南里征典

書下ろし 長編官能サスペンス
赤坂哀愁夫人　南里征典

書下ろし 三四郎記者事件帖
特ダネ記者殺人事件　中津文彦

乱歩賞SPECIAL 奥羽八百年黄金伝説
伊達騒動殺人事件　中津文彦

書下ろし 長編旅情ミステリー
ラトビアの霧　中津文彦

書下ろし 新本格推理
消失！　中西智明

書下ろし 長編本格推理
下北の殺人者　中町　信

書下ろし 長編本格推理
津和野の殺人者　中町　信

長編青春サスペンス・ロマン
国境の女　夏樹静子

推理傑作集
女の銃　夏樹静子

長編鉄道推理
特急さくら殺人事件　西村京太郎

長編鉄道推理
四国連絡特急殺人事件　西村京太郎

長編鉄道推理
寝台特急あかつき殺人事件　西村京太郎

長編野球ミステリー
日本シリーズ殺人事件　西村京太郎

鉄道推理
L特急「ゆり」2号殺人事件　西村京太郎

長編鉄道推理
寝台特急「北陸」殺人事件　西村京太郎

乱歩賞SPECIAL 新トラベルミステリー
オホーツク殺人ルート　西村京太郎

鉄道推理
行楽特急ロマンスカー殺人事件　西村京太郎

長編新トラベルミステリー
南紀殺人ルート　西村京太郎

鉄道推理
特急「おき3号」殺人事件　西村京太郎

新トラベルミステリー
阿蘇殺人ルート　西村京太郎

新トラベルミステリー
日本海殺人ルート　西村京太郎

新トラベルミステリー
寝台特急六分間の殺意　西村京太郎

長編鉄道ミステリー
釧路・網走殺人ルート　西村京太郎

長編鉄道ミステリー
アルプス誘拐ルート　西村京太郎

傑作鉄道ミステリー
特急「にちりん」の殺意　西村京太郎

長編鉄道ミステリー
青函特急殺人ルート　西村京太郎

長編鉄道ミステリー
山陽・東海道殺人ルート　西村京太郎

傑作鉄道ミステリー
最終ひかり号の女　西村京太郎

長編鉄道ミステリー
富士・箱根殺人ルート　西村京太郎

長編鉄道ミステリー
十津川警部の困惑　西村京太郎

長編鉄道ミステリー
津軽・陸中殺人ルート　西村京太郎

長編本格ミステリー
十津川警部の対決　西村京太郎

鉄道ミステリー
十津川警部C11を追う　西村京太郎

最新長編鉄道ミステリー
越後・会津殺人ルート　西村京太郎

長編医学ハードロマン
癌病船　西村寿行

動物小説代表作
捜神鬼　西村寿行

長編国際冒険ロマン
赤い鯱　西村寿行

長編国際冒険ロマン
黒い鯱　西村寿行

長編国際冒険ロマン
白い鯱　西村寿行

長編国際冒険ロマン
碧い鯱　西村寿行

長編国際冒険ロマン
緋の鯱　西村寿行

長編国際冒険ロマン
遺恨の鯱　西村寿行

長編国際冒険ロマン
幽鬼の鯱　西村寿行

長編国際冒険ロマン
神聖の鯱　西村寿行

KODANSHA NOVELS 講談社ノベルス

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

生命賛歌ハードロマン長編
鬼狂い（ものぐるい） 西村寿行

長編バイオレンス
鬼の宴（あしおと） 西村寿行

長編バイオレンス
異常者 西村寿行

長編パニック&バイオレンス
癌病船応答セズ 西村寿行

長編大冒険ロマン
旅券のない犬 西村寿行

書下ろし爆笑ミステリー
ヴァージン家族 新津きよみ

書下ろし大好評爆笑推理
ヴァージン家族2 殺人デパートの巻 新津きよみ

書下ろし青春ミステリー
パソコン通信殺人事件 乃南アサ

書下ろし長編ミステリー
鍵 乃南アサ

書下ろし青春新本格推理激烈デビュー
密閉教室 法月綸太郎

豪華絢爛新本格推理の雄作
雪密室 法月綸太郎

新本格推理帰代の異色作
誰彼（たそがれ） 法月綸太郎

孤高の新本格推理
頼子のために 法月綸太郎

ネオ時代アクション
戦国魔火矢 羽山信樹

超大型新人歴史アクション
花月秘拳行 火坂雅志

書下ろし大型歴史アクション
花月秘拳行2 北斗黒帝篇 火坂雅志

書下ろし歴史伝奇ロマン
京都呪殺 火坂雅志

書下ろし本格推理・トリック&真犯人
十字屋敷のピエロ 東野圭吾

書下ろし渾身の本格推理
宿命 東野圭吾

書下ろし大トリック・アリバイ崩し
アリバイ特急十一の交叉 深谷忠記

書下ろし大トリック・アリバイ崩し
津軽海峡十一の交叉 深谷忠記

書下ろし大トリック・アリバイ崩し
寝台特急「出雲」十一の交叉 深谷忠記

書下ろし大トリック・アリバイ崩し
北津軽 逆アリバイの死角 深谷忠記

書下ろし長編歴史シンフォニックロマン
剣鬼幻々斎志楽 心ノ一 藤川桂介

書下ろし長編歴史シンフォニックロマン
剣鬼幻々斎志楽 心ノ二 藤川桂介

書下ろし長編歴史シンフォニックロマン
剣鬼幻々斎志楽 心ノ三 藤川桂介

長編ソフトボイルド推理
タイホされたし度胸なし 藤田宜永

書下ろしロマンティック・ミステリー
瓜先（つまさき） 牧南恭子

長編本格推理
殺人行おくのほそ道[上][下] 松本清張

長編サスペンス
湖底の光芒 松本清張

長編サスペンス
塗られた本　松本清張

長編時代推理
異変街道［上］［下］　松本清張

書下ろし本格推理！意外な結末
武蔵野殺人$\sqrt{4}$（ルート4）の密室　水野泰治

書下ろし本格推理&驚愕のラスト
奥多摩殺人3Wの逆転　水野泰治

書下ろし本格トリック推理
密室殺人講座　水野泰治

書下ろし古典に隠された暗号文
光源氏殺人事件　皆川博子

書下ろし怪奇幻想ホラー
聖女の島　皆川博子

書下ろしアリバイが崩れたとき戦慄の真相が！
殺人特急逆転の15分　峰隆一郎

書下ろし本格トラベルミステリー
殺人急行北の逆転240秒　峰隆一郎

書下ろし男と女のトラベル推理
西鹿児島発「交換殺人」特急　峰隆一郎

書下ろしトラベル推理
新潟発「あさひ」複層の殺意　峰隆一郎

書下ろし本格トラベル推理
東京ー上野3.6キロの完全犯罪　峰隆一郎

書下ろし本格トラベル推理
特急「富士」「はやぶさ」殺人交差　峰隆一郎

長編本格推理
捜査線上のアリア　森村誠一

乱歩賞SPECIAL 前代未聞の殺人プロジェクト
螺旋状の垂訓　森村誠一

長編サラリーマン推理
社（しゃど）奴　森村誠一

大手企業脅迫殺人事件
社賊　森村誠一

長編本格推理「行先不明列車」
銀河鉄道殺人事件　森村誠一

傑作ミステリー
暗渠の牧場　森村誠一

本格ミステリー犯人はこの中にいる
白夜の虹　森村誠一

ハードボイルド長編推理
狙撃者の悲歌　森村誠一

長編本格推理
明日なき者への供花　森村誠一

長編本格ミステリー
背徳の詩集　森村誠一

書下ろし本格推理
南海航路（らんぶ）殺人事件　本岡類

書下ろし究極のトリックミステリー
桜島100キロ殺人空路　本岡類

書下ろし長編トリック推理
奈良「ささやきの小道」殺人　本岡類

書下ろし本格トリック推理
陸奥こけし殺人事件　山村正夫

本格長編推理・酒呑童子伝説の謎
丹後半島鬼駒殺人　山村正夫

書下ろし伝奇本格推理
古代諏訪生贄伝説殺人　山村正夫

名探偵令嬢キャサリンの推理
ヘアデザイナー殺人事件　山村美紗

KODANSHA NOVELS 講談社ノベルス

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

長編本格推理 白猫怪死の謎
京都紫野殺人事件 山村美紗

長編本格推理 墜死した花嫁
京都新婚旅行殺人事件 山村美紗

ミステリー傑作集
愛人旅行殺人事件 山村美紗

長編本格トリック推理
京都再婚旅行殺人事件 山村美紗

税関検査官・陽子の推理
大阪国際空港殺人事件 山村美紗

長編旅情ミステリー
小京都連続殺人事件 山村美紗

長編ミステリー 真犯人は誰?
シンデレラの殺人銘柄 山村美紗

令嬢探偵キャサリンの推理
グルメ列車殺人事件 山村美紗

令嬢探偵キャサリンの推理
シンガポール蜜月旅行殺人事件 山村美紗

令嬢探偵キャサリンの推理
天の橋立殺人事件 山村美紗

旅情ミステリー&トリック
愛の飛鳥路殺人事件 山村美紗

最新傑作ミステリー
紫水晶殺人事件 山村美紗

長編本格推理
愛の立待岬 山村美紗

旅情ミステリー&トリック
山陽路殺人事件 山村美紗

長編時代伝奇ロマン
闇の太守 I 山田正紀

長編時代伝奇ロマン
闇の太守 II 御賢衆の巻 山田正紀

長編時代伝奇ロマン
闇の太守 III 梟雄の巻 山田正紀

長編時代伝奇ロマン
闇の太守 IV 桃源の巻 山田正紀

実録マージャン小説
伝説の雀鬼 柳史一郎

書下ろしユーモアミステリー
香港迷宮行 山崎洋子

書下ろし本格推理&暗号
「双子座」12文字の殺人 矢島誠

書下ろし本格推理&暗号
寝台特急「北斗星」O文字の殺人 矢島誠

伝奇スーパーアクション
黄金宮 勃起仏編 夢枕獏

伝奇スーパーアクション
黄金宮 II 真密編 夢枕獏

伝奇スーパーアクション
黄金宮 III 仏呪編 夢枕獏

書下ろしハイパー伝奇アクション
ぶった斬り 横溝美晶

殺意の匂い書下ろし推理
ピンクのおもちゃネコ殺人事件 ルディー和子

長編推理 銀行オンラインジャック
一億分の一秒の侵入者 和久峻三

長編法廷推理
失踪宣告 和久峻三

パニック長編
東京インフェルノ 和久峻三